

目次

はじめに

【Ｑ 7】 官兵衛の晩年

- 1・官兵衛の晩年 @『黒田家譜』
- 2・官兵衛の晩年 @『黒田如水伝』
- 3・官兵衛の晩年 @教会側の史料
- 4・官兵衛の臨終 @『黒田如水伝』
- 5・官兵衛の臨終 @教会側史料
- 6・まとめ

【Ｑ 8】 官兵衛、亡くなる！

- 1・『黒田家譜』の記載がそつけない過ぎ!?
- 2・葬儀は仏・キリのダブルで！
- 3・埋葬はいずこへ～？
- 4・官兵衛の死のニュースは、列島を駆け巡った—————
- 5・崇福寺の黒田家墓所
- 6・福岡城の鬼門
- 7・殉死に関する官兵衛の卓見

【Ｑ 9】 官兵衛の遺こした物

- 1・キリシタン関連の遺物
- 2・キリシタン関連以外の遺物・遺構
- 3・まとめ

【Ｑ 1 0】 官兵衛、明石掃部を保護

- 1・総論
- 2・明石掃部って、だれ？
- 3・黒田家との関係
- 4・明石掃部、キリシタンとなる
- 5・宇喜多騒動を収拾する
- 6・関ヶ原の戦い
- 7・関ヶ原の戦いのあと
 - (1) 助命嘆願、知行宛行
 - (2) 所領没収、秋月へ
 - (3) その後、10年ほど行方を暗ます
 - (4) 大坂の陣での活躍
- 8・明石家の子孫

【Ｑ 1 1】 側室を持たなかったことの真相

- 1・戦国大名って側室は当たり前だったの？
- 2・他の戦国武将たちの側室事情
 - (1) 側室を持っていた武将たちは————
 - (2) 側室を持たなかった武将たちは————
 - (3) 側室をもっていたけど、やめた人たちは————
 - (4) 黒田家の人々は————
- 3・官兵衛は側室を持ったかどうか
- 4・キリスト教で一夫一妻を主張する理由
- 5・秀吉が一夫多妻をやめられなかった逸話
- 6・細川忠興が「汝、姦淫するなかれ」を許容できなかった逸話
- 7・夫婦の愛
- 8・側室を持たなかったその他の理由
- 9・正室、光の方は受洗したのかどうか
- 10・まとめ

【Ｑ 1 2】 人を殺さないポリシーの真相

- 1・貝原益軒の『黒田家譜』
- 2・金子堅太郎の『黒田如水伝』
- 3・福本日南氏『黒田如水』
- 4・単に個人の性格か、孫子の兵法などによるものか
- 5・官兵衛が殺人に積極的に関与した話
- 6・まとめ

【Ｑ 1 3】 キリスト教以外の宗教に対する態度

- 1・日本各地で宗教対立が起きていた
- 2・信長、秀吉、家康の宗教政策
- 3・一方、官兵衛の宗教政策は————
- 4・キリシタン王国の建設を目指したのでは？

【Q14】 官兵衛の生き方全般

- 1・私利私欲に奔らない、徒らに富貴や名誉を望まなかった点
- 2・合理主義だった点
- 3・姦淫をしなかった
- 4・殺戮を好まなかった
- 5・上に立つ者が下々の者たちに支持を得られるように行動した
- 6・儉約家だった点
- 7・隣人愛
- 8・まとめ

【Q15】 官兵衛がキリシタンだったことの影響 ―息子長政―

- 1・全体像（中津時代以降の長政）
- 2・中津時代
- 3・関ヶ原の戦い直後
- 4・筑前入封後
 - （1）全体評価
 - （2）長政のキリシタン政策の影響
 - （3）博多での布教の盛衰
 - （4）キリシタン武士の受け入れ
 - （5）異教徒
 - （6）官兵衛の遺言と葬儀
 - （7）官兵衛の三回忌
 - （8）長政の弾圧

【Q16】 官兵衛がキリシタンだったことの影響 ―弟、直之（惣右衛門）―

- 1・直之って、だれ？
- 2・直之が筑前国に入るまで
- 3・筑前入国後（@博多）
- 4・布教の様子（@秋月）ほか（1601～7年頃）
- 5・死への準備、そして臨終（1608年頃）
- 6・葬儀（1609年頃）
- 7・埋葬
- 8・長男直基の死、秋月の知行地を没収
- 9・ここ最近の動き

巻末史料

参考文献

はじめに

上巻では、官兵衛が有岡城の挫折を経て、キリシタンになり、秀吉の伴天連追放令の下で、苦労しながら、信仰を貫く姿を見てきた。秀吉の死後、いち早く家康に接近し、その見通しどおりに、家康が勝利して、長政は勲功によって筑前一国の大封を得て、大大名に出世した（豊前12万石から筑前37万石へ）。官兵衛自身も劣勢を跳ね返して、九州を席卷した。このとき、官兵衛、55歳。すでに老境に入っていた。官兵衛は人生最後の戦いに勝利した。

果たして、官兵衛は望み通りキリシタン王国の建設ができたのだろうか。また、晩年をどう過ごしたのだろうか。

この巻では、官兵衛の晩年や死の前後を見ていきたい。また、総括として、彼の生き方に与えたキリスト教の影響をまとめてみていきたい。そして、官兵衛を取り巻く人物たち（息子長政、弟直之、明石掃部（全登））の視点から官兵衛をみてみたい。

官兵衛の生涯自体になじみがない方のために、細かい史料の解説はできるだけ避け、平易になるように努めた。

官兵衛はキリシタン武将の中でも幸せな晩年、“尻上がり”の晩年を送っている。私自身はキリスト教徒ではないが、その生き方に共感できる部分や学ぶ部分が多く、できるだけ多くの方に知って頂きたいというのが、私の思いである。

官兵衛の辞世の句は、「おもいおく言の葉なくてついに行く 道は迷わじなるにまかせて」である。意味としては、死に臨んで何も思い残すことはない。死という道に迷いを持たず、なるに委せて行こう、ということだろう。そのような境地に達した官兵衛が、現代の私たちに問いかけているものは何だったのか。それを考えるきっかけになれば、幸甚である。である・・・である・・・

信長「・・・である、か」

わたし「信長さん、あなたも官兵衛さんみたいにうまくやったらよかったのに」

信長「・・・猿も、ちょっとやりすぎたし、の」

秀吉「恐れながら、上様、家康めが私を悪く書いたのでございます！」

官兵衛「お二方。今だから言えますが、・・・」

信長「んん？もっと大きな声でしゃべれ」

秀吉「官兵衛、この本読ませようという策略か」

官兵衛「ご明察。この本を読んで頂きとう、ございます」

平成26年1月24日

官兵衛の眠る博多の地にて

著者しるす

【Q7】 官兵衛の晩年

関ヶ原の戦いの後、筑前国に入封した黒田家。官兵衛も筑前に入る。

官兵衛は晩年をどう過ごしていたのだろうか。キリシタンとしての活動を中心にしてみたい。

官兵衛も連歌や茶の湯などの趣味人であったことから、福岡城の築城などの政務の傍ら、それら余生を楽しんだと思われる。ただ、心配事がなかったわけではない。黒田藩の行く末と、キリシタン教団のことであった。前者は、当然でもあると触れられている本も多い。しかし、後者はあまり正面から述べられた本がない。

秀吉の死後から徳川幕府の草創期において、キリシタンの禁制が続いていたとはいえ、弾圧が緩んだ時期に官兵衛は博多においてキリシタン教団の保護に熱心になっている。さまざまな証拠があり、官兵衛が棄教などしていなかったことが理解できる。それらの証拠を見ていきたい。

とはいえ、官兵衛の晩年の流れを確認するところから、話を始めよう。まず、以下の年表を読んでみて頂きたい。関ヶ原の戦いの論功行賞で、長政が筑前国に封じられてから亡くなるまでを抜粋している。

和暦 （西暦） 年齢	官兵衛に関係が深い事項	一般的な事項
慶長5 （1600） 55	11月15日 中津城に凱旋。 12月8日 長政と共に筑前国名島城に入る。 12月31日 大坂に上り、家康と会見。	閏3月 前田利家死去。 石田三成襲撃事件で、三成が奉行職を免じられ、居城の佐和山に退く。
〃 6 （1601） 56	この年、福岡城の築城開始（福岡の地を福岡と改称）。 完成までは大宰府の庵に住む。 福岡城下に教会堂を建てる。	
〃 7 （1602） 57	5月 伏見に上り、家康に拝謁したあと、伏見の黒田藩邸に入る。	
〃 8 （1603） 58	1月 大坂に上り、高台院（秀吉の正室おね）を見舞う。 2月 福岡に戻る。 4月 神屋宗湛の茶会に出席。 8月 上洛。 11月 有馬温泉に湯治し、越年する。	2月 家康、征夷大將軍に任じられる。 7月 秀頼に徳川秀忠の娘千姫が嫁ぐ。
〃 9 （1604） 59	2月 伏見に戻っていた如水の病状が悪化。福岡にいた長政は如水の見舞いのため伏見に上る。 3月 伏見の藩邸で死去。	

（「黒田如水―百姓の罰を恐るべし―」小和田哲男著 ミネルヴァ書房 2012年1月発行 の巻末年表に加筆修正して作成）

この期間は、筑前の領国支配の基礎を固めていた長政をバックアップしながら、太宰府に住み、のちに福岡城内に引越して、博多の文化人とも交流しつつ、京都伏見にも上って家康と会見している。

1・官兵衛の晩年 @『黒田家譜』

天の巻（上巻）Q1で述べたとおり、『黒田家譜』には、キリシタン関連の事蹟は全く触れられていない。とはいえ、皆さんの理解のため、ここに書かれた記事を並べてみたい。以下に箇条書きにする。

- ・官兵衛は筑前から上京して、家康に会見した。家康は終始味方をし、九州での戦功もあった官兵衛に対して、長政とは別に上方で領地を与え、さらに官位を（従五位下勘解由より上に）進めようと言った。しかし、官兵衛は丁重に断っている。自分はもうこれ以上の功名や富貴を望まない、長政に筑前一国頂いただけで十分だと言ったという。

- ・筑前入国後に、名島城を前領主小早川氏から引き継いだ。名島城は手狭であり（城下町の発展が望めなかったため）、（複数の候補地の中から）要害かつ交通の便のよい福崎の地を選んだ。福崎を、祖先の創業の地、備前国福岡にちなんで福岡と改名し、築城を開始した（福岡城は7年後に完成する）。

- ・最初は太宰府に住んだ。戦火で焼け落ちた天満宮を再建し、千石を寄付した。その恩を感じた神主たちが官兵衛の連歌会に毎回参集していた。

- ・太宰府滞在から一年ほどのち、福岡城三の丸に居を構えた。太宰府の屋敷は神官大鳥居家に与えられた。居宅は質素で、召使いは（妻の光の方と合わせても）せいぜい十数名と非常な少数だった。

- ・官兵衛は福岡にて亡くなった（としている。しかし、京都伏見が有力（『黒田如水伝』））。

- ・官兵衛が残した遺訓については、長くなるので、ここでは省略する。必要な部分は本書の別箇所に既に述べているので、ご参照頂きたい（Q14）、それ以外については別巻で述べたいと思う。

と、『黒田家譜』に書かれているのは、ざっとこんな感じだ。

2・官兵衛の晩年 @『黒田如水伝』

次に金子堅太郎『黒田如水伝』には、どう描かれているのだろうか。

まず、「また、家康が、天下の政権を伏見に置くのにあたっては、如水もまたこの地にとどまって、常にキリスト教徒のために周旋したので、家康も宣教師とその信徒に対し、厚意をあらわした」（第十三編第五章）とあり、家康に相当な恩を売った官兵衛は、関ヶ原の戦いのあと、キリスト教の布教の自由や教会堂をはじめとする拠点の建設（そのための地所の付与）、寄付などを自由に行えるように、家康に訴えたのだろう。家康は内心どう思っていたかわからないが、官兵衛が存命中は黙認していた（天の巻（上巻）【コラム】徳川政権でキリシタンが禁止された経緯、理由は？ ～許可にはじまり追放・迫害へ～ 参照）。

次に、「その後、如水が住居を福岡に定めると、彼はすでに政治に関係する必要がなかったので、もっぱらキリスト教の普及に一身を捧げた。そのため、長政もまた父の模範に倣って、以前よりも一層、その信者であることを示し、これによりキリスト教の団体は、各地方から福岡に移住してきて、殊に明石掃部、および毛利フランシス（秀包の嫡子）の移住したことにより、いよいよキリスト教の熱心さの度を高め、終に筑前はその宗教の中心となった」（第十三編第五章）とあり、博多でのキリスト教布教を支援し、明石掃部（全登）らキリシタン武将を保護している（明石掃部の保護については、Q10を参照）。毛利秀包は関ヶ原の戦いで西軍についたため、筑後久留米城を改易になり、久留米のキリシタンたちは筑前に移住したことは後述する。

そして、『黒田如水伝』の中で引用されている『黒田年譜』には、「居宅も美麗を望まず、飲食も粗食にせよと言って、三の丸の館も質素で、召使いは、輕士の四、五名と、小者七人で、夫人の櫛橋氏の侍女も五、六人に過ぎなかった」とあり、これは『黒田家譜』と同様の内容で、官兵衛の質素な生活を物語っている。

『キリシタン研究』には、官兵衛の日常生活の様子がわかるエピソードが紹介されている。

「かつて家人たちに、道にて私に会っても、避けるなど言つて、城下に出かけても、若者に刀を持たせて、小者一人を従えるだけで、常に子供たちを愛されていたので、官兵衛が来たのを見ると、五、六歳から十歳くらいの武士の子供たちが、あちこちから集まって来て、官兵衛を取り巻いた。ときどき、小鳥、菓子を人に持たせて、子供に与えていた。または、官兵衛の屋敷に来て、官兵衛様今日も早く遊ぼうよ、お供しましょうと催促して、官兵衛が出てこなければ、屋敷に入って遊び戯れ、障子を破って、庭を掘り返して日が暮れた。明日になれば、また子供たちがやってくる、ということが繰り返されていた。

また、官兵衛が散歩して疲れたときには、臣下の貴賤を選ばず、その道筋に従って、その居宅に立ち寄り、直に奥に入つて、茶を飲み休息をしたので、その妻子たちは、次第にこのことに慣れて、憚るところもなくなり、官兵衛が門前を通つたことを聞くと、下女を行かせて、お立ち寄りくださいと向こうから言ってくるようになった。」

この記事にあるように、官兵衛は大大名の藩祖であり、智謀縦横の人であつたが、日常生活ではその片鱗も見せず、まさに好々爺で、相手の身分の上下や年齢、性別を問わず優しく接し、家臣領民に慕われていたことがわかる。子供達が泥足で廊下を走ったり相撲を取ったりで襖や障子を破いたりしたが、決して怒ったり叱ったりしなかったとされている。作家の海音寺潮五郎はこの事を指して、信長・秀吉・家康の三英傑より人間的には勝っていると評した。

これら官兵衛の人柄、特に晩年における彼の生活について諸史料に挙げられている記事は、キリシタンという言葉は使っていないものの、彼の内心にあった信仰を物語っている。彼が、福岡で領民の上下をかまわず皆と親しく交わり、人々の精神的・物質的問題に深い関心を抱いたなどの記事は、かつてルイス・フロイスが高山ダリヨ（注1）について描いたイメージに似ている。

3・官兵衛の晩年 @教会側の史料

では、次にキリスト教教団側の史料を順に見ていこう。

バジェス『日本耶蘇教史』は、引退後の官兵衛について、こう記している。大意は、こうだ。

官兵衛が引退後の住まいを福岡に定めたあとは、政治に関係する必要がなく、もっぱら耶蘇教の普及に一身を捧げた。よって長政もまた父の模範に倣い、従前よりも一層、その信者たることを示した。これにより耶蘇教の団体は、各地方から福岡へ移住してきた。ついに筑前はその宗教の中心となった

と書かれており、官兵衛がイエズス会からの期待（小西行長の代わる「柱石」）を受け、布教などを熱心に保護したことを背景にして、博多を中心に筑前でキリスト教が盛んになっていた様子が判る。

また、関ヶ原の戦いの後、西軍について大津城を攻めた毛利（小早川）秀包は所領を失った。当初、毛利輝元の領地は没収し、家康に内応した吉川広家に周防・長門が与えられる予定であったが、吉川広家は毛利本家に残すように嘆願して家康に容れられた。秀包もそれに従って久留米城を新領主田中吉政に引き渡して、防長に引き揚げた。田中吉政自身はキリシタンであり寛容であったものの、秀包の時代に受洗した多くのキリシタンたちは、官兵衛や直之がいる筑前に移住したことが記録されている。

「久留米のキリシタンの貴人たちが大勢で筑前の国へ移住し甲斐守（引用者注 黒田長政）の従臣となった。我らは彼らの教化によって、偶像教徒たちが我らの信仰の知識を得、ついにはそれを受け入れて一層容易にキリシタンになれるであろうと期待している。」（1601年2月25日付、長崎発信、ヴァレンティン・カルヴァーリュのイエズス会総長宛、日本年報補遺）

やはり、それだけ教団側の官兵衛への期待が大きかったのだろう。

4・官兵衛の臨終 @『黒田如水伝』

なぜか臨終の場面は『黒田家譜』には書かれていない。このあたりも作為を感じないでもないが、それはさておいて、『黒田如水伝』をみてみよう。

官兵衛は伏見の藩邸で病床にあった。傍らにいた長政及び栗山備後に対して、愛用の合子の甲と唐皮の鎧を、栗山備後に与えると言った。その理由を官兵衛は次のように言っている。

「いま黒田家が栄えているのは、この甲冑のおかげであるが、今日以降は、四郎右衛門（引用者注 栗山備後利安）はこの甲冑を私と思え。元来、これは筑前（引用者注 長政）に譲るべき品であるが、考えることがあって、今これを四郎右衛門に与える。わしの死後は、（四郎右衛門は）筑前を我が子のように思つて補佐してくれ。また、筑前は四郎右衛門に対し、わしが若くなったと思つて、四郎右衛門の諫言に背いてはならぬ。」（『福岡啓藩志』からの引用）長政・備後はともに号泣して、謹んで遺命を守りますと言った。

また、殉死をやめさせようとして次のように言っている。

「世間では主君のために追腹を切ることは、当たり前のことであるが、追腹を切つて死んだとしても、わしに従つて、地獄極楽を駆け巡ることはないだろう、わしはただ能力がある部下を一人でも多く延命させて、大切に思う子に譲りたいから、必ず殉死を禁じて欲しい」（『夢幻物語』からの引用）と懇ろに殉死の無益を説諭したとしている。

また、自分の葬儀は鄭重に営んではないし、法事・供養に力を入れてはならないと諭している。自分に対しての一番の追善は、部下を愛し、民を慈しみ、正直なものを称揚し、曲がつたものを排除し、孤独な者や弱っている者たちを哀れみ、賢明なものに親しみ、佞者を遠ざけることがだ、と訓戒している。

そして、辞世の句「おもいおく言の葉なくてついに行く 道は迷わじなるにまかせて」を自ら短冊に書し、署名して長政に与えた。

さらに、官兵衛の死去の場所に関して、福岡説と伏見説があるが、『黒田如水伝』では伏見説をとっている。

5・官兵衛の臨終 @教会側史料

教会側の史料には、次のように記されている。

「とにかく2月（3月）に入ると官兵衛の容体が思わしくないという知らせを受けた長政は大急ぎで上洛し、父の病床へ馳せ参じた。それで、黒田長政・栗山備後などが立ち会っているあいだ、官兵衛は慶長9年3月二十四日（1604年4月23日）に伏見の黒田邸で最期を遂げた。死ぬ前に、神父を呼ぶようにと頼んだが、周りの人々がそれを聞き入れなかったそうである」（『キリシタン研究』 傍線引用者）

「臨終の際、彼は告解するために神父を呼ぶように願った。しかし、彼の側近は、何故かと言って神父を呼ばなかったで、彼は死ぬ前に告解することができなかった。しかし、自分のアニヌ・デイ（注2）とロザリオを持ってくるように願い、自分はキリシタンとして死にたいと言いながら、それを胸の上に置いた。それから自分の死骸を博多の神父の所へ持ち運ぶように命じ、また自分の息子には、領内において神父たちに好意をよせるように、と遺言の中で言った。そして同じ遺言の中で、イエズス会に二千タエス（註、約三百二十石にあたる）を与えた。すなわち、一千タエスを長崎の司（管区長）に、他の一千タエスを博多において教会を建立するためにあてた」（『キリシタン研究』 傍線引用者）

とあり、臨終において他でもないキリシタンとして死にたい、死ぬ前に告解したいから神父を呼ぶように言っていることが明示されている。また、長政に対して領内でのキリスト教保護し、相当の寄付をするように指示している。

6・まとめ

これらを踏まえて、官兵衛の晩年をまとめてみよう。

慶長5年(1601)12月に名島城は正式に黒田氏に渡され、黒田父子が入城した。その後、まもなく長政に促されて官兵衛は上洛し、同年2月に大坂で家康に会って、その年の大半を京都で過ごした。5月に入ってから、官兵衛・長政の二人は、伏見で家康に会った。長政はその後もしばらく畿内に残ったらしいが、官兵衛は5月25日に帰国をひかえて、京都の友人(茶人)と連歌の集いを催した。

帰国後、官兵衛は長政の代理として、知行宛行の仕事を監督し、その際、明石掃部とその家臣の待遇について、長政の指示に反して自分の責任で、彼らの知行を与えた。また、福岡の築城工事も本格的にはじまったので、官兵衛も、その深い慮慮と豊富な経験によって、積極的に参加した。官兵衛はその頃、太宰府の隠宅に住んでいたが、次第に形をなしつつあった新しい福岡城の建築現場に出かけた。そのうえ博多では、旧友であり茶道の絆で結ばれていた神屋宗湛などの茶人をも一度となく訪れたに違いない。その年10月9日の茶会については、宗湛日記でも言及されている。

慶長6年(1602)正月15日に、官兵衛と長政は宗湛の宅で茶会を催し、翌16日に福岡で連歌会を行った。この年、長政は官兵衛および惣右衛門直之の依頼に応じて、博多で教会の地所を提供し、条件付きの伝道許可を与えた。しかし、そのために仏教側から強い反対運動が起こり、教会の存在が危うくなった時、官兵衛ではなく惣右衛門直之がその処理にあたった(直之が処理にあたったのは、おそらく官兵衛が上洛中だったため)。

同年の夏、官兵衛は京都に行き、伏見で家康にも謁見した。9月に九州に戻った。博多教会の地所で、自分の名義で一軒の家を建てさせた。

なお、この年の11月9日に、福岡城東ノ丸で、長政の長男が生まれた。官兵衛は大喜びで、「万徳」という名をつけた(のちの二代藩主忠之)。自分の幼名「万吉」にちなんで名付けられた。

その頃、築城工事はかなり進んでおり、城内の西北の三の丸に、官兵衛の好みに沿った質素な隠宅ができた。それで太宰府の家を神官大鳥居信岩に与え、自分は福岡に移った。

慶長7年(1603)の初め、官兵衛は大阪に行き、そこで高台院(秀吉の正室おね)を訪れ、2月に筑前へ帰った。その年の4月29日に神屋宗湛の茶会に出席している(『宗湛日記』)。

秋になると官兵衛はまた上洛し、すでに害していた健康のため上方の名医の治療を受けることにした。体力がますます衰えてゆくことを聞いた神屋宗湛は、蜜・甘酒などの見舞品を贈ったので、官兵衛は10月24日に礼状を送った。官兵衛は有馬温泉に行き、そこから11月15日に宗湛宛の書簡を送っている。新しい年をも有馬で迎え、その後伏見へ戻った。

教会側の記録では、「慶長9年(1604)の初めに、官兵衛は上(引用者注 上方)において死亡した。すでに健康状態が思わしくなかった。自分の家で死んではならないことが大名たちの習わしなので、治療のためにそこへ行っていった」(『マツス神父の回想録』)とあり、官兵衛が伏見へ行ったとき、すでに死を覚悟していたのだろう。慶長9年(1604)の3月、官兵衛は京都伏見の黒田藩邸で息を引き取った。享年59。

辞世の句は、「おもいおく言の葉なくてついに行く 道は迷わじなるにまかせて」という歌を残している。意味としては、死に臨んで何も思い残すことはない。死という道に迷いを持たず、なるに委せて行こう、ということだろう。

素直に解釈すれば、有岡城の幽閉が始まって、秀吉と疎遠になるという困難に直面しながらも、キリシタンとしての信仰を貫き、関ヶ原でも読み通りの結果を得て、筑前一国の大大名に出世することができた。やれることはすべてやってきたし、すでに何の不足もない。道半ばのキリシタン王国の建設は弟直之に任せて、一人のキリシタンとしてデウスの御許に帰ろうということだろう。

戦国武將の辞世の句としては、「夢のようにはかない人生だった」(秀吉)、「重荷を背負って遠い道をゆくようなものだった」(家康)、「まだ何も成し遂げていない、志半ばでこの世を去るのは残念だ」(蒲生氏郷)であるなどどちらかというとネガティブなものがあるなかで、官兵衛は「もう思い残すことはない」というポジティブな歌を残している。ちなみに、息子の長政は「此ほどは浮世の旅に迷ひきて、今こそ帰れあんなくの空」となんとなく一生が終わってほっとしたというような雰囲気を感じられる。

シナの孔子は、「棺を蓋(おお)いて事定まる」(棺桶の蓋が閉まってから、その人物の真の評価が定まる)と言っている。死んだときに初めてその人の評価が決まるということだ。紙幅がないので触れることができないが、華々しい実績をあげた戦国武將の中にも、晩節を汚した者もあり、一方、晩年になってようやく名を挙げた者もいる。官兵衛は青年期や壮年期は頭が切れることで返って失敗をしたこともあったが、晩年に至って大きな器になって、大成功をおさめることができた。「おれはもう終わりかも知れない」と有岡城の牢獄でどん底に陥った官兵衛のように、今はなかなか結果が出ずにくすぶっていても、倦まずに努力を積み重ねていけば、時間が経たなくても実を結ぶかも知れないから頑張る!逆に、今は人生の楽しさを謳歌していても、いつ転落するかわからない。それは突然やってくるから油断するな!終わりなければすべてよし。途中がいくら良くても、終わりがよくないと悔を残すよ。官兵衛の歌は、そういう励みだと味わっている。

官兵衛が亡くなったあと、どうなったのか、それは次のQ8にて。

(注1)

高山友照。高山右近の父で、洗礼名ダリヨ。摂津国(大阪)高槻城主。信長に仕えた。ロレンソの説教を聞き、永禄6年(1563)に受洗し、京都地方へのキリシタン伝道の道を開いた。右近に家督を譲ったのち信仰一途に生き、領民に信仰を説き、愛を实践した。摂津国主荒木村重の挙兵に従ったため、信長によって越前(福井県)に追放されたが、のちに右近と住み、京都で没した。

(注2)

アニウス・デイとは、ラテン語のAgnus Deiの音写。アグヌス・デイとも表記する。

神の子羊の祈祷文(神羔頌、神羊唱)にもとづく楽曲、特にミサ曲の一部。神の子羊は、イエス・キリストを象徴する表現の一つ。神の子羊の祈祷文は、カトリック教会の聖体祭儀、一部のプロテスタント教会の聖餐式、正教会の西方奉神礼において用いられる。

【Q8】 官兵衛、亡くなる！

慶長9年（1604）3月、官兵衛が亡くなった。彼の死の前後を通して、官兵衛がキリシタンとしてどう死んだかを、みてみましょう。

官兵衛は、慶長9年（1604）3月、伏見城下大亀谷の藩邸で亡くなったことは前のQ7で述べた。このQ8においては、葬儀の様子などを通して、官兵衛がキリシタンとして死にたいと言ったことが具現化されていくことを確かめたい。

ちなみに、なぜ伏見城かというと、当時は徳川幕府が成立する直前の時期で、政治の中心は京都・大坂であり、家康が伏見城で政務をとったためであった。なお、伏見城は秀吉が隠居城とした城で、彼が亡くなった城であったことから、豊臣家が全国支配を担った城であった後半を桃山時代という。関ヶ原の戦いの前哨戦で徳川方が籠城した際、戦火で焼失した。その後、家康が再建している（藤堂高虎が普請奉行を務めている）。

葬儀は、キリスト教式（官兵衛の遺志）と仏教式（大名家の葬儀としての体裁、幕府への配慮）の二パターンで行われた。通常の大名であれば仏教式のみであっただろうが、キリスト教式を官兵衛は選択した（キリスト教式は、体面や幕府への配慮をしようとすれば避ける方式であろう）。

熱心なキリシタンでなければ、このような遺言はありえない。

また、幕府への体面をそこまで気にする必要がなかったこともあったのだろう。幕府は、官兵衛が亡くなった時期はまだ成立したばかりであり、豊臣家は現存していた。だから、キリシタンについて特に厳しい禁令を敷いていたわけではなく、弾圧も行われていなかった。官兵衛が家康にキリシタンの保護の諒解を得たことはすでに述べた。幕府の監視の眼が厳しければ、キリスト教式を官兵衛は選択しなかっただろう。

また、領内では反キリスト教勢力が藩主長政を動かして、キリスト教が弾圧される恐れがあり、官兵衛としては自分の葬儀をキリスト教式の葬儀を盛大に行わせ、それを通じてキリスト教を知らない人々にも、キリスト教に触れるきっかけを作ろうとしたのかも知れない。そこまで配慮して、官兵衛はキリスト教式の葬儀を遺言したものと思われる。

それでは、長政は父・官兵衛の葬儀、遺体の埋葬について、見ていこう。

1・『黒田家譜』の記載がそっけな過ぎ!?

官兵衛の葬儀や埋葬に関して、『黒田家譜』の記述はそっけない。「官兵衛の遺骸は、那珂郡十里の松の中、崇福寺に葬る」とのみ記載されているだけだ。葬式の月日、儀式の次第書など葬儀の状況については、少しも記載していない。長政の葬儀はきちんと記録されているのに（注1）、官兵衛のことをがきちんと記載していないのは不自然ではないだろうか。それでいいんです！というわけにはいかない。ムムっ！と不自然さに感づかなくては。

一方、郷土史家の長野誠が記した『福岡啓藩志』は『黒田家譜』よりも、葬儀の状況というべきものを少し詳しく記していて、金子堅太郎が『黒田如水伝』に引用している。

「長政君が春屋（引用者注 春屋宗園。臨済宗大徳寺の住持）を招かれたが、八十歳であつて（引用者注 京都からの）下向が難しいとして、法弟の賢叟を下向させた。彼は、導師として、君（引用者注 官兵衛）の遺骸を崇福寺にて火葬した。」

これだけ読むと、官兵衛は他の多くの大名と同様、仏式での葬儀が行われ、（ここに記載はないが、墓が現存している）禅宗の古刹大徳寺と菩提寺である崇福寺に葬られたんだな。ここに一世の英雄、黒田官兵衛、安らかに眠っているんだな。ご冥福をお祈り致します・・・で終わって本を閉じてしまいそうだ。『黒田家譜』を有り難く拝読していた福岡藩士たちであれば、それでもよかっただろう。

しかし、実は、仏式の葬儀だけでなく、キリスト教式の葬儀が博多にて営まれていたことは、宣教師らの記録から明らかなのである（詳細は後述）。なのに、どうして『黒田家譜』に葬儀の記述がないのか。

これも、天の巻（上巻）Q1で述べたのと同様の理由で、『黒田家譜』には、書けなかったのである。

その理由以外にも、『黒田家譜』が編纂された時期にはすでに黒田藩の財政は逼迫しはじめており、領内で質素儉約を励行する折に、まだ財政的に豊かな時期の華美な葬儀を強調することができなかったから、書かなかったということもあろう。いつそカットしたら、葬儀が華美だったから、質素だったか、判らないだろう、と。まさか、官兵衛の遺言通り、長政が官兵衛の葬儀を簡素にしたはずがない。高貴な武家の葬儀について、秀吉が執り行った信長の葬儀を想起すれば足りる。ましてや官兵衛の葬儀であったから、その地位にふさわしい盛大なものになっていたはずだ。築城に際して、資材や人夫から石垣の石材まで送って協力した近隣の諸侯も、官兵衛の死を惜しんで参列したはずである。福岡城から菩提寺の崇福寺までの約一里、その沿道は葬列を見送る士民であふれたであろうし、「黒田二十四騎」が盛装して馬揃えをして、崇福寺まで進んだはずである。

そんな目立ったイベントだったはずなのに、あえてカットしたのは、書けない理由があったからで、それはおそらくキリシタンに関わることだろう。

2・葬儀は仏・キリのダブルで！

『黒田家譜』の記載が素っ気ないことに疑問を持った金子堅太郎も『黒田如水伝』の中で、シュタイチェン『キリシタン大名』やバジェス『日本耶穌教史』を引用し、キリスト教式の葬儀があったことを喝破している。

(1) キリスト教式の葬儀の様子

「官兵衛は瞑目するに先立って、嫡子長政に命じて、その遺骸を博多に送り、先に黄金千枚を寄付して、かの地に新築した耶穌教の寺院に埋葬させた。このとき耶穌教の僧侶が挙行した荘厳な葬儀は、一時、長政と耶穌教とを結束する連鎖となって、その関係を親密にさせた」(シュタイチェン著『キリシタン大名』)

「葬式は荘厳に営まれ、甲斐守長政は一家を挙げてこれを援け、人々はみなこれを褒めた。異教の葬儀は華麗で人を感動させた点で、他はこれに遠く及ばない。」(バジェス『日本耶穌教史』)

これを見ると、キリスト教式の葬儀が行われていたことは確かなようである。

ただ、これらの著者のソースデータとなっているのは、当時の宣教師たちが残した記録である。葬儀を司式したラモン神父と、マトス神父の記録だ。二人は葬儀の様子をさらに詳しく書き残している。

一つ目は、官兵衛没後から数ヶ月後、すなわち1604年11月23日付で、ローマ・イエズス会本部に送った年度報告である。報告書そのものは、長崎にいた管区長秘書ジョアン・ロドリゲス・ジランの編成であるが、博多に関する記事は、当地の主任であって葬儀を司式していたラモン神父の報告であった。もう一つの記録は、葬儀に参加したガブレエル・デ・マトス神父の回想録である。ただし、それは、マトス師が約20年後にマカオで書いたものであるので、記憶が曖昧となっている部分があり、多少、注意を要する(ただ、葬儀自体の描写には問題ないだろう。出来事が起きた年度が前後している記事がみられる点があるだけ)。ここでは、後者のマトス神父の回想録を紹介しよう。

「彼の遺体が上(引用者注 上方)から博多に到着したとき、いったん我らの所に安置され、そして僅か数日のあいだに極めてきれいに装飾のほどこされた龕(ガン)、すなわち彼を納めた小さな葬台が出来上がった。それで4月のある夜の10時と11時のあいだ、我らは彼を、博多の町の郊外にあってキリシタンの墓地に隣接している松林のやや高い所に埋葬した。葬列のとき、彼の嫡男筑前殿およびその領国の重立った家臣が彼の遺体につきそい、年寄衆、諸城の城番—彼らは転んだキリシタン—は龕(ガン)を担い、彼の弟で真の立派なキリシタンであった惣右衛門殿(引用者注 黒田直之、官兵衛の弟で秋月の領主)が十字架をかがげ、その一人の息子左平次殿(引用者注 黒田直基)と町の支配人宗也(引用者注 博多の惣司、徳永宗也)の孫で高木彦左衛門の息子とが松明を持ち、ペロ・ラモン神父と私(引用者注 マトス神父)はカップ(引用者注 半円形の祭服)を着し、修道士ニコラオ〔永原〕と同宿たちはソブレリチェス(短白衣)を着ていた。

葬列は穴に近い所から始めて、板で仕切った大きな構内で行われたが、その中へは領国の貴族以外の誰も立ち入りが、死刑のもとで禁じられていた。墓穴は二百人も埋葬できるものであったが、その中に着いたとき、我らは〔死者の聖務の〕朝課の一部および葬儀の典礼をうたった。そして彼を埋葬した。彼の遺骸の柩のほか、彼らは同じ墓穴に、幾つかの他の柩を葬った。しかし私はその時に、またその中に何を葬ったか知ることはできなかった。ある人の話によると、それは何人か殉死した人の遺骸であった。また別の話では、彼は著名な武将であったから、戦争のときに用いた武器や道具であった。またある人は別なことを言った。—そして領国の重立った武将たちは皆そこで元結を切って、それを一緒に墓穴へ投じた。

その夜、我らが我が住院に帰ってから間もなく、筑前殿が、父の遺骸を埋葬したことを感謝しに、我らの所へ来られた。それは、我らの住院の中へ入ったことの最初であったが、すでに夜中であったので、彼はサカズキのあとで、ちょっとだけ話しをした。翌日、彼は米五百石、すなわち一千俵を贈った。その中の四百俵は父の冥福のために、我らがそれを貧しい人々に配るようになっていた。残る六百俵は、我らの住院のためであった。それからすぐ、新しい教会堂の建築を始める許可を与えた。というのは、今までは、ごく狭く小聖堂にすぎなかったからである。これを聞いたキリシタンたちは、たいへん喜んでた。そして官兵衛の所有物であった立派な倉を与えられたので、我らはその地所をひろげた。

それから十五日か二十日後、筑前殿は父のために異教徒の方式(引用者注 仏式)の葬儀を行った。というのは、彼が背教徒であり、それを天下(幕府)に対して表したく、一方、彼はかほど主要な国の領主であって、その葬儀を極めて盛大に行わなければならないからである。私はこれについて、もっと時間がかかるもので別の記録を書こうと思う(引用者注 しかし、その別の記録は、マトス神父は書かなかったようだ。)(『キリシタン研究』)。

とあり、要約すると、伏見から博多に運ばれた官兵衛の遺骸は教団施設に安置され、葬儀が行われた。その後、重立った家臣たちが棺をもって、博多の町の郊外の松林のキリシタン墓地に隣接した場所に埋葬された。埋葬した墳墓は非常に大きなものだったようだ。歌をうたい祈りをささげ、荘厳な雰囲気だったであろう。長政は感謝の言葉を伝えるために神父たちと会食をし、翌日、食糧と倉を寄付した。その後、長政は幕府の眼を気にして仏式の葬儀をした、と書かれている。

また、これ以外の教会側の記録には、

「彼ら(イエズス会員)は(葬儀)を彼らにとって可能で時間の許す限り盛大に行ない、(黒田)甲斐守(引用者注 長政)自身と、その多くの重立った家臣が列席した。彼らは、異教徒ながらも、蠟燭を手にして墓所まで遺体につき従った。彼らは、キリシタンたちの埋葬の仕方、それを行う敬虔さ、その際の美しさとしつらえを飽くことなく褒めた。

大勢の仏僧がこの埋葬を見に来たが、（黒田）甲斐守は指定された人以外には近寄ることを許さなかったために、遠くから見ただけで過ぎない。彼の家臣はすべて俗人だったからである。仏僧たちは、敵とはいえ、キリシタンの埋葬の仕方をやはり賞賛せずにはおれなかった。しかし、誰よりも甲斐守（が褒めてやまなかった）。彼は、自分の父に対して行われたことをたいそう有り難く思い、感謝し、とりわけ、目撃したことに深く感化されたので、間もなく、「これまで一度もなかったのであるが」我らの修道院に来て、司祭たちに骨折りについて礼を述べた。彼がこれを甚だ鄭重に敬意をこめて行っただけで誰もが驚いた。きわめて傲慢不遜な彼の性質に反することだからである。そして、このような場合に異教徒たちは喜捨をする習わしなので、彼もまた父親の靈魂のためにそうしたいと望み、米一千俵を、一部は貧民のために、一部は埋葬の経費として、さっそく教会に贈った。」（1603、04年の日本の諸事（フェルナン・ゲレイロ編イエズス会年報集））

とあり、ろうそくが灯された吹き抜けの聖堂に、賛美歌が響きわたり、荘厳な雰囲気の中で営まれる官兵衛の葬儀は、参列した多くの人々に感動を与えたようで、仏僧たちも感嘆し、あるいは、この荘厳な様子をみて改宗した者もいたことが記録されている。

「博多で受洗した人たちの中に兵士の若者がいた。彼は、（黒田）シメアン（官兵衛）の葬儀が営まれたその壮麗さ、敬虔さを見ただけで改宗した。彼は主人の許可を得ずに受洗した。」（1603、04年の日本の諸事（フェルナン・ゲレイロ編イエズス会年報集））

このように、官兵衛が望んだキリスト教式の葬儀をあげることを長政は許容し、そのように執り行われ、多くの人々に感銘を与えたのであった。

（2）仏式の葬儀の様子

一方、仏式の葬儀は、キリスト式葬儀の15ないし20日後に盛大に行われた。これは、長政の天下、将軍に対する配慮から行われたと言われているが、確かに博多の仏寺や住民たちに対する配慮も、大いに働いていたに違いない。そして日本側の史料に残っているのは、この仏式の記録のみである（『キリシタン研究』）。

ちなみに、官兵衛の法名は「龍光院殿官兵衛円清大居士」とされた。「龍光院」は大徳寺の龍光院に由来し、「円清」は出家時の雅号である。

3・埋葬はいずこへ？

次に、官兵衛の遺骸をどこに埋葬したか、という問題がある。そんなの官兵衛の人生に関係あるの？ どうでもいい、という方は読み飛ばして頂いて構わない。興味ある方だけお付き合い頂きたい。

埋葬地には諸説あって、

- ・龍光院（京都大徳寺）
- ・崇福寺（博多）
- ・龍光院と崇福寺（分葬）
- ・その他

官兵衛の没した地は福岡城内説と京都伏見黒田藩邸内説があったが、すでに述べたように伏見説が有力だ。そして、官兵衛の墓は、大徳寺龍光院と崇福寺（ともに禅宗）の2箇所に残存している。ということで、上記のうち上の三つの説が出てくる。

（1）龍光院（京都大徳寺）埋葬説

まず、龍光院（京都大徳寺）埋葬説の根拠は以下のようなものだ。

筑前崇福寺の中の石塔と、京都の龍光院にある石塔とを対照してみると、一つは碑で、一つは墓である。

崇福寺の石塔は、墓石ではなく、全く丈あまりの碑石であって、その右側に、龍光院殿官兵衛円清居士碑ならびに序と刻み、碑には、3千あまりの長文で、官兵衛一代の事蹟を叙述して、その偉勲を讃えたことは、今日各所に建設された、名士の石碑と異なるところはない。

しかし、龍光院の石塔には、五輪の塔であって、空・風・火・水・地の文字を、一石ごとに一字刻み、その下層の台石の正面に、龍光院殿官兵衛円清と彫刻し、右側に慶長9年甲辰年、また左側に3月20日と刻んで、その埋骨の地であることを明示している。空・風・火・水・地の文字は、仏法においてこれを五蘊と言って、人間はその五つからなっていて、死んだときに、また五蘊に帰ることをいうものである。だから、この五文字を刻んだ五輪の塔は、官兵衛の肉体の権化というべきものであって、官兵衛の埋葬地は、崇福寺よりは、京都の龍光院である可能性の方が高いという理由だ。

加えて、吉川広家が臨終に際して、自分の遺骸は、龍光院内の官兵衛の墓のそばに埋葬し、長らく子孫に、官兵衛の恩徳を知らしめるべきことを遺言したことにより、広家の墳墓は、いまなお龍光院内の官兵衛の墓側に現存する。

ここから考えてみると、官兵衛は京都を政治の中心として、始終皇室にその心を傾けて、すでに播磨から豊前に転封され、また、筑前に移ったあととはいえ、絶えず上京して京都猪熊の屋敷に起居し、常に閑白をはじめ、月卿雲客と付き合うことを楽しんでた。いま現に大徳寺にある、官兵衛の墳墓が、皇居に面して建てられたのを見ると、その葵心が皇室に向かっていたことを推察することは難しくない。故に、京都大徳寺に埋葬されたとする説だ。

ただ、これによると、まだ、遺骨を二分して、その一部は京都に葬って、長らくその英魂を、皇居の傍らに鎮め、他の一部は、筑前崇福寺に埋めたという分骨説の可能性が残される。

分骨説を否定できる確証としては、昭和42年（1967）の崇福寺の墓地整理の際に、官兵衛の墓下からは北宋銭しか出土しなかったと言われることである。もし、崇福寺に埋葬されていたとしたら、もっといろいろ出てきたはずである。ちなみに、この北宋銭は六道銭（六文銭）と言って、三途の川の渡し賃だということ。ということで、崇福寺には埋葬されていない可能性は高いと思われる。

（2）その他説

しかし、本当に京都大徳寺に埋葬されたのであろうか。教会側の記録をみていくと、別の事実が浮かび上がってくる。

「官兵衛は瞑目するに先立って、嫡子長政に命じて、その遺骸を博多に送り、先に黄金千枚を寄付して、かの地に新築した耶蘇教の寺院に埋葬させた。このとき耶蘇教の僧侶が挙行した荘厳な葬儀は、一時、長政と耶蘇教とを結束する連鎖となって、その関係を親密にさせた」（シュタイチェン著『キリシタン大名』）

とあり、官兵衛は博多の教会に埋葬することを遺言していた。

また、さきほどのマツス神父の記録には、

「彼の遺体が上から博多に到着したとき、いったん我らの所に安置され、そして僅か数日のあいだに極めてきれいに装飾のほどこされた龕（ガン）、すなわち彼を納めた小さな葬台が出来上がった。それで4月のある夜の10時と11時のあいだ、我らは彼を、博多の町の郊外にあってキリシタンの墓地に隣接している松林のやや高い所に埋葬した。

・・・（中略）・・・

葬列は近くに近い所から始まって、板で仕切った大きな構内で行われたが、その中へは領国の貴族以外の誰もの立ち入りが、死刑のもとで禁じられていた。墓穴は二百人も埋葬できるものであったが、その中に着いたとき、我らは

〔死者の聖務の〕朝課の一部および葬儀の典礼をうたった。そして彼を埋葬した。彼の遺骸の柩のほか、彼らは同じ墓穴に、幾つもの他の柩を葬った。しかし私はその時に、またその中に何を葬ったか知ることはできなかった。ある人の話によると、それは何人か殉死した人の遺骸であった。また別の話では、彼は著名な武将であったから、戦争のときに用いた武器や道具であった。またある人は別なことを言った。―そして領国の重立った武将たちは皆そこで元結を切って、それを一緒に墓穴へ投じた」とあり、

また、別の記録には、

「シメアン官兵衛殿は都の伏見の政庁で亡くなった。息子（長政）に、自分の遺体を運び博多の教会に埋葬するように頼み、教会の建築のために一千クルザード以上の喜捨を残した。しかし、さしあつては、我らの同僚らは、息子（長政）の意見で彼の遺体を別の場所に安置した。彼ら（イエズス会員）は（葬儀）を彼らにとって可能で時間の許す限り盛大に行ない、（黒田）甲斐守自身と、その多くの重立った家臣が列席した。彼らは、異教徒ながらも、蠟燭を手にして墓所まで遺体に付き従った。彼らは、キリシタンたちの埋葬の仕方、それを行う敬虔さ、その際の美しさとしつづえを飽くことなく褒めた」（1603、04年の日本の諸事（フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集）

とあり、博多に遺体が送られ、教会に埋葬されたことが窺える様子が記録されている。

ということは、火葬して京都の大徳寺龍光院に葬ったわけではなく、遺体が筑前まで送られて、筑前国内に埋葬されたことは、諸書に一致している通りであり、教会側の記録が正しいならば、官兵衛の遺言通り、博多の教会の敷地内の墳墓に埋葬されたに違いない。長政は幕府に配慮して、博多で仏式葬儀を行い、京都・博多の禅寺で墓や墓碑を建てたが、そこには埋葬せず、官兵衛の遺言通り、遺体を伏見の黒田藩邸から淀川を下って、海路博多まで運び、イエズス会に預けて、博多の教会に作られた墳墓に埋葬したのだろう。キリシタンは復活の日を信じて、遺体を大切にするとされていて、土葬された可能性が高い（火葬されたとも書かれていない。ちなみに、現在の我が国においても土葬は法的には可能）。

ということで、

- ・龍光院（京都大徳寺） →×
- ・博多崇福寺 →×
- ・龍光院と崇福寺に分葬 →×
- ・その他 →○（博多教会）

その他説の可能性が高いと、私は思う。上の三つの説が出てくるのは、あくまで、長政が幕府の眼を（のちに）欺くためにもっともらしい話（禅寺に葬られた話）を流布したからか、あるいは、日本には仏式の葬儀の記録に残らなかったで、江戸時代に仏式葬儀&禅寺埋葬＝これ常識！ということで定着した説かも知れない。

（3）博多の教会堂の位置

では、その博多の教会堂はどこにあったのだろうか。

黒田長政のキリシタンに対する態度は、官兵衛の死後厚意になった。父の遺言であったので、彼は本格的な教会建築を許可するようになり、地元の反対運動に対しても、幕府側に対しても、それはキリシタンの教会としてではなく亡き父の追悼記念聖堂として建てたのだと指摘したので、幕府の方でも一応これで落ち着いたらしい。

「彼の父（官兵衛）が自分の埋葬の場所として彼に委ねていたので、殿（長政）の許可を得て美しい教会が建てられ、博多にあるもっとも見事な寺院となった。この建造には、シメアン（官兵衛）が遺した寄進のほかに、またたいのキリシタンたちが、それぞれ力に応じて、銀だけではなく人夫たちも協力した。そして異教徒たちさえ助力を惜しまなかった。これは、土地の領主が喜んで行っている工事であり、彼らの誰もが恩義あるシメアンから託された仕事だからである。その工事を手伝いたいとの希望は名望ある女性たちにすら入り込んだ、特に（屋根で）覆うことになっていた時には、下女たちとともに、夜間、月光を頼りに瓦を運び集めに来た。これには異教徒たちはすっかり驚いた。その街とその周辺には五千人のキリシタンがいる。甲斐守はそこに藩庁を有している。そのため、商人や庶民のほかにまた多数の兵士たちが改宗する。ここで、本年、六百人が受洗した。甲斐守は司祭たちとたいそう親交を深めてきており、我らの修道院に来て、何度かそこで食事をした。それによって、彼の家臣たちは説教を聞く気になり、キリシタン宗団の問題にすこぶる厚意を示してくれる」（1605年の日本の諸事（フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集））

そして、具体的な場所については、

「その場所は疑いもなく、博多と筥崎の間にあった千代の松原であつて、キリシタンの墓地もその近辺にあったそうである」（『キリシタン研究』）

というように、現在の崇福寺がある福岡市博多区千代あたりにあったとする説もある。

その後、教会は禁教令が厳しくなってから破却され、秋月藩の蔵屋敷となったという（日蓮宗教団に与えられたとする別の教会もある）。秋月は官兵衛と弟直之がキリスト教保護区にしようとした場所であり、因縁が感じられる。

官兵衛の墓はその後の教会の跡地に残り、その後、長政が崇福寺を太宰府から現在の位置に移転させて墓を囲んで菩提寺としたと言われている。崇福寺の移転時期は曖昧で、ただ「慶長年間」とされているが（貝原益軒『筑前国続風土記』、可見茂公編『福岡県寺院沿革史』（福岡、昭和5年）などは、慶長年間の移転としている。移転の年月日

について、確実な史料はない。すでに慶長7年の分限帳には、崇福寺の寺領が載っているが、所在地について言及されていない）、おそらく、1604年の官兵衛の仏式葬儀と関係があつて、間もなくその後に移転したのではないと思われる。そして長政が菩提寺と定めたので、官兵衛の遺骸を新しい教会へ移すことができなくなってしまったのであろう。そのためだろうか、教会側の史料にはその後、官兵衛の墓所について全く言及していない。

ということで、多少トリッキーだが、教会の跡地に残った官兵衛の埋葬された墓が崇福寺に引き継がれた可能性があるということで、結局、教会に埋葬したに違いないが、墓は崇福寺にあるということになるのかも知れない。ただ崇福寺の発掘調査で何も出てこなかったたので、墓を掘り起こすことなく単に形だけ改葬しただけだったのだろう。

4・官兵衛の死のニュースは、列島を駆け巡った—————

官兵衛の死のニュースは、列島を駆け巡った。官兵衛は諸大名や文化人と交流していたからであった。

しかし、ここでも『黒田家譜』にはそのニュースへの反応の記事は見当たらない。

一方、『黒田如水伝』には、

- 将軍秀忠は、官兵衛の死を悼み、長政に銀を贈った。
- 諸大名は特使を送って追悼していた。社交上の儀礼もあっただろうが、伏見にあったときに慶賀の使者が門前市をなしていた官兵衛のことだ。おそらく、多くの使者が集まったことだろう。
- 官兵衛を慕っていた吉川広家は、里村昌琢・玄仍（注2）（注3）らを招いて、官兵衛追善のため、連歌会を催した。主なものを挙げると、

「稲妻も消かへる物を憂身かな　玄仍
月はいりえの袖の夕露　広家
萩の声まどのあつさや誘うらん　昌琢
かり染ながら端居してけり　広家」

それと、広家は大徳寺龍光院の官兵衛の墓の左側五メートルほどの所に自分の生前墓をしつらえている（『吉田家伝禄』）点は、すでに述べた通り。

- キリスト教徒たちは、どうだったのだろうか。

「日本全国に散在する外国の耶蘇教宣教師および日本人の耶蘇教信徒は、痛く官兵衛の死去を嘆惜した。官兵衛の死去は、耶蘇教のためには、再び快復することができない損失となった。官兵衛は、常に家康の伏見屋敷に出入りし、彼を宣教師に対する厚意を保たせた。しかし、千六百三年（慶長九年）、官兵衛死去したので、すべての耶蘇教信徒は、深くこれを悲しんだ」（シュタイチェン著『キリシタン大名』）

- 筑前の家臣・領民たちは、どうだったのだろうか。

「ここに筑前の士民は、官兵衛の死去をきいて、ほとんど父母を失ったがごとく悲しみ、また、官兵衛恩顧の家臣は、追腹を切ろうとするものがとても多かったが、官兵衛の遺言と長政の厳命により、あえて一人の殉死者もなかった。」「このように如水は、キリスト教のために尽力したので、如水が死去すると、キリスト教徒は大いに悲しみ、かつその宗教の儀式により、如水の葬儀を博多において営んだ」（『黒田如水伝』）

5・崇福寺の黒田家墓所

長政は、博多の名刹である聖福寺を黒田家の菩提寺にしようとしたが、拒絶されている。聖福寺は臨済宗であった。家臣の墓があるのに、藩主の墓が拒絶された背景には、官兵衛がキリシタンであったことがあると言われる。

一方、キリスト教会側の記録には、当時の聖福寺が、僧たちの男色趣味で汚れきっていたためだと批難していて、それを知っていた官兵衛自身が聖福寺を菩提寺とすることを避けたとも言われている。

そこで、長政は太宰府から崇福寺を移築し、黒田家の菩提寺とした（元の場所には「大宰府別院」が建てられている）。崇福寺には、官兵衛と長政以降の各黒田藩主の墓があり、墓碑銘が刻まれている点はすでに述べた（他に、直方藩主の墓、黒田家ゆかりの人々の墓、博多の豪商島井宗室の墓、明治以降に活躍した玄洋社の墓がある）。

ちなみに、崇福寺では、昭和25年（1950）の改葬で20基以上あった墓碑が整理され、そのときに四代藩主綱政の甕棺からミイラが発見されたという。ミイラ！ムムっ！キリシタンは復活の日を信じて、遺体を大切にするとされるけど、遺体をミイラにしたということは、綱政はキリシタンだったの！？

しかし、どうやらキリシタンではなかったようだ。江戸幕府は大名の末期養子の禁止（注4）をしていて、綱政が亡くなった正徳元年（1711）6月18日以降に、嗣子を定めて必要な手続きを済ませるまで、綱政が存命であることを偽装するためにミイラにされたのであろう。

6・福岡城の鬼門

ちなみに、筆者が直感的に気づいたことであるが、崇福寺は福岡城の鬼門（北東）の方角にある。崇福寺はもともと太宰府にあった寺で、島津の侵攻の際に戦火で焼けていたのを、長政が博多の近郊の千代の松原あたりに再建させたもので、黒田家の菩提寺としたものである。先ほど述べたとおり、官兵衛は博多の教会に葬られることを遺言したが、場所は長政に委ねた。長政は、教会堂を福岡城の鬼門の方角に作ることによって、守り神にしようとしたのかも知れない。

水鏡天満宮も鬼門の位置にあったと言われ、黒田長政によって慶長17年（1612）「水鏡天満宮」として福岡城の鬼門にあたる現在の地に移転された。ちなみに、「天神」とは菅原道真のことをさし、福岡市中央区の「天神」の地名は、この天満宮の移転に由来する。幕府がキリシタン禁教令を発令した翌年慶長19年（1614）に、キリシタン宗門改めが行われた場所で二人が殉教している。

この天満宮から北に100メートルほどのところに勝立寺がある。勝立寺については、Q10で述べるが、もしかしたら、官兵衛を埋葬したキリスト教会があったかも知れないと筆者が怪しんでいる寺である。官兵衛の墓を目立つ形で崇福寺に建て、一方で、教会の墳墓に埋葬された遺体や副葬品はそのままになっていたが、慶長18年（1613）の石城問答で日蓮宗側に与えられてしまった・・・

7・殉死に関する官兵衛の卓見

さらに、官兵衛は臨終に際して、長政に殉死の禁止を厳命したので、一人の殉死者も出なかったと言われる（『黒田如水伝』）。

（1）殉死の歴史

そもそも殉死は、弥生時代の墳丘墓や古墳時代には墳丘周辺で副葬品の見られない埋葬施設があり、殉葬（殉死させたうえで葬ること）が行われていた可能性が考えられ、五世紀には古墳周辺に馬が葬られている例があり、渡来人習俗の影響も考えられている。

中国の歴史書『三国志』の「魏志倭人伝」に、「卑彌呼以死大作家徑百餘歩殉葬者奴婢百餘人」とあり、邪馬台国の女王卑弥呼が死去し塚を築いた際に、百余人の奴婢が殉葬されたという。殉死者が任意に自殺する場合もあれば、強制的に殉死させられる場合もある。

垂仁天皇の御代に、野見宿禰が日葉酢媛命の陵墓へ殉死者を埋める代わりに土で作った人馬を立てることを提案したという（『日本書紀』垂仁紀）。それ以降、王朝の盛時には、絶えて殉死は起きなかったとされている。

しかし、戦国の世に移って、殉死の弊が再び勃興した。殉死者の数が多きことを武将の誇りとするに至った。中世以降の武家社会においては妻子や家臣、従者などが主君の死を追うことが美徳とされた。

たとえば、伊達政宗にも殉死者二十人がいて、その肖像が瑞巖寺（政宗の菩提寺）に残されている。加藤清正に殉じた大木兼能（おおきかねよし）、朝鮮人の金官（きんかん）は熊本城にある加藤神社に祭られている。島津義久への殉死者で「権之丞（肥後盛秀）」という者がいる（西藩野史）。島津義弘の後を追って13名の家臣が殉死している。尋常な諸侯であれば、なおさらこの慣習を打破できなかっただろう。

のちに水戸中納言光圀はこれを深く嘆き、殉死の弊を極論した。それでもなお徳川綱吉が亡くなるや、大河内右京亮らは追腹を切った。

貴重な人材が失われるという側面がある一方で、家を後継したばかりの若い主君では、先代の重臣たちに実務面で太刀打ちができず、主君を中心とした統一的な行動が難しくなることから、主家のために、先代に重く用いられたものは潔く死に、円滑な世代交代を実現する役割があったとする説もある。

（2）官兵衛の考え方

しかし官兵衛は、早くもこの弊習を喝破して、能力がある者たちを一人でも多く次世代に譲りたいということ意図をもって、水戸中納言に先立つこと100年以上、すでに殉死を禁じていた。これにより、官兵衛が亡くなっても、追腹を切る者が一人もいなかった。ただ、長政の死去の時、家臣の高橋匡順の殉死があったため、官兵衛の遺訓はわずかに一代に止まった（『黒田如水伝』）。

殉死を禁止したこと自体は官兵衛のキリシタン信仰や合理主義精神の発露だろう。すでに見たように、官兵衛の埋葬のときに、殉死者と一緒に埋葬された可能性があるが、確証はないという教会側の記録があるので、官兵衛の殉死者は本当に一人もいなかったのだろう。

（注1）

長政の臨終や葬儀、埋葬については『黒田家譜』に次のように記載されている。

「長政は合渡関ヶ原の古戦場で時を過ごし、過去の戦場に感じ入って、昔を恋しく思い出して涙を流した。心ある人はこれを見て、ともに涙を流した者もあった。のちに思い起こせば、長政は年老いて病があったので、二度とここを通らないだろうと思って、今回忠之を伴って、ここを見せられて語っておいたのだろう。

長政は江戸にいたときから、胸痛の病があつて道三葉を飲んでいたが、このところ膈噎の病氣（引用者注 胃癌または食道癌）が起きたので、京都へは上らずに伏見から大坂へ下って、筑前に帰って保養したと思ったけれども、今回上洛したのは、家光公が征夷大將軍の宣下を受けたのが理由だったから、京都に上洛しないではいけないと、大坂に二、三日逗留したあと上洛し、上京の報恩寺に宿泊した。

医師 仲井 通仙薬を用いた。秀忠公、家光公が上洛して、度々使者をやつて、長政を見舞つた。また、ご家老（老中）の酒井雅楽頭忠世、土井大炊助利勝、酒井讃岐守忠勝もやつてきて病状を見舞つた。

大坂の医師古林見宜は、はじめ長政の家臣だった。7月中旬のころ、これを召し出して脈を診させた。見宜は天性豪気なものだったが、長政の脈をみて、生き長らえることはできない病状です。ご覚悟をしてくださいと言ったので、長政はそれ聞き、その嘘偽りなく、正直なことに感心した。

長政はついに病氣は治らないと思つたのだろう。忠之に国の政治、家臣の使い方などを遺言し、また、家老たちにも自分の死後のことを遺命した。忠之も家老以下の諸臣も、長政の病を憂えて、医講を百回したが、まったく効果がなかった。病はすでに進行しており、長政は起き上がってきちんと座り、忠之に遺言し、上を敬い下を憐れむことを、決して怠つてはいけないと言った。また諸臣にも遺命して、目前に印判を削らせた。

閏八月四日未の刻（引用者注 14時ごろ）ついに亡くなった。

秀忠公はとても悲しまれた。長政の死を聞いた人は皆残念に思つた。稀代の英雄であつたので、皆残念に思つて悲しんだ。

その遺骸を筑前まで運び（菅主水、村尾蔵人らが御伴した）、箱崎の松原の東の際で火葬の儀式があつた。棺の先

は粟山大膳、後ろは忠之が手を添えた。家臣は皆集まった。（茶毘のとき、大村五左衛門という鷹師が、白鷹を放つと、その鷹が火屋に飛び行って死んだ。また長政は京都にて亡くなった日、大鹿毛という秘蔵の馬が死んだ。）

那珂郡十里松のうち、崇福寺の如水の墓の西の傍らに葬った。浮屠氏追号して、興雲院古心道卜大居士と称した。遺命によってその碑文は林道春が書いた。（この碑文は故あって慶安元年に削り除かれて今はない。羅山文集に載っている）」（『黒田家譜』第14巻）

とあり、病状が悪化してからの様子、臨終の様子、遺体を福岡に運び千代の松原あたりで火葬にし、崇福寺に埋葬したことが記されている。これが自然であろう。官兵衛のケースでは、唐突に埋葬の記述が一行あるだけだが、長政の方は紙幅を割いている。

（注2）

じょうは

里村玄仍・・・（元龜2（1571）～慶長11年（1607））連歌師。里村 紹 巴の長男。天正12年ごろから紹巴一門にくわわり、慶長7年父から古今伝授をうけた。法眼。別号に何羨堂。著作に「玄仍七百韻」など。

（注3）

里村昌琢・・・（天正2（1574）～寛永13年（1636））連歌作者。名は景敏。号は懷庵庵など。安土桃山時代の連歌作者里村昌叱の子。母は里村紹巴の娘。里村南家を継いだ。慶長13年(1608) 35歳で法橋に叙す。元和3年(1617)8月將軍徳川秀忠より采地100石の御朱印を受け、連歌の家としての保証を得る。寛永3年(1626)後水尾天皇から古今伝授を受け、同5年御城連歌に勤仕し、宗匠となる。同9年法眼。連歌界の第一人者で、斎藤徳元、松江重頼、西山宗因らの有名俳人もその門下。編著『類字名所和歌集』ほか。

（注4）

末期養子（まつごようし）とは、江戸時代、武家の当主で嗣子のない者が事故・急病などで死に瀕した場合に、家の断絶を防ぐために緊急に縁組された養子のことである。これは一種の緊急避難措置であり、当主が危篤状態から回復した場合などには、その縁組を当主が取り消すことも可能であった。当主が既に死亡しているにもかかわらず、周囲の者がそれを隠して当主の名において養子縁組を行う場合も指す。

江戸時代初期には、大名の末期養子は江戸幕府によって禁じられていた。武家の家督を継ぐためには、主家（大名にとっては徳川將軍家が主家ということになる）に事前に届出をして嫡子たることを認められる必要があり、末期養子はこの条件を満たすことができない。御目見以上の格の大名家においては、さらに將軍との謁見を済ませておくことも必要とされた。末期養子がこのように厳しく禁じられたのは、次のような事情による。

まず、末期養子においては当主の意思の確認が困難であったことによる。家臣などが当主を暗殺して、彼らに都合の良い当主に挿げ替えるなどの不法が行われる事態を危惧したものである。しかし最も重要な理由として、幕府が大名の力を削ぎ統制を強めることに大いに意を用いていたことが挙げられる。末期養子の禁止もその手段の一つとして活用されたのである。

支配体制のいまだ確立していない江戸時代初期には特に顕著で、幕府の成立から3代將軍徳川家光の治下にかけて、嗣子がないために取り潰される大名家が続出した。これは幕藩体制を確立するために大いに役立った。しかしその反面、それらの大名家に仕えていた武士たちは浪人となる他なく、社会不安も増すことになった。

～仙台藩の事例～

寛政8年（1796）7月27日に陸奥仙台藩主伊達斉村が後継者を決めないまま急死した時、長男の周宗は乳児、次男の斉宗は生まれてもない胎児のため、幕府はおろか藩内にも機密扱いとした上で、同年8月1日に斉村の病氣回復が遅れている旨が幕府に報告され、藩内には同年8月12日に死去したと公表の上で3日後、幕府に斉村の病氣による周宗の末期養子としての相続願いが出され、10月29日に周宗が仙台藩を相続した。

文化6年（1809）に周宗は瘡痂にかかり、回復の兆しが無いため文化9年（1812）に弟の斉宗を末期養子に定め、藩主の地位を譲って隠居した。周宗は將軍の御目見をしていなかったが、11代將軍徳川家斉の娘と婚姻していたため、特例として認められた。しかし、実際には周宗は発病後間もなく死亡しており、以後は存命を装っていたとも伝えられている。

【Ｑ９】 官兵衛の遺こした物

官兵衛が残した遺物を通して、キリシタンとしての側面を見てみよう。

官兵衛がキリシタンとしてどのように振舞い、そして、どのようにキリシタンとして天寿を全うしたのか、今まで見てきた（天の巻（上巻）も参照）。史料の中で残された痕跡をたどってきたが、彼がこの世に残した物にはどんなものがあつたのだろうか。

1・キリシタン関連の遺物

残されたものとしては次のようなものがある。

- ① メダイ（メダル）・その十字架鑄型（福岡市埋蔵文化財センター 蔵）
- ② 十字架瓦（秋月城跡）（福岡県朝倉市教育委員会 蔵）
- ③ 円清寺の官兵衛画像（福岡県朝倉市円清寺 蔵）（既述）
- ④ 姫路城十字架瓦（姫路城天守閣に現存）
- ⑤ 泰西風俗画屏風一雙（重文）（福岡市美術館 蔵）
- ⑥ 書状（十字架、ローマ字の押印）（福岡市博物館 蔵）

①については、官兵衛自身が持っていたというわけではないが、博多のキリシタンを繁栄に導いたのが官兵衛であるので、その関わりで作られたものである。

2002年3月に福岡市博多区奈良屋町の博多遺跡から出土した。キリスト教徒が身に付ける十字架とメダイ（メダル）の鑄型1個である。16世紀後半～17世紀前半に作られたとみられ、中・近世の十字架やメダイの鑄型が発見されたのは日本で初めて。国際貿易で栄えた当時の博多が、キリスト教布教の重要地点だったことを裏付ける貴重な史料で、メダイや十字架を複製するほど信徒が多かったことを裏付ける貴重な資料と言われている。鑄型は土製の素焼きで、既にある2つの製品を並べて粘土に押し当てて作つたとみられ、長さ4センチ、幅5・5センチ、厚さ1・4センチ、重さ約40グラム。いばらの冠をかぶったキリストの顔をデザインした直径1・7センチのメダイの型が左側に、縦横約2センチの十字架の型が右側にあった。メダイは類例が少ない図柄で、原品は欧州製らしい。

②については、官兵衛の弟の直之が所領の秋月でキリシタンを保護していたことを偲ぶものだ。直之の事蹟については、Q16を参照頂きたい。

③については、上巻Q1の1.を参照頂きたい。

④については、官兵衛が姫路城を普請した際に、取り付けたと言われている。

⑤については、桃山時代の作と言われ、黒田家に伝わっている。



右隻 縦 97.0cm 横 42.5cm



重文 泰西風俗画屏風/福岡市美術館蔵

左隻 縦 97.0cm 横 42.5cm

本図は、一見、西洋の風俗画のようでありながら、背後にはキリスト教的主題が隠されている。伝統的な日本の絵画に西洋的な陰影法や遠近法を導入した「近世初期洋風画」と呼ばれる絵画は、桃山時代にイエズス会がキリスト教の普及を目的として制作させたことに始まる。同時に、日本の伝統的な四季図屏風の形式を踏襲している。向かって右隻には、楽器を演奏する婦人たちが水辺で憩う人物や釣り人を表わした、春から夏にかけての場面が描かれている。左隻では、聖母子を想わせる母と子の姿や収穫する人々、雪山を背に巡礼する人々を描いた、秋から冬の場面へと展開する。右隻には、享乐的に生きる人々を、左隻には、キリストの教えに則った敬虔な生き方をする人々を対比的に描いて、キリスト教の教えを説いた近世初期洋風画の代表的作例である。

⑥については、この書状の印章にはSIMEON JOSUI（シメオン如水）とQVAN（官（「官兵衛」の「官」））と読めるものを用いていた。ローマ字入りの印章の残っている文書の一部は知行宛行書であり、しかも長政の花押を有する慶長11年（1606）のものである。官兵衛のローマ字入印章に初めて着目したのは、福本日南氏の『黒田如水』であったと言われている。

1601年のイエズス会年報によれば、官兵衛は長政の留守中、新しい領国の検地を監督し、知行宛状のため藩府に押印した書状を置いてあったのではないと思われる。たぶん、藩府の役人はローマ字が読めず、その意味がわかっていなかったかも知れない。

2・キリシタン関連以外の遺物・遺構

一方、キリシタンに関係ないものについては、そこそこの点数が残されている。大大名の藩祖にしては少ない気もするが、キリシタンとしての遺物が、それに比べて少ないことがわかるだろう。

参考に、それらをあげてみよう。

こうすなり

○朱塗合子形兜・黒系威胴丸具足（福岡市博物館 蔵）



官兵衛が死に際して、重臣栗山利安に与えたもの。兜は利安の子利章（大膳）が黒田騒動の結果、奥州盛岡藩に配流となったため、持ち去ってしまい、福岡に残されたのは胴だけだった。その後、三代藩主光之の時代に兜を新調され、籠手なども整えられた。

へしきり

○国宝（名刀）「圧切長谷部」（福岡市博物館 蔵）

天正3年（1575）、岐阜城の織田信長に謁見し、小寺家が信長方に与し、播磨の国人たちも調略するなど、播磨国をはじめとする中国計略の献策をしたことへの褒美として、信長から与えられた。

昭和28年国宝指定。南北朝時代の（1334～36）頃の山城国（京都）の刀工、長谷部国重作。黒田家旧蔵の『黒田家御重宝故実』には、へし切の名称の由来が記されている。圧切は、信長公が茶坊主を手打ちにしたときに、台所に逃げ込んで、膳棚の下に屈んでいたので、刀を振り下ろしても斬れず、刀を指で圧して斬ったことによる。

也」。一部の史料には秀吉から長政が拝領したになっているが、誤りである。

○国宝（名刀）「菊一文字」（宮内庁 蔵）

足利義昭から贈られた。毛利家に寄寓していた義昭が、京都に戻れるように秀吉との窓口となった官兵衛の労を労って、義昭はこの太刀と馬を贈っている。この太刀は鎌倉時代の後鳥羽上皇の御作。

○小田原攻めの時、単身乗り込んで面会した北条家から譲られたもの

・国宝（名刀）「日光一文字」（福岡市博物館 蔵）葡萄文蒔絵刀箱付

日光二荒山に奉納されていた太刀を北条早雲が譲り受け、後、黒田家に伝わった。『黒田家御重宝故実』に「日光一文字御刀 式尺式寸四歩 白貝、東艦と一同に北条氏直より来りシ也、北条家伝来之名物也 其時入来し葡萄蒔絵之箱、今に被用也」（傍線 引用者注）とあり、黒田家に伝来した『名物三作』には「日光権現ニ納リテ有シヲ小田原北条早雲長氏申落シテ所持ス 氏綱氏康迄伝ル 小田原陣黒田如水老噯和タンニナリ依之為礼此刀並東艦之正本白貝ヲ遣ス 氏政より五代メハ氏直也 是ヲ小田原北条五代ト申也 関八州ヲ領ス」とありこの太刀が天正18年（1590）の豊臣秀吉の小田原攻めのときに、官兵衛が豊臣秀吉と北条氏直との間の労をとった謝礼として、氏政から如水へ陣貝と「東艦」とともに贈られたものであると伝えられ、それ以後、この太刀は黒田家の家宝となった。

ちなみに、日光二荒山とは、日光二荒山神社（につこうふたらさんじんじゃ）のことで、この神社は、栃木県日光市にあり、ユネスコの世界遺産に「日光の社寺」の1つとして登録されている。当社は古来より修験道の霊場として崇敬された。江戸時代になり幕府によって日光東照宮等が造営されると当社も重要視され、現在の世界遺産・重要文化財指定の主な社殿が造営された。

・吾妻鏡（国立公文書館 蔵）、法螺貝 北条白貝（福岡市美術館 蔵）

北条氏政から日光一文字とともに贈られた。吾妻鏡はのちに長政が秀忠に献上している（秀忠が執心だったため）。

・琵琶 青山（福岡市美術館 蔵）

北条氏直から贈られた。

○書状

利休に送った書状（黒官と宛名がある）、荒木村重に送った書状（詳細は、天の巻（上巻）Q2参照）、文禄2年（1593）に秀吉の怒りを買って死を覚悟したとき、長政に対して送った自筆の遺言状（6ヶ条）（福岡市博物館 蔵）、晩年に長政に送った書状（教訓状）、死の1年前に有馬に湯治したときの書状などが残されている。

○如水釜



千利休から手ほどきを受けていた茶の湯の道具。釜は湯を沸かす道具。

官兵衛が茶の湯を楽しんだことは「宗及茶湯日記自会記」で天正13年（1585）、40歳の時に津田宗及の茶会に蜂須賀正勝らとともに参加していたことでも分かる。

また、官兵衛は千利休とも相当親しくしていたようであり、聚楽第では、利休の屋敷の隣同士であった。利休から聞いた茶道の心得、数か条を遺している。「自分が贈った色紙はどうぞ秘蔵してください」との利休の書状が残されている。また、晩年「黒田如水茶湯定書」を書き、これを水屋に掲げさせている。

一、 茶を挽くときには、いかにも静かに廻し、油断なく滞らぬように挽くべきこと

一、 茶碗以下の茶道具には、垢がつかないように度々洗っておくこと

一、 茶の湯をひと柄杓汲み取ったときには、水をひと柄杓差し加えておくこと、決して使い捨てや飲み捨てにしない

官兵衛が説く心得は極めて素朴であり、華美なところは感じられず、利休流を守った教えである。

一部の書には、官兵衛が利休七哲と書かれているが、利休七哲は、蒲生氏郷（筆頭とされる）、細川忠興（三斎）、古田重然（織部）、芝山宗綱（監物）、瀬田正忠（掃部）、高山長房（右近/南坊）、牧村利貞（兵部）と言われている。ほかに、織田長益（有楽斎）、千道安（利休の実子）、荒木村重（道薫）を加えて「十哲（じつてつ）」と呼称される場合もある。その後、様々な茶書などで構成が微妙に変わり、千道安を除いて前田利長が入る、有馬豊氏や金森長近を加えるなど諸説あるが、いずれも後世呼称されたもので、当時からそうに呼ばれていたわけではない。

いずれにしても、官兵衛は利休七哲ではない。茶道も愛した官兵衛であったが、茶道関係の遺物はこの如水釜一点であるという。如水釜はもともと秀吉から貰ったもので、その後、吉川広家に贈られた。

茶道具は高価であって、そのような高価な品が欲しくなって散財した武将もいたなかで、官兵衛はそんなことはなかったのだろう。関ヶ原の戦い後に家康から南條の茶壺をせしめる逸話などがあつたし（『黒田如水伝』第11篇第2章）、博多の商人の神屋宗湛と茶会で交流していた（『宗湛日記』など）、自分で買い求めずとも、人から貰った茶器もあつただろうが、残されていないようだ。

○陣かご

金子堅太郎著『黒田如水伝』に掲載されている。

有岡城の1年間の幽閉によって脚を痛めて、左足を引きずるようになり、関ヶ原の戦いの豊後陣ではこの陣かごを使用したと言われる。ただ、この陣かごは現存しておらず、昭和20年（1945）に焼失したようだ（空襲によるものか？）。

幽閉によって脚を痛めて、左足を引きずるようになったというのは、大正時代に金子堅太郎が書いた『黒田如水伝』に初出の話。『黒田家譜』などには書かれていない。もし、この話が本当であれば、官兵衛は馬には乗りづらいうであらうから、籠に乗って指揮したことに間違いないだろう。癩病を患っていた大谷吉継や落雷で半身不随になった立花道雪、不摂生がたたって太ってしまった龍造寺隆信、風雅を好む今川義元も籠に乗って指揮したと言われていた。

しかし、官兵衛の話が本当であつたかどうか、よくわからない。

○和歌短冊（福岡市博物館 蔵）

和歌に堪能であつたことは既に述べた（天の巻（上巻）Q2の6.（1）参照）。自作の和歌はたくさん作られている。

・『如水公独吟』『如水公夢想連歌』（福岡市博物館 蔵）

「如水公独吟」は自ら詠んだ100韻を直筆でしたため、当時の代表的連歌師・里村昌叱に添削を依頼したもの（『黒田家譜』巻之十五）。

「如水公夢想連歌」は、官兵衛が夢の中で感得した「松むめ（梅）や末ながかれとみどりたつ、山よりつづく」とはふく岡」を黒田家繁華の瑞夢として、幸円（官兵衛夫人）・長政・長政室ら近親者とともに連歌会を催したもの。この連歌で、「ふく岡（福岡）」の地名が、史料上初めて登場（『黒田家譜』巻之十五）。

・『六家抄』細川藤孝筆（福岡市美術館 蔵）

『六家抄』を細川藤孝（幽斎玄旨）が筆写して官兵衛に贈られたと伝えられている。

『六家抄』は、室町時代の^{しょうはく} 尚 柏（嘉吉3年（1443）～大永7年（1527））の選。尚柏は、室町時代中期の連歌^{ぼたんげ ろう かけん}

師、歌人。准大臣中院通淳の子。号は、夢庵・牡丹花・弄花軒など。宗祇から伝授された「古今和歌集」、「源氏物語」の秘伝を、晩年移住した堺の人たちに伝え、堺伝授の祖となった人。早くに出家して正宗龍統に禅を学び、また和歌を飛鳥井宗雅、連歌を宗祇に学んだ。30歳頃から後土御門天皇の内裏歌合に参加している。応仁の乱の頃には摂津国池田に住み、その後度々上洛したが、永正15年（1518）和泉国堺に移り、その地で没した。「古今和歌集古聞」・「源氏物語聞書」など講釈の聞書をもとにした注釈書が多い。連歌師としては、宗祇、宗長と詠んだ「水無瀬三吟百韻」「湯山三吟百韻」などが伝わっている。歌集・句集に「春夢草」がある。

書写した細川藤孝（幽斎）は、細川忠興の実父で、藤原定家の歌道を受け継ぐ二条流の歌道伝承者三条西実枝から古今伝授を受け、近世歌学を大成させた当代一流の文化人でもあった。ちなみに、細川藤孝（幽斎）の幼名は万吉（萬吉）で、官兵衛と同じ。偶然の一致であった。

・『新古今集聞書』細川幽斎（福岡市美術館 蔵）

^{こきん} 『新古今和歌集』は鎌倉時代初期、後鳥羽上皇の勅命によって編まれた勅撰和歌集。古今和歌集以後の八勅撰和歌集、いわゆる「八代集」の最後を飾る。美的理念を通して、連歌、能、茶道など、中世の芸道の象徴理論に影響を及

^{とうのつねより} ぼした。宗祇、尚柏、宗長ら連歌師によって注釈の研究もさかに行われた。東常 縁が著したその注釈を、細川幽斎が増補したのが、『新古今集聞書』で、官兵衛に贈られたもの。

「如水は若いときから、風雅の道にここにおいて東の聖州作の新古今の抄、ならびに堀河院百首等を、細川幽斎の自筆のものを如水に贈った。そのほか和歌の秘事、物語の奥義など、よりより幽斎に尋ね、記して贈られたことが多かった」（『黒田家譜』第15巻）。

○城（跡）

・姫路城

官兵衛が増築した当時のものが若干現存している（十字架瓦や石垣）。江戸時代に播磨に入封した池田輝政によって今日見られる大規模な城郭へ増改築された。

・中津城



官兵衛が築城をし、細川忠興が完成させた。昭和39年（1964）、模擬天守が、本丸上段の北東隅櫓跡（薬研堀端）に観光開発を目的に建てられた。

・福岡城

現存しているのは、門・櫓で、多聞櫓とそれに続く二の丸南隅櫓は国の重要文化財に、潮見櫓・大手門・祈念櫓・母里太兵衛邸長屋門が福岡県指定文化財に、名島門が福岡市文化財にそれぞれ指定されている。また、多聞櫓に続く二の丸北隅櫓が復元されているが、戦後に城内・舞鶴公園外には東西を遮る道路、住宅地、競技場、裁判所、美術館、ありとあらゆる施設が建築され、城郭遺構としては未整備であり、官兵衛の屋敷（三ノ丸御鷹屋敷）は現存していない。

なお、官兵衛築城当時のものは現存していない城としては、

・大坂城

官兵衛築城当時のものはほとんど現存していない。大坂落城時に焼失し、徳川幕府によって再建されたものが現存。

・名護屋城

現存していない。五重天守や御殿が建てられ、周囲約3キロメートル内に120ヵ所ほどの陣屋がおかれた。城の周囲には城下町が築かれ、最盛期には人口10万人を超えるほど繁栄した。秀吉の死後、大陸進攻が中止されたために城は廃城となったと考えられており、建物は寺沢広高によって唐津城に移築されたと伝わる。石垣も江戸時代の島原の乱の後に一揆などの立て籠もりを防ぐ目的で要所が破却され、現在は部分が残る。歴史上人為的に破却された城跡であり、破却箇所の状況が復元保存されている。

また、官兵衛が縄張りしたわけではないが、アドバイスをした城として、

・広島城

第二次大戦の際に崩壊したが、戦後再建された。

- ・高松城

現在見られる遺構は、江戸初期に徳川光圀の兄で常陸国から12万石で高松に移封された松平頼重によって改修されたもの。

○その他

- ・重文 刀「安宅切」（福岡市博物館 蔵）
- ・薙刀「権藤鎮教」（福岡市博物館 蔵）
- ・永楽通宝紋陣羽織

3・まとめ

以上見てきたように、キリシタンとしての遺物が少ないということがお分かり頂けたであろう。

関ヶ原の戦いのあと、教会側の記録の中で、毎年、官兵衛殿シメオンとか官兵衛シメオンの名前が挙がっているのは、彼がキリシタンとして抜群であったことを十分に示している。ところが、その後、キリシタン禁制で幕府の監視も厳しくなった。御家の存続を図るため、黒田家の記録も、その他の諸史料も、彼のキリシタンたることを全く抹殺するために隠滅してしまった可能性があるし、一部は官兵衛の葬儀の際に、副葬されたのだろう。あんなにキリシタンとして活躍したのに、ほとんど、何も残されていない。

【Ｑ１０】 官兵衛、明石掃部を保護

官兵衛は他のキリシタン武將を保護している。

そのうち、明石掃部（全登）との関係をみていこう。

1・総論

なぜ、いきなり明石？と思われた方もいるだろう。このQ&Aではミステリアス、神出鬼没の武将、明石掃部（全登）と官兵衛との意外な関係を書こうと思う。

2・明石掃部って、だれ？

まず、彼の人生の流れをざっとあげると以下のようになる。

- 備前明石氏（美作明石氏）の出身。
- 宇喜多家の最有力の重臣である明石飛騨守（のち伊予守）行雄の後継者で宇喜多家家老。
- 実名は「守重」、号が「全登」（『国史大辞典』）
- 号の全登（全誉）は「オシトウ」と読む（『黒田藩分限帳』）。
- 朝鮮の役で、朝鮮に渡海。
- 知行高は3万3210石（大西泰正「明石掃部の基礎的考察」（『岡山地方史研究』125号、2011年）。
- ただし半独立的で領国経営には参加しなかった（同上の史料）。
- 官途は「掃部頭」（律令制下、宮中の儀場の設営や清掃などを担当した役所である掃部寮の長官。皇居を掃除することに違いありませんが、本来的にそこに求められる能力は、皇居から邪悪なケガレを排除し、天皇の身辺を清浄に保つことにあつて、単なるお掃除係ではありません。）
- 宇喜多騒動（慶長4年（1599）のお家騒動）で主だった家臣たちが出奔する中、彼が執政として宇喜多家中を取り仕切り財政を立て直した。
- 当時、岡山城下にも多くのキリシタンがおり、彼も熱心なキリシタンであつた（洗礼名ジョアン）。
- 関ヶ原の戦いで西軍の宇喜多勢1万7千名のうち、8千名を率いて先鋒をつとめ、福島正則を相手に善戦した。
- 小早川秀秋の寝返りで西軍が総崩れになると、主君秀家を逃がし、キリシタンだったため自害せずに討死覚悟で戦場を彷徨っていたところを、黒田長政に発見され、匿われた。
- 戦後、筑前国に入封した黒田長政らについて、家臣や岡山の信者たちともに筑前国に移り住んだ。
- 筑前国では、2千石の高禄をもって召抱えられた。
- 官兵衛が亡くなると、幕府をはばかりた長政により所領を没収され、弟直之の秋月領内で庇護を受けた。
- 直之の死後、長政がキリシタン弾圧を強めたため、柳河藩の田中吉政を頼り（田中吉政もキリシタン）、その後、長崎に潜伏したと言われる。
- 大阪冬の陣では豊臣方の呼びかけに応じていち早く大坂城に入城し、真田信繁（幸村）、後藤又兵衛らとともに五人衆と称される。
- 大坂の陣を通じて一隊を率いて奮戦し、徳川方の諸隊に驚異を与えた。
- 大阪夏の陣では、天王寺・岡山の戦いで、松平忠直の軍勢に突撃し姿を消す。その後、出身地に近い播磨、あるいは秋田や津軽、国外などに逃れたといわれる。

ざっと、こんなところだ。これだけ読むと、なんか受験の日本史みたいで、素っ気ない。彼の人間味、苦悩、官兵衛との交流などを見ていかないと、意味がないだろう。ただ、紙幅が限られているので、彼の一生そのものは類書に譲り、本書では史料に沿ってざっと見ていくことにしよう。

なお、彼の名前は明石掃部で統一したい（「掃部」は名前ではなく朝廷の官職名「掃部頭」に由来する）。

3・黒田家との関係

まず、黒田家との関係であるが、明石掃部は、黒田家と血のつながりがあった。官兵衛の生母である明石氏の一族であり、黒田長政にとっては又従姉妹にあたるのだ。

なぜか教会側の史料ではそのあたりには触れられておらず、「明石掃部は黒田長政のかつての戦友であった」としか述べられていない。

また、黒田家の系図では職隆の「妻は小寺政職が養女」となっており、官兵衛の欄には「母は政職が養女」と記入されているだけで、その養女の実家については触れていない。もしかしたら、明石掃部と黒田家の関係を隠滅しようと図ったのかも知れない。彼が、キリシタンであり、関ヶ原と大坂の陣で2度も徳川家に弓を引いた人物だったから、幕府の眼を憚ったのだろうか。

ところが、明石家の系図では、官兵衛の生母は明石備前守正風の娘であったことが判る。これにより、官兵衛の生母は明石氏であり、明石掃部は長政の又従姉妹にあたることがはっきりする。

ほ ぎ
保木城主・明石行雄（景親）の子として生まれた（生年不詳）（保木城の所在地は岡山県岡山市東区（旧瀬戸町））。

他の教会側の記録をみてみよう。

これをみると、掃部が大坂で受洗したことがわかる。

これを見ると、彼の洗礼名がジョアン（ドンは尊称）であって、秀吉の伴天連追放令の下にあって、高山右近と並び称せられるほどの熱心な信仰心で、積極的に宇喜多家の武士たちを勧誘していたことがわかる。備前・備中・美作の太守である宇喜多家の筆頭家老である掃部が熱心なキリシタンであったから、教団側も相当な期待をしていたことが読み取れる。

これを読むと、5千石でも多いが、3万3千石としている史料もあって、宇喜多家の筆頭家老が5千石では少ないと思われるので、後者の方が正しいだろう。

また、妻もキリシタンになっており、屋敷内に聖堂を設けていたことがわかる。

これを読むと、妻は危篤状態に陥ったが、秘蹟を受けて全快したことになるが、本当だろうか。マジックか？キリスト教教徒関係者が施薬などを施したのだろうか。このような「奇蹟」を起こして、宇喜多家中に多かった日蓮宗などの異教徒を驚かせ、キリスト教に勧誘する手口だったのかも知れない。

伴天連追放令を出したとはいえ、秀吉は南蛮貿易の実利を重視していたため、この時点では大規模な迫害は行われなかった。黙認という形ではあったが宣教師たちは日本で活動が続けることができたし、キリシタンとなった日本人が公に棄教を迫られる事はなかった。

しかし、1596年10月のサン＝フェリペ号事件をきっかけに、秀吉は12月8日に再び禁教令を公布した。また、イエズス会の後に来日したフランシスコ会の活発な宣教活動が禁教令に対して挑発的であると考え、京都奉行の石田三成に命じて、京都に住むフランシスコ会員とキリスト教徒全員を捕縛して処刑するよう命じた。大坂と京都でフランシスコ会員7名と信徒14名、イエズス会関係者3名の合計24名が捕縛された。三成はバウロ三木を含むイエズス会関係者を除外しようとしたが、果たせなかった。24名は、京都・堀川通り一条戻り橋で左の耳たぶを切り落とされて（秀吉の命令では耳と鼻を削ぐように言われていた）、市中引き回しとなった。1597年1月10日、長崎で処刑せよという命令を受けて一行は大坂を出發、歩いて長崎へ向かうことになった。また、道中でイエズス会員の世話をするよう依頼され付き添っていたベトロ助四郎と、同じようにフランシスコ会員の世話をしていた伊勢の大工フランシスコの2名も捕縛された。嚴冬の折、死出の旅を徒歩で歩かされたことを思うと身震いする。26人のうち、日本人は20名、スベ

イン人が4名、メキシコ人、ポルトガル人がそれぞれ1名であり、すべて男性であった。

長崎で26人のカトリック信者が処刑されることになるが（「二十六聖人の殉教」という）、この「日本二十六聖人」の宇喜多領内の通行を護送し、備中川辺（岡山県倉敷市）まで送り届けたと言われ、この時の丁重な振舞いで掃部の名はヨーロッパへ伝えられたという。

ちなみに、彼らの遺骸は死後、多くの人の手でわけられ、日本で最初の殉教者の遺骸として世界各地に送られて崇敬を受けた。これはローマ・カトリック教会において、殉教者の遺骸や遺物（聖遺物）を尊ぶ伝統があったためである。1862年6月8日、ローマ教皇ピウス9世によって列聖され、聖人の列に加えられた（1962年には列聖100年を記念して西坂の丘に日本二十六聖人記念館（今井兼次の設計）と彫刻家の舟越保武による記念碑が建てられた。カトリック教会での「日本二十六聖人殉教者」の祝日は2月5日）。

5・宇喜多騒動を収拾する

宇喜多家は50万石強の大大名であり、当主秀家は五大老に列せられていた。しかし、秀吉没後の慶長4年（1599）に、宇喜多家を揺るがす大事件が起きる。当時重臣だった戸川達安・岡利勝らが、秀家の側近の中村次郎兵衛の処分を秀家に迫るも、秀家はこれを拒否。中村は前田家に逃れ、戸川らが大阪の宇喜多屋敷を占拠する、いわゆる宇喜多騒動が発生した。徳川家康が調停したため内乱は回避されたものの、この騒動で戸川・岡ら（下巻Q18宇喜多詮家の項、参照）直家以来の優秀な家臣団や一門衆の多くが宇喜多家を退去することとなり、宇喜多家が衰退してしまう。

ちなみに、原因は、家臣団の政治的内紛に加え、秀家の素行に問題があったことのほか、宇喜多家の執政であった

おきふね

長船 綱直や奉行人中村次郎兵衛らの専横への他の重臣の不満、さらに宇喜多家では日蓮宗徒の家臣が多かったが、秀家は豪姫がキリシタンであったことから家臣団に対してキリシタンへ改宗するよう命令するに至ったためとも（キリシタン強制改宗説には異説あり）、家康が宇喜多家の弱体化のために仕組んだ陰謀という説もある。

この宇喜多家のピンチを救ったのが、明石掃部であった。出奔した家臣たちに与える知行が減ったとはいえ、1年で財政を回復させ、彼らの穴埋めとして諸国から牢人たちを登用し、家臣団を再編した。

6・関ヶ原の戦い

関ヶ原の戦いでは主君・秀家に従って西軍に属した。本戦の前には、宇喜多騒動で宇喜多家を飛び出し、家康に仕官した元同僚の戸川達安から誘いを受けるが、達安らの騒動の責任を迫及した上で、東軍の情報を聞き出そうとするなど、略略に長けていたという（『関ヶ原前夜』光成津治）。

前哨戦の杭瀬川の戦いでは、石田三成の家臣島左近とともに勝利を収めた。本戦では宇喜多勢1万7千人のうち主力の8千人を指揮下に置いて前衛を務め、福島正則や井伊直政と激戦を展開。関ヶ原の中でも有数の死闘とされるが、小早川秀秋の寝返りをきっかけに西軍は総崩れとなり敗北した。掃部はまず主君・秀家を戦場から離脱させ、熱心なキリシタンであった彼は、自害することができず、討死をしようとして戦場を彷徨っていた。偶然遭遇した黒田長政に救出された（1601年9月30日付、長崎発、バジオの書簡）。

また、関ヶ原の戦いの前後の彼の様子がよくわかる史料がある。

「（明石）ドン・ジョアンはいとも秀でた殿であり、甚だ勇敢な武将で、経験も非常に豊かであったから、奉行たちは彼を軍勢の先頭に立たせ、彼は大いに奮戦したので敵軍さえもこれに驚嘆した。ところが裏切り行為があったために彼は包囲されてしまい、もはや生きて脱出する術はまったく無くなった。この間、敵の手によって生命を断ち、屈辱的に死ぬことなく、日本の風習に従って切腹する機会があった。しかし自分はキリシタンであり、キリストの掟がそのような死を禁じていることを思い起こしたので、自分の生命を断つ者が現れるまで敵陣に乱入しようと決心した。

かくて、馬をなくしていたので、徒歩で戦いながら敵の騎兵隊に突撃し大いに前進した結果、敵側の重立った武将で、内府様の（軍勢の）前衛として来ていたきわめて親しい友人（黒田）甲斐守に遭遇した。甲斐守は身につけていた指物によって（明石）ドン・ジョアンであることを知り、大声で叫んだ。

『止まりなされ、明石掃部殿、止まれなされ。拙者のもとに参せられよ。安全ある地にお連れ申す』と。

（明石）ドン・ジョアンは立ち止まり近づくと（甲斐守が）申し出た厚意を謝した。だが、甲斐守が、彼がどうやって火縄銃の弾丸の雨の中を逃げ、かくも強力な騎兵隊の中に突撃し、死なずに、あるいは日本の習慣に従って自ら命を絶つこともせず、ここまで到達したかに驚くと、（明石）ドン・ジョアンは答えた。

『甲斐守殿、驚かれることはござらぬ。同様の情況にあつて立派な兵がするように切腹することはいとも容易で、これは貴殿もよくご存知のとおりである。しかし、予はただキリシタンであり、デウスに背かぬためにそれをやめ、故意に戦死するために敵陣の中に身を投じたのである。さればこそ、かくも高名の士で、偉大なわが殿、かつ友人である貴殿とお会いできたのは殊のほか仕合わせである。貴殿のような殿の手にかかって死にたいゆえ、この首を刎ねていただきたい』と。

彼はそのことを淡々と、かつ立派な信仰をもって語り、勇敢な武士の面目に勇気づけられて、そこに罪悪の可能性があるとは考えられなかった。（これに対して）（黒田）甲斐守は、どのようなことがあつても彼を救い、内府様から許しを得ようと答えた。

（明石）ドン・ジョアンは、かの戦さにおいて死なず、いたずらに生き長らえることは名誉ではない、きっぱり断った。だが（黒田）甲斐守は繰り返し彼を救うことを懇願したので、ついに（明石）ドン・ジョアンは甲斐守が示し、約束した愛情に身を任せるほかになく、（甲斐守は）その後、いとも立派にそれを果たした。（黒田）甲斐守は、すこぶる礼儀正しい人なので、ただちに馬から降りて（明石）ドン・ジョアンが代つて乗るように申し出た。が、ドン・ジョアンは（黒田）甲斐守が家臣の馬に乗り、2人がともに馬上の人となるまで断り続けた。」（1599—1601年、日本諸国記（フェルナン・グレイロ編『イエズス会年報集』））

「明石掃部は敏捷で軍略に非常に巧みな者として、日本の奉行側の軍の第一線で戦っていた人々の指揮者とされたが、合戦の開始にあたり裏切り者の軍勢によって置き去りにされた為、自分は敵方の軍勢に取り囲まれているのに気づいた。逃げられる希望はまったくなかったので、彼は敵方の兵の手にかかって命を失うよりは先に合戦をやめてはならぬと決意して敵軍の真ん中へ突入した。彼は自決するという日本人たちの風習が不敬かつ邪悪であることを正しく知っていたので、切腹という考えを、デウスの助けによって退けた後、あらゆる努力をもってだもつとも密集した敵軍の真つ只中で戦いながら、敵の手にかかって殺されようとした。

彼はこの決意をもって徒歩のまま一心不乱に戦っていた時、内府様側についていた己が友人の甲斐守（黒田長政引用者注）に出会った。彼は着ていた衣服と武具によって、ただちに見分けられ、友人たちの挨拶を受け、生命のことは構わずに勇気を振るうよう鼓舞された。その時甲斐守はこう言った。どうして明石掃部が、敵たちが射つ弾丸の雨の中で無事でおられるのか自分はずっと驚かすにはおれぬ。あるいは少なくともこの種の危険にあることが判つていれば、国の風習に従って自決すべきではなからうか、と。

すると明石掃部はこう答えた。自分はデウスに対する畏敬の念から、そのような犯罪行為を非常に恐れた。自分がわざとだもつとも密集した軍勢の中へ突入したのは、勇ましい軍兵たちの中で戦って敵の手にかかって討ち死にしようとしたのである。もし甲斐守自身の手によって、首級が跳ねられるとしたら並々ならぬ恩義を感じるであろう、と。

すると甲斐守は、こう言った。自分はそのような行為には関わりたくない、と。そのみならず（甲斐守）は、彼の助命について内府様（徳川家康 引用者注）と非常に熱心に話し合おうと引き受けた。そして（甲斐守）は馬から下りると、明石掃部のような非常にすばらしくて栄誉ある人物が、国家のために生き残っていることを知って喜んでいように思われた。また（内府様）自身が、いつか彼の力を用いられるであろう。こうして明石掃部は生命のすべ

での危険を免れて、（後略）」（1601年2月25日付、長崎発信、ヴァレンティン・カルヴァーリュのイエズス会総長宛、日本年報補遺）

とあり、乱戦となった戦場における黒田長政との生のやりとりが伝わってくる。宇喜多勢が総崩れになり、乱戦の中で長政と偶然出会い、武士として自害を勧められたが、キリシタンとして自殺を拒否した。長政に討ち取ってくれるように頼むが断られ、奇跡的な救出劇によって保護された。

7・関ヶ原の戦いのあと

(1) 助命嘆願、知行宛行

掃部は長政のとりなしで助命されたことが教会側の史料に記録されている。

「ところで我ら（引用者注 教団関係者）を不思議なほど慰めたのは、特にデウスが合戦中（引用者注 関ヶ原の戦い）に彼（引用者注 明石掃部）を無事に保護し給うたまったく驚嘆すべきことであり、そのほかに勝利者内府様（引用者注 徳川家康）は、彼を譴責し処刑しようとしていたのに、甲斐守（引用者注 黒田長政）に免じて赦したことである。」（1601年2月25日付、長崎発信、ヴァレンティン・カルヴァーリュのイエズス会総長宛、日本年報補遺）

「（黒田）甲斐守は、内府様に知らさないまま、このように重立った人物の生命を助けるつもりはなかったの
で、さっそうべてを彼に報告した。彼は（明石掃部）ドン・ジョアンに関し、その稀有の才能や勇気について情報
を得ていたで、そのような立派な武人が死ななかつたことは喜ばしい。甲斐守が今のまま召抱えて良いが、今後、
もしかしたら自分自身に仕えさせることになるかも知れない、と言った。かくて（明石）ドン・ジョアンは自由の身
となり、（黒田）甲斐守に仕え、その後、大坂に赴き、司祭の駐在所に数日間滞留し、かくも明白な危険を免れ得た
ことに對し、我らの主に感謝するのに倦むことはなかった。ドン・ジョアンは、俸禄の増した（黒田）甲斐守の伯叔
父（黒田）惣右衛門殿とともに、我らの信仰の諸事に力を尽くし、（黒田）甲斐守に力をかけてくれるものと我らは
期待する。」（1599-1601年、日本諸国記（フェルナン・ゲレイロ編『イエズス会年報集』） 傍線引用者）

長政が家康に報告したところ、一時は家康自身が明石掃部を召し抱えるつもりであつたらしいが、長政が召抱え
た。なお、彼は300人のキリシタン武士を連れてきたらしいことは、次の記録から読み取れる。

「この（甲斐守）殿は、今や豊前にいたすべての貴人たち並びに兵士とともにこの（筑前）国へ移つたが、その
（家臣の）多くは、そして藩庁のもっとも身分の高い人たちはキリシタンであり、とりわけ彼は明石掃部ドン・ジョ
アンを召抱えていた。彼はキリシタンの殿であり、国主備前中納言（宇喜多秀家）の義兄弟で、（甲斐守）の親友
で、すでに筑前へ一族の三百人のキリシタンとともに移つて来ており、甲斐守は彼に豊富な俸禄を与えたが、それは
大いに司祭たちの慰めとなった。彼はいとも優れ、当地のこのキリシタン宗団のすべての中、良い模範であり、い
とも立派な支柱である。だが（司祭たちをも）もっとも慰めたのは、デウスが彼に死を免れさせ、戦いの間にも、そして
その後内府様からも（死を免れるように）し給うたことであつた。」（1599-1601年、日本諸国記（フェルナン・ゲ
レイロ編『イエズス会年報集』第1部第2巻） 傍線引用者）

「彼は以前自分と親密な友情によつて結ばれたキリシタンの貴人明石掃部ジョアンが、己が家臣たちの数の中にい
ることを望んだ。明石掃部は三百名のキリシタンとともに筑前の国へ入り、その領国の中で甲斐守の気前のよさに
よつて十分な扶持を享受しているが、このことは我らにとって限らない喜びを生じさせている。なぜなら彼は非常に
立派な人物で、キリシタンたちはこの人の中に、信心の優れた手本を、模倣する少なからぬものをもっているから
である。」（1601年2月25日付、長崎発信、ヴァレンティン・カルヴァーリュのイエズス会総長宛、日本年報補遺 傍
線引用者）

300人という数字はキリシタンの家臣だけだと多い数字なので、多少誇張が入っているか、あるいは、家臣の一族
郎党まですべてを含めて300人余りだと考えると自然であろう。

黒田家は筑前入国により家臣団の拡充の必要性に迫られ、宇喜多家の旧臣たちも召し抱えられた。掃部を加えると9
名（『黒田藩分限帳 慶長年中士中寺社知行書付』）。掃部自身は隠居し、道齋と称し、知行を当時、11か12歳の長
男の名義で受けた。

「都地方のすこぶる高貴で勇敢な領主、明石ドン・ジョアン掃部殿がこの（長崎の）街で示した教化的行為もそれ
に劣らぬものであつた。彼は過ぐる戦で領地を失ひ、いずれもキリシタンであるその家来3百名とともに、親友であ
り筑前の国の領主である（黒田）甲斐守（長政）に仕えるために下のこの地方で過ごしに來た。そして、その（黒
田）甲斐守がこれらすべての家来を養うに十分な俸禄を与えたところ、彼は、現在10歳か11歳の自分の長男にそれを
与えていただきたいと懇願した。」（1601、02年の日本の諸事（フェルナン・ゲレイロ編『イエズス会年報集』 傍線
引用者）

また、教団側は、熱心なキリシタンだった直之と同様に、明石掃部に長政に対する教化を期待しているというの
が、次の記録だ。

「こうして明石掃部は生命のすべての危険を免れて、甲斐守のしきたりを享受しているが、我らは彼がキリシタン
宗門に厚意を抱く意見の方へ甲斐守を引き寄せることを期待している。このことでは彼は、甲斐守の叔父または伯父
である惣右衛門殿（引用者注 黒田直之）を仲間または援助者としてもつてであらう。」（1601年2月25日付、長崎発
信、ヴァレンティン・カルヴァーリュのイエズス会総長宛、日本年報補遺）

そして、宇喜多家の所領没収により自分の所領も失われたが、筑前において二千石の高禄が与えられたことを感謝
している様子がうかがえる。

「その後、明石掃部は大坂を訪れて、そこで我らの同僚たちから二、三日歓待された。彼はいとも確実な生命の危
険を免れ、たとえ個人の所有物を失つたとはいえ、残りの人生を、榮譽をもって過ごすだけの豊かな俸禄を自分に与
えられたことに対して、いとも権能あるデウスに感謝してやまなかつた。」（1601年2月25日付、長崎発信、ヴァレ
ンティン・カルヴァーリュのイエズス会総長宛、日本年報補遺 傍線引用者）

（２）所領没収・秋月へ

掃部はこの間、長崎を訪れてイエズス会士になろうとしたが、説得されて思いとどまっている。そのときに同地に葬った妻の墓所を訪れている。妻が産後の肥立が悪く、しかも関ヶ原の戦いで主家が滅び、明石家も所領を失ったショックもあったのか、5人の子供を残して亡くなった。

「また本年には、神学校の学生たちだけでなく長崎の全市民が、旧来の聖性の模範を保持していた。私はそれをおぼろげな言葉をもって約束しよう。領主明石ジョアン掃部は昨年〔別に記したように〕、己が全財産を失ってしまった（引用者注 関ヶ原の戦いで改易になったことを指す）。彼は（黒田）甲斐守の寛大な計らいによって、筑前の国で田畑（から）の収穫物を得、それによって三百名のキリシタンたちを不都合なく養っている。彼は去る6月に長崎を訪れたが、それには司教宛下と（イエズス）会の司祭たちを訪問するためであり、もう一つには我らのイグナシオ（・デ・ロヨラ）聖下の指針に基づいて、己れ自身を天上の事物を黙想して修練し、それによっていつそう容易に己が身を現世の煩わしさからまったく隔離するためであった。自分が会員仲間に入ることを許してもらえないなら、せめて我らの司祭館で生活することを許してほしい、と。しかし会の上長たちはこの時、非常に固い論法でこのことはその望みどおりにはいかぬことを示した。なぜなら彼の息子たちの中の長男でさえまだ十二歳になっておらず、もし彼が息子たちの面倒を見ることをやめたなら、彼はデウスに対して罪を犯すことになるからであった。またもし彼が生活の方式を変えたとしたら、彼が現在キリシタンたちに与えている恩恵を、どうしても与えることができなくなるからであろうからである。彼はこれらの理由を説明されて、生活し始めている進路をそのまま継続することに決めた。彼は（六）月いっぱいには我らのもとに滞在し、その期間中は我らの聖堂で挙行されたすべての聖祭に参加した。

彼はまた午後には教理の講話を非常に喜んで聞いた。彼は亡妻が葬られた慈悲の聖母教会へ毎日趣いて、彼女の靈魂のためにデウスに祈祷を捧げた。彼は夕方になると、デウスの至聖なる御母に奉獻された聖堂に赴き、そこですべての時間を信心の黙想に耽って（過ごした）。

彼が家族のもとへ帰ろうと考えた時、デウスは彼の徳を長崎のキリシタンたちに明らかにしようと望み給ひ、彼がいかに現世の事物に対する望みから解脱しているかを一同が知るようにし給うた。」（1601年度イエズス会日本年報）

「この人は日本にいる最良のキリシタンのひとりであり、司教と司祭たちを訪問するために（1）601年の6月にはじめに当地に来了。それはまた世俗を捨てて（イエズス）会に留まる覚悟で会的心灵修行をするためでもあった。だが上長たちは、同宿か在俗修道士としてしか受け入れることを望まなかった。それゆえ彼は熱心に懇願し、そのあまりの熱意に司祭たちは彼の敬虔さと世俗蔑視のほどを見て驚嘆した。しかしながら、多くの理由をもって説得し、次のように答えた。「貴殿の子どもたちは〔まだ幼く〕貴殿を必要としており、家来たちには皆扨り所がなくなってしまうであろうし、それによって、聖職者であるより在俗の身でいる方がキリシタン宗団を助けて我らの主（なるデウス様）により多く奉仕をすることができるので、願望のままに行動することは好ましくないであろう」と。そして、彼はすこぶる思慮深く、理性に従う人物なので、司祭たちの意見ですぐに気持ちを鎮めた。しかし、まだ若年ながら世俗にひどく幻滅している人らしく、できるだけ祈祷とデウスとの交わりに身を委ねることを心に決めていた。

彼はここに1ヶ月近く留まり、心靈修行を行ない、靈魂の大きな慰安と利益を得た。そして、彼が当地の全住民に与えた教化は驚くべきものであった。なぜなら、午前中を、我らの教会で過ごし、そこであげろミサをことごとく聴聞し、教理とたいそう気に入っていた少年たちの祈祷（の集い）に毎日来て。日々、慈善院の教会を訪れ、そこに葬られている妻の墓の上に祈りを捧げた。午後は、市の外にある聖母の小聖堂に赴き、そこで祈祷に数時間を費やしたからである。」（1601、02年の日本の諸事（フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集） 傍線引用者）

とあるように、1601年6月ごろ長崎を訪れ、世を捨てて修行しようとしたとされている。彼はこのときすでに60歳を超えていたという説もあるが、「彼は若年ながら」とあり、また、一説には生年が1566年であり、そうすると、まだ35歳という若年の彼が、自分の魂の救済のために余生を過ごしたいと思ったのは、よほど「世俗に幻滅」していたのかも知れない。関ヶ原の戦いの悲惨な戦闘の中で辛くも救済された体験や、主家の没落や自己の所領の喪失などの身のまわりに起きる悲劇が、信仰に何らかの影響を与えたのかも知れない。

しかし、一時の平和が訪れた掃部に不幸が訪れた。長政が掃部の所領を没収したのである。これは、掃部がキリシタンだったから蟄居謹慎を命じられたというより、関ヶ原の戦いで死んだと思われていた宇喜多秀家の生存の噂がたち、秀家の許に馳せ参じる可能性がある明石掃部を召し抱えていることについて、長政が家康の眼を憚ったからとも言われている。

彼がいまだ長崎にいるあいだ、伏見にいた長政は、明石掃部を遇している黒田家に対する家康の圧力を怖れたのか、明石一族をこれ以上かばってやることは危険と考え、俸禄を没収するように命じたのである。

「彼と三百名のキリシタンたちを養っていた田畑（から）の収穫物が、（黒田）甲斐守の命令によって没収される件で突然の使者が到着した。その理由は次のように言われていた。内府様が奉行たちの軍勢（を相手に）首尾よく行った合戦において、（宇喜多）中納言（秀家）殿の従兄弟であり、また内府様の敵であった明石ドン・ジョアン掃部は戦死したと思われていたが生存していた。そのため（黒田）甲斐守は、自分の寛大さによって明石掃部が十分な食糧を得ており、それによって大勢のキリシタンたちを養っていることを内府様が知ったら、ひどく厄介なことが起こりはせぬかと恐れたからである、と。明石掃部は顔色を全然変えず、穏やかに落ち着いた心でこの使者を迎え、人間的なものをすべてを己が中に納め、地上的なものではなく天上的なものを期待するヨブの例に倣って、こう言った。「こうなることが不死のデウスの御旨にかなうようにと願う。私は富がともにもたらす甚だしい煩わしさから解放されて自由の身となり、天上の宝を得るために以前よりは好都合に専心しよう。なぜなら私は、私のすべての配慮と思考を、今後は己が靈魂の救済一つだけに絞ろうと決心したからである」と。」（1601年度イエズス会日本年報 傍線

引用者)

「そして我らの主は、彼がきわめて完璧にかつ神意に従って身を処した過ぐる敗北と苦難のほかに、彼の徳をこれらの新しいキリシタンに証明し示すことをお望みなので、彼はこの市から出発しようとしているとき、次のような(内容の)書状が彼に届くことを嘉し給うた。

すなわち、彼の義兄弟である(宇喜多)備前中納言(秀家)殿〔(関ヶ原)合戦以前は三ヶ国の国主であり、内府様に敵対していた〕は、前から信じられていたように死去したのではないと噂されているので、(黒田)甲斐守は、彼と彼の多数の家臣を自領で養っていることを内府様が悪意に解することを恐れ、彼から俸禄を没収することを命じている。(それゆえ)彼は、家臣を去らせ、山中の人里離れたところで十人の家来だけを伴って引きこもり、密かにそこに隠れているように、と。

(明石ドン・ジョアン)はこの報せを(普通の)人間ではないほど穏やかに聴いて、こう言った。「我らの主なるデウスは御旨のままになし給うことであり、予はこれによって、己が靈魂、またその救いのことに専念することがよりよくできよう。家来たちには深い愛情を抱き(主君としての)義務があることゆえ、ただ彼らに対して気の毒に思えばかりである」と。そして彼は、いとも辛抱強く高潔なので、我らの同僚たちには〔しばしば彼らと親しく交わっていたのに〕心配をかけないようにと誰にもこの報せを伝えようとはせず、ある日本人修道士に密かに告げただけで、こうした諦めの気持ちを抱いて筑前に戻った。」(1601、02年の日本の諸事(フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集))

しかし、博多にいた官兵衛が自分の責任でこの命令を無視し、掃部の知行を再認証したばかりでなく、その知行地をミゲル直之の秋月領近隣で与えることにした。なお、慶長年間の黒田分限帳には、「千二百五十四石 明石 道齋家頼(新参) 道齋名全登称掃部浮田氏臣、後浮田氏亡後属本藩」と記録されている。「道齋」はすでに述べたように、掃部の隠居の号で、「全登」は彼の名前であるから、明石掃部が黒田藩に士官していたことがわかる(『黒田三藩分限帳』)。

「そこで彼は筑前へ赴き、己が下僕たちの悪を好機に癒し給うデウスの望みに万事において従おうと決意した。なぜなら(黒田)官兵衛殿〔彼は自分の息子である甲斐守(長政)が留守の時、筑前の国を支配していた〕は、甲斐守がひどく冷酷にも明石掃部の命を奪おうと決心しているのを実行に移させまいと、父の権威を介入させようとしたからである。それゆえ彼は自分の息子を有める役目を引き受けた。そして田畑を所有したままでいた明石掃部は、その兄弟の(黒田)惣右衛門殿〔彼は明石掃部に非常に厚意を抱いていた〕に土地を委ね、そこで現在は己が運命に満足して生活している。」(1601年度イエズス会日本年報 傍線引用者)

「だが、我らの主は彼がその徳をこのように示すことをお望みで、その後すぐに彼のもとに駆けつけ給うた。なぜなら、〔当時、息子の留守に領国を統治していた〕(黒田)甲斐守の父、(黒田)官兵衛殿は彼に同情し、息子の命令を苛酷と考え、その命令の執行を望まず、このことの補償を引き受け、少年に与えていた俸禄はそのまゝにして、その(明石)ドン・ジョアン(掃部)の極めて親しい友人で、優れたキリシタンである兄弟の(黒田)惣右衛門殿の領地に行くように命じた。」(1601、02年の日本の諸事(フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集) 傍線引用者)

このころ、宇喜多秀家の身柄が島津家から徳川家に引き渡され、島津忠恒、並びに縁戚の前田利長の懇願により罪一等を減じられて死罪は免れ、駿河国久能山へ幽閉された。その後、八丈島に流罪となった(同地での公式史上初の流人)。もはや宇喜多家の再起は難しく、幕府による掃部への警戒の眼も緩むと予想されたことで、掃部があらためて秋月に近接した下座郡の4か村で所領を与えることに、長政も同意したのだろう。

明石掃部の知行地は、下座郡小田村(福岡県朝倉市福田町小田)にあった。また、彼が筑前国に連れてきたキリシタン武士は300人と教会側の史料に出ている(前述のとおり)。しかし、掃部に従って直接彼の知行で生計を立てていたのは八名であつた(中島利一郎稿『筑前と切支丹』)。彼が連れてきた300人のその大部分はあるいは長政あるいは直之の家臣団に編入され、一部はその後、他の国へ移っただろうと思われる。黒田藩士として明治時代を迎えた明石家があつた(注1)。のちに、明石掃部が豊臣秀頼からの呼びかけに応じて大坂城へ行く時、彼は家臣の安全保障について黒田長政と交渉した結果、彼について大坂へ行つた明石半左衛門、同八兵衛、同五郎兵衛を除いて、他の者を小河内蔵允の与力組に入れてもらったという。大坂へ行つた三名はもちろん掃部と一緒に戦死した。関ヶ原の戦いと同様、自害できずに大坂を脱出して四国へ逃れたことは、のちの世の伝説で、教会の史料には戦死とされている(「のちの世の伝説」については後述)。

ちなみに、下座郡で知行地を受けた掃部の家臣もみなキリシタンであり、小田村のキリシタン時代の名残として、貝原益軒はその『筑前国統風土記』で、次のような記事を載せている。

「くるす塚 小田村の南にあり。是むかし耶穌の徒を埋めし所也。」(『筑前国統風土記』巻之四)

益軒が指摘しているように、キリシタンはその墓地の正面や中心に大きな十字架を立てる習慣があつたので、九州から東北に至るまでこのような地名が残っている。たとえば、大分県津久見の黒芝、白杵のくるすば、長崎県生月の黒瀬の辻、岩手県水沢の黒須場などがある。

なお、長政による所領没収については、関ヶ原の戦いで討ち死にしたと届け出られた宇喜多秀家が生きており、薩摩の島津氏に匿われているという噂が広がり、重臣の明石掃部を匿っていることを家康から警戒されることを恐れた長政が、明石掃部の追放に及んだという説もあるが、要するに家康から警戒されることを恐れた点では、共通している。

(3) その後、10年ほど行方を暗ます

掃部は、秋月にしばらく滞在した。長政は官兵衛の遺言もあって、一時はキリシタン保護に傾いている。

しかし、所領の秋月でキリシタンを保護していた直之が慶長14年(1609)に亡くなると、長政は弾圧を強めた。結局、秋月にも居場所がなくなり、他国へ逃れたと言われている。

キリシタン大名であった田中吉政の柳河に逃げ、匿われたとも伝えられている。この年、田中吉政も亡くなり、忠政が跡を継いだ。忠政もキリスト教に寛容であったと言われている。

あるいは長崎で潜伏していたとする説があるが、当時の長崎は幕府の直轄都市であり、長崎奉行長谷川藤彦の下でキリシタン弾圧が強化されていたため、キリシタンは多かったものの、その長崎にはいなかったかも知れない。もしかしたら、京都や大坂、旧領の備前国などに潜伏していたかも知れない。大坂の陣での豊臣方の呼びかけにより、相当早く入城したといわれているからだ。いずれにしても確たる証拠は見つかっていない。

(4) 大坂の陣での活躍

そして、慶長19年(1614)、大坂の役が起こると豊臣方として参陣した。一説には、前年に幕府が禁教令を発令していたなかで、キリシタン勢力は豊臣家に対して希望を抱いており、これに加担して、再び布教の自由を確保したとした狙いがあったとも言われる。

『日本西教史』に、「キリスト教徒は秀頼の愛憐を望むことは無理からぬことであった。秀頼は平時からキリシタンを大坂に住ませ、キリスト教を講習することを禁じなかったばかりか、キリシタンの名士たちを軍勢に加え、特に明石掃部は衆を指揮する三大将の一人であったので、もし戦勝を得れば勤労を賞し、これをその宗教を奉ずるようのできるだろうと信じていた」とあり、キリシタンとしてこの戦いに勝利することに賭けていたことが察せられる。

明石掃部は、真田信繁(幸村)、毛利勝永、長宗我部盛親、後藤基次(又兵衛)らとともに、五人衆の一人とされている。翌慶長20年(1615)の夏の陣では、天王寺、岡山の戦い(俗説で真田幸村が家康本陣へ突撃して追い詰めたと言われる激戦)で、天王寺口の友軍が壊滅したことを知ると、松平忠直の軍勢に突撃し姿を消す。その後の消息は不明で、戦死したとも、逃亡したとも、はたまた国外に逃亡したとも言われており、死亡時期については諸説ある。

①秋田、津軽逃亡説(伝説)

秋田県比内町に明石掃部の子孫と伝えられる一族がある。家伝によれば大阪落城後に仙台で伊達政宗に保護される。しかし、幕府の詮議が厳しくなったので津軽に移動し、津軽信枚(キリシタン大名)の保護を受けて弘前城内に匿われた。掃部の三人の男子は、弘前を離れて流浪の末に扇田にたどり着いて定住したと言われる。子孫と伝えられる明石家には掃部から伝えられた仏像が残っている。

②播磨逃亡説(伝説)

出身地の隣国である美作国に逃げ込んだという説がある。美作国は宇喜多家の旧領だった。美作国(現岡山県北部)の後山山麓に明石を名乗る一族があり、掃部の子孫といわれる。後山は、岡山県の最高峰で、今でも女人禁制の修験場がある霊峰としても知られている。

江戸時代中期に書かれた『東作誌』に、「家伝に曰く掃部介全登大阪より落魄して後山村に來りし時 凌霞花今を盛なるに愛でてついに足を駐むと云う。貯の黄金若干あり田地多く買得し熾なる時は高百八十石もあり 土人等富むと緩怠なるを惡み 喧嘩に乗じて之を殺す、其旧趾今に喧嘩橋と云う、掃部介の妻子是を聞いて大いに憤怒し眉尖刀(なぎなた)を振出して七人斬殺せる故土人退散す 今其の旧趾を十日の祖母と云う・・・(中略)・・・」

元和元年5月7日大阪城落城のときあやうく戦場を脱出し浦上時代より縁故の多い播磨の奥地に匿れ、やがて後山山麓の凌霞花の花盛りに心ひかれて土着し農となり一族各地に繁栄する。全登に四男あり。長子は吉野郡讃甘庄今岡村(現美作市下町)に住む(明石屋敷なる地名、石垣あり)俗称義蔵という。豪邁の人物で又俳諧に名を得、蛙我と号す。二子、三子は商人となり、四子が後山村にて農耕に従事する」とあり、この記事に間違いなければ、明石掃部が逃亡してきたことは確かである。村々の伝承を集めたのであろうが、掃部の息子の記述が具体的であるなどの点をどう理解するか。

ちなみに、『東作誌(とうさくし)』とは、江戸時代後期(文化文政時代)に正木輝雄が調査、著述、編集を行った美作東部の地誌である。『作陽誌』が扱わなかった東部六郡を扱っている。

寛政3年(1791)、軍学師役として松平氏津山藩に雇われた正木輝雄は、文化9年(1812)より個人事業として当時他藩や天領となっていた美作東部を回って伝承・史料の収集に努め、文化12年(1815)に一旦『東作誌』を書き上げる。正木はその後も文政元年(1818)まで調査を続け、文政6年(1823)の死の直前まで編纂を行っていたと見られる。正木輝雄の死後、『東作誌』は津山藩に献上されたが、複写・活用されことなく死蔵されてしまう。嘉永4年(1851)、江戸藩邸で儒官昌谷精溪(さかや せいけい)が死蔵されていた『東作誌』を発見。欠本散佚があったため修復して編集し直し、これが現在伝わる『東作誌』の元となっている。当時の津山藩は正木の活動に御内用として補助金を支給していたが、あくまで『東作誌』は正木の個人事業であり、費用の多くは自弁で公的許可もなかった。その為、正木は廻村時の他領調査を「潜行」と称している。

家康は“明石狩り”といわれる掃部の一族郎党をきびしく追及した。そのため、当初は明石掃部とのつながりは伏せられたが、時代が下ってくると、上記以外にも各地から明石家の子孫と称する人々が名乗り出てきている（掃部の墓を称するものもある）。幕府と戦った明石掃部の子孫と名乗っても罰を受けるどころか、名誉を得られる時勢になったためであろう。

8・明石家の子孫

明石掃部が筑前に連れてきた一族や家臣たちの大半は黒田藩士として存続した。また、彼が大坂の陣のあとに逃亡した先に子孫と呼ばれる人たちがいる。それらの子孫たちの中で有名な方をあげて、このQ & Aの締めとしたい。

(1) 明石元二郎

筑前に残った明石掃部の伯父にあたる則貞(元知)は黒田姓を与えられ、その家も代々、黒田家に仕えた。明治時代に有名になった明石元二郎陸軍大将もその一族である。

明石元二郎は黒田藩士で、陸軍に入り、日露戦争で、ロシアの諜報活動や、ロシア革命の蜂起工作を行なって、ロシア軍の後方を攪乱。陸軍大将となったあと、第7代台湾総督となり、郷里の福岡に戻る途中の洋上で亡くなった。彼の遺言により、台北市のキリスト教墓地に埋葬された。筑前に残って黒田家家臣となった則貞(元知)も、当初はキリシタンだったと思われるが、棄教することでお家の存続を図ったのか、もしかしたら、明石家は代々隠れキリシタンだったのか、あるいは、たまたま元二郎自身が明治の世になってから改宗したのか。もし前者であったとしたら、江戸時代260年間信仰を守り続けたことになるから、スゴイな話だ。

博多の勝立寺には黒田藩士となった明石家の代々の墓がある。碑には「播州明石家筑前住祖明石安正、同室次女墓」とあり、境内には「明石家累世之墓」として、明石元二郎夫妻も葬られている(ここには元二郎の遺髪と爪が葬られているという)。



勝立寺(福岡市中央区天神)



明石安正墓



明石元二郎夫妻墓

これについても、ミステリアスだ。なぜなら、勝立寺はもともと官兵衛の時代に建てられたキリスト教会を、長政が打ち壊して、日蓮宗の寺を建立させたという因縁があるからだ。京都妙覚寺の僧日忠が妙典寺でキリスト教徒イルマン旧沢や安都と宗論を行った。この宗論は博多の別名にちなんで「石城問答」と呼ばれる。宗論に勝った日忠に対して、黒田長政は没収したキリスト教会の土地を付与し、勝立寺を建立させた。これらは起きたのは、慶長8年(1603)と公称されている。官兵衛が存命中にも関わらず長政がそんなはずがないことなどから、実は、もつと後の時期に行われた「石城問答」や教会の破壊を、あたかも慶長8(1603)に行われたかのように偽装したのではないか、と言われている(本当はいつだったか、後述する)。

日本各地には仏寺のようにみせかけてキリシタン信仰を守っていた場所が数多く存在する。教会堂が破壊され仏寺に建て替えられたときに、その教会に参詣していたであろう明石家の人々は、日蓮宗に改宗して同寺を菩提寺にしただけなのか、あるいは、密かにキリシタン信仰を守り続けたのか。謎解きは、また別の機会にしたい。

ちなみに、相当本題から外れるが、明石元二郎の息子の元長は、大東亜戦争のあと、元陸軍中将であった根本博と通訳の吉村是二の台湾密航を援けている。しかしその入国や帰国(1952年6月)を見届けることなく、根本らの出国からわずか四日後に激しい過労により42歳の若さで急死した。2009年10月25日に台湾で行われた古寧頭戦役60周年式典には明石の子孫は日本人軍事顧問団の遺族とともに招待され歓待された。

台湾に密航した根本博は、国民党軍を援け、シナ人民解放軍を、計略をもって打ち破った(金門島の戦い)。国民党軍がシナ人民軍を撃退したことで、台湾本島は侵攻をまぬがれ、中華民国の基礎が築かれたのである。根本博がわざわざ危険を冒して密航したのは、終戦時にはモンゴル(当時は蒙古聯合自治政府)に駐屯していた駐蒙軍司令官として、終戦後もなお侵攻を止めないソ連軍の攻撃から、蒙古聯合自治政府内の張家口付近に滞在する邦人4万人を救った。その際に、国民党政府から人命保証の約束をとりつけ、それに恩義を感じていたからだと言われている。彼のアドバイスもあって、シナ人民軍を狭隘地に誘い込んで撃破することができた。蒋介石政府は、台湾の島嶼部及びその対岸のシナ大陸金門を支配下に置いているが、それは、このときの戦いに由来している。

(2) 明石康

明石康氏は元国際連合事務次長だった方。秋田・津軽地方に逃れた明石一族の出身で掃部の子孫と伝えられている（野添憲治編『秋田県の不思議事典』）。同氏は1992年には国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)事務総長特別代表に就任し、カンボジア和平につとめた。日本が初めて自衛隊を海外に出したときだ。

(注 1) 明石家のうち黒田家に仕えたのは、以下の通り。

No.	家名	概要
①	明石宗和一安正 一権之允一市郎右衛門	宗和は、播磨国明石郡枝吉城主で官兵衛の生母岩の父。 安正は宇喜多秀家に仕えて朝鮮の役で戦死（勝立寺の石碑に銘じられている）。上記の縁もあり権之允を官兵衛が招いた。
②	明石与太郎政村 一菊右衛門政重	本姓赤松氏、播磨国明石郡高畑城主。政重は慶長20年に退出し、弟たちが継いだ。
③	明石景行—景憲 一飛騨守—掃部（全登）	備前国保木城主。飛騨守は宇喜多直家に仕えて3万3千石。
④	明石宗和一仙恵 一元知（左近）—市右衛門 一専右衛門政勝（黒田勘十郎）	①と同系。左近は関白秀次事件で自害。子孫は秋月藩士となった。

(注) ①～②は豊前時代からの家臣。③～④は筑前移封後の家臣。明石元二郎は掃部の子孫と言われているが、むしろ①の系統かも知れない。①は、元二郎夫妻の墓がある勝立寺に、安正の墓があることから。いずれにしても先祖が親戚であったことには間違いない。

【Q 1 1】 側室を持たなかったことの真相

官兵衛に生涯で一人の妻しか持たなかったと伝えられている（側室の記録が発見されていない）。そのような“普通ではない”行動をとったのは、なぜだったのだろうか。

1・戦国大名って側室は当たり前だったの？

生涯一人の妻だけというのは、現代の我が国においては法律上決まっていることで、一般通念上も当然のこととして受け入れられている。もちろん、例外もある。しかし、戦国時代の大名たちにおいては、これと正反対であり、次世代を担える子供を作って、男の子は本家または分家を継ぎ、女の子はしかるべき家に嫁いで、お家安泰を図るのが至上命題だった。だから、もし妻が一人というのは、その至上命題のためには非常にリスクな行為だった。それは、一人の女性が産める人数にも限界があるし、その女性との間に子供ができないかも知れない。また、せっかく出来た子供も医療が発達していないので、子供が成長するまでに亡くなってしまう時代だったのだ。

戦国時代でも、一般庶民やそれほど有力ではない武士は一夫一妻が普通だった。出身階級の低い武将は、有力になってももともと習慣に従って正室が亡くなるまでは側室を置かないこともかなりあったようだ。

側室を置くのはお金もかかるし、いろいろな気遣いが必要で大変なので、正室との間に次世代を継ぐ期待ができる子供さえいれば、とくに側室を置く必要性を感じなかったのかも知れない。“男って絶対浮気するでしょ！”っていうことはよく言われるが、いくら浮気心があっても、他所でこっそり遊んでくるだけで側室を置かない方が気楽で安上がりだったのかもしれない。

秀吉がたくさん側室を置いたので、戦国武将は誰でも側室がいっぱいいいたようなイメージがあるが、庶民の生まれなのに側室を抱えた秀吉はむしろ少数派かも知れないという。

ただ、生まれつき身分が高かった武将は別だった。織田信長は側室もいたし、寵童（美少年で、男色の相手を務めて寝屋を共にする）までいた。

戦国武将としては妻が一人というのは、後継者に相応しい子どもを設けて家を存続させる目的からすると、非常にリスクが高いことであった。当時は、医療が発達しておらず、子どもが成人まで育つのは大変なことであった。男の子は後継者としての嫡子、それ以外の男の子（庶子）も別家をたてて重臣として家を支えたり（例：羽柴秀長（秀吉の弟）、武田信繁（信玄の弟））、他家の養子となって本家を支える（例：吉川元春・小早川隆景）など、重要な役割を果たしたり、娘は他家に嫁いでその家と実家との間の絆を強くしたり、嫡子がいない場合には婿養子をとって家を存続させたりした。つまり、子どもが何人かいたほうがよかった（もちろん、子供が多いと跡目争いのリスクがないわけではない）。そのため、ほとんどの戦国武将は正室以外に側室を複数名持って、男子を作ることに熱心であった。

そんな中で、官兵衛が終始一貫して側室を置かなかったのには、どんな理由があったのであろうか。側室を置かないことのリスクを理解できない官兵衛だったであろうから、何らかの意図があったことが当然考えられる。果たしてどんな意図があったのか？ひとまず、まわり道して他の戦国大名たちから見ていくことにしよう。

2・他の戦国武将たちの側室事情

（1）側室を持っていた武将たちは――――

①信長



信長には11人の男の子と11人の女の子が生まれ、隠れ側室（文献とかには出てない女性）がいた可能性もある。正室の濃姫（斎藤道三娘）との間には子がなく、子供はいずれも側室との間の子であった。信忠と信雄は生駒氏、信孝は坂氏との間に生まれている。織田家の発祥地は越前国織田庄（福井県丹生郡越前町）にある劔神社で、本姓は藤原氏（のちに平氏の系統と仮冒）。三管領の斯波氏の守護代であり、室町時代は尾張国の守護代を務める家柄であった。正室濃姫との間には愛がなかったかのように描かれることが多いが、その真偽は別として、当然のように側室を持って子を成していた。

②秀吉

出自は低い身分であった。彼が、女好きだったのは有名な話。特に、身分が高かったり、家柄のよい女性を好んだ。正室はおね、側室は淀殿（浅井長政とお市の方の娘・織田信長の姪でもある）、三の丸殿（織田信長の娘）、松の丸殿（京極家の娘）、加賀殿（前田利家の娘）、三条殿（蒲生氏郷の娘）、姫路殿（信長の弟・織田信包の娘）、甲斐姫（成田氏長の娘）、備前殿（宇喜多直家の未亡人）などたくさんいた。しかし、子ができず高齢にしてようやく淀殿との間に子を成した。これだけ多くの女性を囲っていたが、子がなかなかできなかった。

③家康

家康は三河国の国士豪・松平氏出身。大身になるにつれ側室の人数も増えていき、最終的に21人もの側室がいたと言われる。健康に気を付けており、巻狩りなどのスポーツをよくし、暴飲暴食も避けて粗食、薬も自ら調合しており、それらの女性たちを満足させるために精力剤（漢方）も自分で調合して飲んでいたようだ。

好色でないわけではないが、どちらかというと家を盤石にするために子作りに励んだ傾向が強い。家康は、秀吉と違って「子供を産める安産体型」で身分が高くない女性を好んだようだ。側室のうち五人が出産経験ある者で、子供を産めるという理由で熟女を側室にしていた。身分にもあまりこだわらず、使用人出身の側室も三人もいる。

しかし、五十才過ぎた頃から好みガラリと変わり、今まで熟女ばかりだったのに、今度は若い子ばかりを側室にしている（みんな10代！最年少はなんと12歳！！犯罪やがな）。ちなみに家康は、2度「正妻」を迎えたが、どちらも上手くいかなかったことが影響していると言われている。

④伊達政宗

正室・愛姫と、少なくとも7人の側室があり、五郎八姫など10男4女を儲けた。ただし側室・子女の数は記録に残っている者のみで、存在が確認されている1男1女以外の落胤および側室が居た可能性もある。正室愛姫の間には2男1女を設け、秀宗は仙台藩2代藩主となっている。

⑤細川忠興

正室明智玉子以外に側室が4人おり、正室との間には3男2女を設けたと言われているが、そのほかに3男2女を設け、嫡子となったのは、正室の子ではなかった。正室玉子は謀反人明智光秀の娘であり、キリシタンであったことから事情が複雑となった。

ここからちょっと駆け足で――――

⑥加藤清正―側室は3名。全体として（以下同様）2男2女を設けた。

⑦前田利家―側室5名。6男9女を設けた。

⑧上杉景勝―側室1名。1男を設けた。

⑨池田輝政―側室は2名記録されている。11男3女を設けた。

⑩最上義光―側室1名記録されている。6男3女を設けた。

⑪長宗我部元親―側室は1名記録されている。6男4女を設けた。

⑫鍋島直茂―側室は1名。2男3女を設けた。

⑬佐竹義宣―側室1名。2男を設けた。

⑭筒井定次―側室1名記録されている。2男5女を設けた。

⑮南部信直―側室1名。1男2女を設けた。

（２）側室を持たなかった武将たちは——

①明智光秀



明智光秀は側室を持たなかったと言われている。

青年期の履歴は不明な点が多いが、通説によれば、光秀は美濃国の守護土岐氏の一族で、土岐氏にかわって美濃の国主となった斎藤道三に仕えるも、弘治2年（1556）、道三・義龍父子の争い（長良川の戦い）で道三方であつたために義龍に明智城を攻められ一族が離散したとされる。その後、朝倉氏をはじめいくつかの家を転々として織田信長に仕えるようになったとされている。光秀の母は“教育ママ”だったという逸話もある。

正室は、『明智軍記』などに記載のある、妻木氏（名前は熙子）。

次のような逸話が伝わっている。熙子は美濃の妻木勘解由範熙の長女として生まれた。明智光秀と縁談が決まったあと痘瘡にかかり、美しかった顔に痘痕ができてしまった。妻木家にとっては潰したくない縁談だったのか、あばた顔の熙子の代わりに、結婚式の日日に熙子の妹を身代わりとして、直接明智家に向かわせた。しかし、光秀はこれを見抜き、熙子を妻に迎えたという逸話がある。彼の生真面目さを象徴する逸話である（真偽のほどはわからない）。

光秀は正室の熙子夫人だけを愛し抜いたと言われる。非常に仲のよい夫婦だったようで、織田信長に仕える以前の貧しい時代に、熙子が女性にとって命の次に大事な黒髪を売って夫の同僚を接待する費用を捻出した話がある。ちなみに、熙子は元々痘痕ができる以前は美女だったようで、娘の細川ガラシャも非常に稀なる美貌だったようだ。

ただし、俗伝として喜多村保光の娘、原仙仁の娘という側室がいたという説もある。また、前室に山岸光信の娘がいたとする説もある。側室がいたという記録が残っていないだけだった可能性はゼロではない。

②直江兼続



直江兼続も側室を持たなかった。そして、世継ぎがいなかった。

兼続といえば、NHK大河ドラマ「天地人」（2009年度）で、一躍有名になった武将だ。もともと彼は直江家ではなく、樋口家の出身で、直江家に婿養子となっている。樋口家は、長尾政景家老、上田執事とも、新炭吏だったともいわれている。

天正9年（1581）に、景勝の側近である直江信綱が、毛利秀広に殺害される事件が起きる。兼続は景勝の命により、直江景綱の娘で信綱の妻であった船（せん）の婿養子となり、跡取りのない直江家を継いで越後与板城主となった（船にとっては再婚）。この時、信綱とお船の間に生まれたとされる子は出家して高野山に入ったという。

兼続はこの船との間に、一男二女（長男：直江景明、長女：於松、次女は名が不明）に恵まれた。兼続と船の仲は大変良かったようであり、兼続は生涯、側室を持つことがなかった。

慶長20年（1615）7月12日、父に先立って病死。享年22（18とも）。

ちなみに、兼続は慶長9年（1604）、本多正信の次男・本多政重を長女於松の婿養子に迎えているが、翌年に於松は早世した。長男景明も慶長20年（1615）に早世した。生来病弱で両眼を病んでいたため、兼続が景明のために五色温泉を開き、長期間の湯治をしたという。婿養子の政重と、景明誕生前に養子であった本庄長房の2人が、共に加賀へと出奔していたため、父・兼続に後継者は残っておらず、母・船の死後、直江家は無嗣断絶となった。

このように、実子は病弱ということになると、やはり、家名断絶のリスクが高くなるのである。ただ、養子をもらえば家名の存続自体は可能だったため、兼続も養子をもらった（徳川家に気を遣って本多家からもらった）。養子が出奔したあと、再度養子をもらわずに、主家のことを考えて、家名を自分の代で終わらせたとと言われており、一概には言えないが、側室を設けてできるだけ多くの子をつくっておくことが、家名存続のためには重要なことだったのである。

③石田三成



石田三成も側室を持たなかった。

石田氏は郷名を苗字とした近江国の土豪であつたとされている。

正室皎月院（こうげついん）は三成とのあいだに、三男三女の母（石田重家、石田重成、辰姫ら。後妻であり二男一女の母とも）を設けた。父は宇多頼忠、姉に山手殿（真田昌幸の正室）、兄弟に宇多頼重らがいる。三成からは「うた」と呼ばれていた。当時政権の中心にあつた三成の妻であるにもかかわらず、逸話などはほとんど残っていない。

関ヶ原の戦いの際には父や三成の家族とともに佐和山城にいた。関ヶ原で三成ら西軍が敗れると、徳川家康は西軍を裏切った小早川秀秋らに佐和山城を攻めさせた。城方も奮戦するものの数に敵わず、宇多頼忠、頼重らは自害し、三成の家臣土田桃雲が皎月院ら婦女を刺殺し天守に火を放つたという。享年は不明。

長男の石田重家は、関ヶ原における西軍大敗の知らせを知ると、重臣の津山甚内や乳母らによって密かに京都妙心寺の塔頭寿聖院に入り、住職の伯蒲恵稜によって剃髪して仏門に入った。

重家は京都所司代奥平信昌を通じて助命を嘆願し、家康に許される。後に寿聖院の三代目を継いだ。ちなみに、寿聖院は三成が実父正継のために建立した寺である。

次男の石田重成は、西軍が東軍に大敗し居城佐和山城も落城したことを知ると、津軽信建の助けで乳母の父・津山甚内らとともに陸奥国津軽に逃れた。彼の妹、辰姫は津軽信枚に嫁いでいた。後述するが、津軽信枚の父為信は南部家から独立するにあたり、石田三成の取りなしで秀吉から認められたという経緯があり、その恩義を津軽家は感じていたことから匿つたのであろう。その後は彼は杉山源吾を名乗り、津軽氏の保護のもと深味村（現・板柳町）に隠棲する。長男・吉成は弘前藩主津軽信枚の娘を妻として家老職についており、子孫の杉山家は弘前藩重臣として存続した。

正室ひとりしかいなかったが、子宝に恵まれた。関ヶ原の戦いで三成自身が敗れて亡くなったとはいえ、本州の北端で家名を存続させている。

④山内一豊



山内一豊も側室を持たなかった。NHK大河ドラマでも、妻千代のあげまんぶりが喧伝されていたことは記憶に新しい。

山内家の出自は諸説あつてはつきりしない。

妻の千代（見性院（けんしょういん））は、夫に馬を買わせるために大金を差し出した話や、笠の緒文などの様々な逸話で知られ、良妻賢母の見本とされる。とはいえ、この妻との間には、男子が生まれず、実子は与祢姫のみであつた。

しかし、その与祢姫も、天正地震によって一人娘の与祢姫を失っている。それでも、一豊は側室を持たなかった。

ちなみに、天正地震とは、天正13年11月29日（1586年1月18日）に日本の中中部で発生した巨大地震で、被害地域の記録が日本海の若狭湾から太平洋の三河湾に及ぶ歴史上例のない大地震であつた。震源域もマグニチュードもはつきりした定説はない。三河にいた松平家忠の日記によると、地震は亥刻（22時頃）に発生し、翌日の丑刻（2時頃）にも大規模な余震が発生。その後も余震は続き、翌月23日まで一日を除いて地震があつたことが記載されている。

この頃、一豊は、小牧長久手の戦いのあと、豊臣秀次の宿老となり、天正13年（1585）には若狭国高浜城主、まもなく近江長浜城主（2万石）となった。その秀吉出世の地、長浜城主となったときに、天正地震によって一人娘の与祢姫を失っているのである。

一豊は、気を取り直して、領内復興に努めた。その間、母も亡くしている。

地震の被害にあつた地域の復興作業は以前として続いていた。一豊も領内復興に全力を注いだ。この影響もあつて2万石とりになつても台所事情は極めて苦しかったが、一豊は、機転の利く妻と共に、城下の復興に懸命だつた。

<捨て子を拾う>

ここで、なんと一豊は捨て子を持ったのであった。その子は、妻千代が与祢姫の墓参りに行った帰り、屋敷の門の近くに、わらかのかごに入った状態で捨ててあった赤ん坊であったという。

この拾子の素性については、一豊が側室に産ませた子とか、家臣の子など、諸説ある。いずれにしても、一人娘を亡くし、母も亡くしたときに、不幸な話しが続いた中で、一筋の希望として豊夫妻も気持ちが安らいだことだろう。

しょうなんそうけ

この子の名前のはちに 湘 南宗化となる。豊臣秀次が跡継ぎ問題で切腹した文禄4年（1595）頃に、養父・一豊の命令で家を離れて出家する。これは、正式な血統ではない彼に家督を継がせるのは、将来、山内家にとって問題になると考えたからだと思われる。

その後、京都で修行を積み、養父母から土佐国の吸江寺を与えられて住職となる。また、京都妙心寺大通院の第2代住持でもあり、朝廷から紫衣の勅許を受けるほどの高僧となった。土佐慶徳山円明寺（江戸時代に焼失）の中興を行っている。この妙心寺大通院は山内家菩提寺となり、ここに一豊夫婦の京都墓所もある。また、見性院は夫・一豊が慶長10年（1605）に死去すると、土佐を引き払い湘南宗化のいる妙心寺近くに移り住んで余生を京都で過ごしている。なお、湘南宗化の妙心寺時代の弟子（土佐吸江寺にも同行）に山崎闇斎がいる。

<養子を迎える>

結局、男の子だけでなく、実子に恵まれなかった一豊夫妻は、養子を迎えることとなった。

一豊の同母弟の山内康豊の長男であった山内忠義を、慶長8年（1603）に養嗣子とした。彼は、徳川家康・徳川秀忠に拝謁し、秀忠より「忠」の偏諱を賜って忠義と名乗った。同10年（1605）に家督相続したが、年少のため実父康豊の補佐を受けた。慶長15年（1610）、松平姓を下賜され、従四位下土佐守に叙任された。また、この頃に居城の河内山城の名を高知城と改めた。

<まとめ>

一豊は正室しか妻をもたなかったのだろうか。一般的には、愛妻家であったと言われている。世継ぎが生まれないまま、天正大地震（天正13年（1586））で一人娘を失ったのが、41歳。そのとき、妻の千代は29歳。

子供を産める年齢ではあるものの、それまで娘一人だったというのは、家中の者たちは危ぶんだに違いない。側室の勧めを断っていたのか、あるいは、千代の力が強すぎて、一豊がこそ〜りと側室を作り、捨て子と称して育てたのか・・・単に側室の記録が残っていなかったのか。

一方で、「拾い子」は頭がよかったが、やっぱり、氏素性が判らない子供を嫡子にするわけにはいかないから、出家させたというの何となく不自然な気がする。乳飲み子の頃から山内一豊の子として育てられたのであれば、別に実の親との縁は切れているのであって、あえて問題にするほどのことなのだろうか。実は、その子は「拾い子」などではなく、誰かの子を引き取ったのではないか・・・その子は、秀次の切腹の時期の前後に出家させられている。その頃、一豊50歳、千代39歳。すでに、世継ぎを産むことは難しい時期に、優れた能力があると見られた「拾い子」で、せつかく養育した子をあえて出家させる必要があるだろうか。

いずれにしても、記録上は側室がいなかったことは間違いない。あえて、おしどり夫婦のあげまん女房にまま、そってしておいてもいいのかも知れない。

⑤毛利元就



元就は側室を持たなかったわけではないが、正室の存命中は、側室を持たなかったと言われている。

毛利家は大江広元の末裔で安芸の国人。元就自身は嫡子ではなかったが、兄とその子の死により家督を継いだ。

みょうきゆう

妻の 妙玖（これは法名で、本名は不詳）は、吉川家の出身で、元就との間に長女（高橋氏人質、夭折）、毛利隆元、五龍局（穴戸隆家室）、吉川元春、小早川隆景を設けた。政略結婚であったが、元就との夫婦仲は良かったとされている。妙玖が存命中には側室は置かず、「三子教訓状」の中でも、その死を惜しんで息子達に彼女の供養を惜しまぬよう命じている。

元就の場合には、3人の男子に恵まれ、3人ともしっかりと武將に育っており、側室を置く必要性は感じなかったのかも知れない。

⑥小早川隆景



小早川隆景にも側室がいなかった。そして、世継ぎがいなかった。

隆景は、毛利元就と正室妙玖の三男として生まれた。当時、小早川氏の本家・沼田小早川家の当主・小早川正平は21歳の若さで討死したため、繁平が沼田小早川家の家督を継いだ。しかし、繁平は幼少の上に病弱だったため、大内義隆や毛利元就に尼子氏の侵攻が始まった際に防げないと懸念され、天文19年（1550）、尼子氏と内通した疑いで拘禁し、強引な手段で強制的に隠居・出家に追い込まれた。このとき、天文20年（1551）、分家の竹原小早川家を継いでいた隆景に沼田小早川家の家督も継がせるために隆景は問田の大方と結婚した。

二人の間に子はなかったが、隆景は側室を置かず、夫婦仲は睦まじいものであった。しかし、夫婦仲は睦まじいことが、かえって小早川本家の血筋が途絶えさせることになってしまった。婿養子であることの気遣い^{ふさ}からか、妻と接するに礼人のごとくであったという。その後、元就の末子である弟、才菊丸を養子に迎え、小早川元総（後の小早川（毛利）秀包）と名乗らせて、家督を継がせた。

このち、秀吉から毛利家乗っ取りを画策され、羽柴秀俊（のちの小早川秀秋）を毛利本家の養子に入れられそうになったが、隆景が自分の養子にすることで乗っ取りを回避した。このため、小早川元総（後の小早川秀包）は廃嫡され、別家を創設している。「画策」と書いたが、そもそも豊臣家の養子を迎えることは、お家の安泰につながる一つの有力な手段であって、毛利側が嫌々呑まされた悪い話とはいき切れない。一応、「画策」したという前提で話を進めると、このとき、毛利家の乗っ取りを「画策」したのは官兵衛だったという説もある。しかし、それはないだろう。むしろ、秀吉や官兵衛以外の者が画策し、官兵衛が実行させられたのではないだろうか。官兵衛は、脆弱な政権基盤で一族の力が弱いという、豊臣政権の弱点を理解し、豊臣家との関係が深い毛利家や小早川家との紐帯を太くしようと思っていただけで、後世、「乗っ取り」という話にされてしまったのだろう。隆景の養子とするアイディアも、実は官兵衛の発案だったかも知れないし、このアイディアを秀吉に納得させたのは、ほかならぬ官兵衛であったはずである。

養子を迎えて、豊臣家との紐帯は深まり、家名断絶も避けられたとはいえ、秀秋を養子にもらったばかりに、毛利本家は大幅な減封となり、小早川家自体も秀秋の代で断絶してしまった。ちなみに、“バカ殿”のように描かれることが多い秀秋であるが、それが彼の実像だったかどうかは微妙だ。江戸時代に、“裏切り者”の汚名を着せられて、さんざんこき下ろされた可能性がある。16歳の時の朝鮮出兵（慶長の役）で初陣のとき秀秋が、明の大軍に包囲された蔚山城の加藤清正を救援に向かった戦いでは、自ら馬に乗り退却する敵軍を激しく追撃し、数多くの敵兵を討ち取るなど武功を上げた。秀吉は、正室の甥とはいえ血縁でもない秀秋を、一時は自身の後継者と本気で考えていたようである。これほど秀吉に気に入られていたということは、彼が利発な少年であったことの証だと思われます。秀秋には実兄が4人もいたのに、秀吉は彼をあえて選んだわけだから...

⑦本多忠刻（千姫の夫となった人）

この人、誰？と思われた方もおられると思うが、よく大坂の陣で悲劇の姫として描かれる千姫の夫である。大坂の陣のあとに千姫と結婚した。彼は、側室をおいていない。それは、將軍家への気遣いだったのかも知れない。

慶長元年（1596）、後の姫路藩主・本多忠政の長男として生まれる。祖父は本多忠勝。大坂夏の陣では忠政と共に出陣し、慶長20年（1615）の道明寺の戦いにも参加して敵の首級を挙げている。戦後の元和2年（1616）、徳川家康の孫娘で豊臣秀頼の正室だった千姫と婚姻した。家康が臨終の際に、政略結婚の犠牲とした千姫のたを考えて、忠刻やその生母に婚姻を命じたとする逸話もある。

この興入れのとき、「千姫事件」が起きている。この事件は、元和元年（1615）の大坂夏の陣による大坂城落城の際に、坂崎直盛（宇喜多詮家、宇喜多秀家の従兄弟）は、千姫を大坂城から救出した（実際には、豊臣方の武将、堀内氏久が直盛の陣まで護送した後、直盛が秀忠の元へ送り届けた、とする説が有力）。直盛は火傷を負いながら千姫を救出したにもかかわらず、その火傷を見た千姫に拒絶されたことで、千姫奪取計画を立てる事件を起こしたと言われている（ただし火傷に関しては俗説とする説も有力）。

家康より千姫の縁組を依頼された直盛が、公家の間を周旋し、縁組の段階まで話が進んでいたところに、突然、本多忠刻との縁組が決まったため、面目を潰された直盛が千姫奪回計画を立てたと言われる。しかし、計画は幕府に露見し、直盛は切腹したとも、斬首されたとも言われる。

まあ、筆者の推測では、大坂の陣で豊臣家は滅亡したことを契機に、宇喜多家出身の直盛を、しばらく生かしていたが、はめるワナと仕掛けたんだらうと思う。直盛に千姫の身の振り方を依頼すること自体が不自然だし（秀頼との政略結婚の道具にしてしまったことを悔いた家康が、自ら相手を選ぶのが自然）、突然縁組が勝手に決まるのも不自然だ。きな臭さを感じる。直盛が亡くなったあと、直盛の所領だった津和野藩に近い、安芸の福島正則が難癖つけられて改易になっている。

千姫の間には、結婚して2年後に元和4年（1618）に長女・勝姫（池田光政室）、元和5年（1619）には長男・幸

千代が生まれている。夫婦仲はよかったのか知れない。しかし、元和7年（1621）に幸千代が3歳で早世し、寛永3年（1626）に忠刻も結核のため亡くなってしまった（享年31）。

なお、宮本三木之助（23歳）は忠刻の供をして殉死し、その他に岩原牛之助（21歳）も殉死した。忠刻は忠政の世子だったが早世したため、弟の政朝が世子となって姫路藩第2代藩主となった（姫路城をほぼ今の形にした池田輝政は、小早川秀秋の改易後に、岡山に移封となっています）。

家康や秀忠が、千姫の幸せを願い、幸せな結婚生活にふさわしい相手として選ばれたのだろう。夫、忠刻もその期待に応えて、平和な日々の中で千姫に女性としての幸せともたらしたかも知れない。

⑧福島正則

側室の記録はなく、正室が亡くなったあと、妻を娶っている。福島正信の長男として尾張国で生まれた。母が豊臣秀吉の叔母（大政所の姉妹）だった。星野成政の子で福島正光の養子になったともいわれる。

入信していないが、キリスト教に理解を示しており、黒田直之（官兵衛の弟）が正則を広島城に訪れた際、正則の家臣が「我らの教えは肉欲的快楽を厳しく禁じているので日本の領主には不都合である」と答えると、正則は「予に難しいのはそのことではない。この教えに救済があることが確実に判れば、そのようなことはどうでもよい。だが、時間があるので、説教を聞くことにしよう」（後略）」（1603、04年の日本の諸事（フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集））と言っている。

3男2女を設けており、側室をおく必要性を感じなかったかも知れない（側室の記録がないだけでも知れない）。

ここからちょっと駆け足で———

⑨蜂須賀正勝（子六）一側室はなく、1男2女を設けた。

⑩蜂須賀家政一側室はなく、1男3女を設けた。

⑪藤堂高虎一側室の記録はなく、2男3女を設けた。

⑫加藤嘉明一側室の記録はなく、3男3女を設けた。

⑬浅野長政一側室の記録はなく、3男3女を設けた。

⑭浅野幸長一側室はなく、2女を設けた。

浅野家は秀吉の親戚筋で、幸長は浅野宗家初代。男子がいないので、弟の長晟が家督を継いだ。安芸の福島家の改易後、安芸広島に移封された。ちなみに、長晟の弟の播磨赤穂藩において、元禄赤穂事件（忠臣蔵の題材）が起きている。

⑮島津義弘一側室の記録はなく、3男2女を設けた。

⑯立花宗茂一側室はなく、子なかった。忠茂は養子。

関ヶ原の戦い後に牢人するが、のちに、陸奥棚倉藩主となり、筑後柳河藩に復帰した。柳河藩の初代藩主。関ヶ原の戦いで改易後、大名として復帰した武将は多くいるが、旧領に復帰した武将は宗茂ただ一人である。

ぎん ちよ

正室の閨千代（大友家重臣立花道雪の娘）は、柳河移転後に宗茂と別居（事実上の離婚）するなど、夫とは不仲であったと言われ、夫婦の間に子供はいなかった。その後、二人の正室を迎えているが、子はなせなかった。

⑰生駒親正一側室はなく、1男1女を設けた。

豊臣政権三中老の一人。生駒騒動（いこまそうどう）は、江戸時代初期に讃岐高松藩生駒家で起こったお家騒動。重臣が争い、生駒家は改易となった。

⑱宇喜多秀家一側室はなく、4男1女ほかを設けた。子供たちは父に従って八丈島に流されている。

⑲長束正家一側室はなく、4男1女を設けた。

（3）側室をもっていたけど、やめた人たちは———

①大村純忠

純忠には4人の側室があり、嫡子の喜前は側室の子だった。

純忠は受洗していたにもかかわらず、これを無視して、側室を持ち続けた。純忠が受洗を決意した裏には、ポルトガルに頼って富や武器を得る下心があったようだ。それは、支配基盤が脆弱で、大村家中でも内紛を起しており、また、たえず周辺大名や土豪からの襲撃に悩まされていたからであった。

しかし、次第にキリスト教への純粋な信仰心を持ち始める。

正室おえんは夫が側室を持っていることが不快であった。彼女ははじめキリスト教に関心を示さなかったが、純忠に遅れること7年、宣教師が説く教理に納得して受洗した。このとき、38歳になっていた純忠は、おえんとキリスト教の秘蹟によって結婚式をやり直した。これはおえんの希望に沿い、妻はおえん一人であって、側室を捨てることを

世間に知らしめる結婚式だったのだ。つまりキリスト教の教理を純忠が受け入れたことを意味していた。

（４）黒田家の人々は――――

①父、職隆



官兵衛の父職隆は妻が３名いた（明石氏、神吉氏、母里氏の三名）。官兵衛と黒田利高、２人の妹は明石正風の娘明石氏が実母（官兵衛が十四歳のときに亡くなっている）。黒田利則の母は神吉氏。黒田直之と一人の妹の母は母里氏の娘。もちろん、これらは播磨国の国人衆との政略結婚であった。

②子、長政

官兵衛の子の長政は、秀吉の死後の政略結婚で正室蜂須賀氏（糸姫）と離縁して、保科家の娘で家康の養女である米姫を正室に迎えた。この米姫との間に、忠之（福岡藩2代藩主）・長興（秋月藩藩祖）・高政・徳（榊原忠次室）・亀子（池田輝興室）の3男2女を儲けた。

この他に分かっているのは、次男・甚四郎(政冬)を産んだ側室・筑紫氏のみで、側室は少なかったと思われる。なお、政冬は早世している。

（５）まとめ

以上のように、側室を持たなかった武将は稀ではなかったが、正室との間にも子供が少ない（あるいはいない）のに側室を持たなかったのは少数派であったことがわかる。子供が一人しかないのに側室を持たなかった官兵衛の行動が大名の一人としては珍しいことだったと、ご理解いただけるであろう。

それでは、本題に戻って、どうして官兵衛がそのような行動をとったのかを見ていこう。

3・官兵衛は側室を持ったかどうか

一方、官兵衛は、永禄10年（1567）頃、官兵衛は父・職隆から家督と小寺家の家老職を継ぎ、姫路城主となった。小寺政職の姪にあたる櫛橋伊定の娘の光（てる）を正室に迎え、姫路城代となった（引用者注 櫛橋家は小寺家の重臣）。このとき、官兵衛22歳、光の方15歳（『黒田如水伝』第2篇第1章）。

官兵衛が側室を置いたという記録は残っていないのだろうか。

『黒田家譜』には、官兵衛が正室しか置かなかったことに真正面から触れる記述がそもそもあるわけない。なぜなら、家譜の性格上、幕府に提出されるものだったし、藩内では藩士たちの教訓として読まれたものだったため、この事実に触れ無用な詮索を産むことを避けたものと思われる（とはいえ、江戸時代の藩士たちが、鎖国の日本にあって、官兵衛がキリシタンだったと思ひ至ることはなかったと思うが）。

『黒田如水伝』には、光の方以外の女性の影がなく、次男の熊之助が生まれた時の記述も、「この年、官兵衛の次男・熊之助が山崎城内で生まれた。母は吉兵衛（引用者注 のちの長政）と同じく櫛橋氏（引用者注 光の方）であった」（『黒田如水伝』第四編第五章）とあり、生母が光の方であったことを明示している点が『黒田家譜』とは異なるものの、これは他に女性がいたから生母を特定する意図の記述ではなく、単に注意書き程度のものとみていいだろう。

ちなみに、その記述の後で、次男熊之助が朝鮮の役、折、玄界灘で遭難死したことについて、官兵衛は今や片手を失ったような形となり、天にも地にも子宝といえるのは、長政だけとなってしまった、と書いている（『黒田如水伝』第八編第三章）。熊之助は自分が留守居として豊前に残っていたのが不本意だったのか、渡海して自分の戦おうとしたのだろう。このとき、伴をした母里太兵衛の息子をはじめとする家臣たちも一緒に遭難している。

この事件は大変ショッキングだっただろうが、2人しかいなかった子供が1人になってしまって大変心もとない状況だと述べられている。また、官兵衛がこれ以上子供を作る術がないことや、それは、官兵衛が側室も持たず、光の方との間にもこれ以上子供を作ることもできなかったことを暗示しているのかも知れない。

そして、他の類書には側室がいたとする記録は見当たらない。ただ、『播磨後風土記』には、赤松氏の後裔西城戸氏の娘を妾にもらったとする記事があるが、これは、光姫との結婚前のことなのかも知れない。官兵衛と光の方が結婚したのは、永禄10年（1567）であり、そこから受洗するまで16年ほどあり、その間に上記のような話があったかも知れない。相当忙しい時期であったから、側室といちゃついている暇はなかったかも知れないが。

この女性は、その後の記録には登場しないので、確たる話ではないから、結局、官兵衛の側室の確たる記録はないということになる。

官兵衛に側室がいなかったとして、なぜそのような行動をとったのだろう。その一つには、キリスト教の教えに一人の妻を愛することが求められることからであった。

4・キリスト教で一夫一妻を主張する理由

キリスト教では生涯一人の夫／妻を愛し続けることを求められる。その根拠は、「十戒」の第七戒「姦淫してはならない」である（出エジプト20・14）。新約聖書にもしばしば、「姦淫」を戒める言葉が出てくる。「結婚はすべての人に尊ばれるべきであり、夫婦の関係は汚してはなりません。神は、淫らな者や姦淫する者を裁かれるのです」（ヘブライ13・4）。「姦淫」とは不倫のこと。「姦淫」を戒めるのは、結婚と神との関係が深くつながっているからである。「十戒」は、前半で神との関係、後半で人間関係の戒めを語っているが、第1戒の「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」は、第七戒の「姦淫してはならない」と対になっている。「妻ただ一人を大切にしろ」というのと、「ただ一人の神に対して誠実に生きなさい」と求めることとは、キリスト教では最も大切な教えなのだという。

人間は、アダムとエバの昔から、しばしば神を裏切って、自分自身の欲望を神としてきた。それが、聖書で言うところの「罪」である。創造主なる神は自身だけに誠実を尽くすことを人に求めているが、人間は不誠実を重ね続けてきた。そのため神はキリストの十字架によって自らの愛に気づかせ、自分のもとに帰ってくるよう人間に呼びかけているというのが聖書のメッセージであるという。

天正11年（1583）頃に洗礼を受けキリシタンとなったあと、キリスト教徒としてその戒律に従い一夫一妻である必要があった。側室をもっていれば、教団関係者から離縁するように言われただろうから、そのような記録もないのは、側室を持っていないと言っても過言ではないかも知れない。官兵衛がこの聖書の真意を理解していれば、側室を持たなかったキリシタン大名たちと同様に、その後側室を持つことはなかっただろう。

秀吉による禁教令以降、棄教したと言われている。もしかしたら、表向きはそうに振舞っていたかも知れないが（そのような教会側の記録はないが）、亡くなるまでキリシタン信仰を持ち続けていたことはすでに述べた。臨終もキリシタンとして死ぬことを望み、死後、教団に寄付をするよう遺言し、博多の教会に葬られることを望んでいる。葬式がキリスト教式であったことが、マツス神父によって詳しく書き残されている。したがって、キリスト教の信仰を保持し続け、生涯一人の妻という戒めを実践したのであろう。

5・秀吉が一夫多妻をやめられなかった逸話

秀吉がイエズス会と蜜月の関係だったことはすでに述べた（上巻Q5・参照）。その時期に秀吉が宣教師たちとの談話の中で次のような逸話が残されている。

天正14年（1586）2月13日に、秀吉自ら信長の一子、ならびに諸将を同伴して、突然大坂の天主堂を訪ねて、宣教師と気軽に談話を交え、「予は、おぬしが教えについて語ったところごとく満足し、キリシタンとなるについて、大勢の妻をもつことを許さぬ戒律以外には困難を感じぬ、もしこの点を緩くすれば、予もまたキリシタンとなるであろう」と秀吉一流の冗談を飛ばし、出された砂糖菓子をむしゃむしゃ食べたという（吉田小五郎『キリシタン大名』）。

秀吉が本当にこんなことを言うほど、キリスト教＝一夫一妻の掟ということは広く知られており、戦国大名たちのネックになっていたことを示した逸話である。

6・細川忠興が「汝、姦淫するなかれ」を許容できなかった逸話



細川ガラシャの夫であった細川忠興は、側室や妾がたくさんいたといわれるのはすでに述べた。忠興はキリスト教に理解を示した時期もあったようだが、キリスト教に入信しなかったのは一夫一妻の掟がネックになっていたからのようである。

「この国の領主、(細川)越中殿(引用者注 忠興)は、日本の宗派の虚偽性と我らの聖なる教えの真実をたいそうよく知っており、そのためそれ(引用者注 キリスト教と関係者の清貧)を讃えることを決して止めないが、しかし、神聖な洗礼を受ける決意をするには至らない。なぜなら、一彼が言うところによれば、一第六戒(注 汝、姦淫するなかれ)を守る気持ちを自らのうちに感じない限りキリシタンになるべきではない、キリシタンでありながらキリシタンとして暮らさないのは恥ずかしいことだからである。」(1605年の日本の諸事(フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集))

ガラシャは明智光秀の娘であった。本能寺の変のあと、光秀と姻戚関係のあった細川家は明智方に与しない決断をし、織田家に恭順の意を示すため、ガラシャは一時幽閉された。一説には、正室の玉子(ガラシャ)がキリスト教に入信したのは、幽閉されている間に、忠興が側室を大勢囲っていたことに悩んだからとも言われている。

忠興にとっても一夫一妻の掟はネックになっていたようだ。

7・夫婦の愛

一方、官兵衛が側室を持たなかった理由をキリシタンだったこと以外に求めるならば、それは、2人の間にあった愛情かも知れない。

有岡城の幽囚によって官兵衛の体は相当のダメージを受けたと言われている。有岡城から救出後、有馬の湯に滞在し、池坊左橘右衛門の家に寄宿して、湯治をした（『黒田家譜』巻之二）。どのような形であれ、拘束されていたのであり、ダメージはあっただろう。城方は織田方が築いた付城戦術のために、食糧調達が困難となり、兵糧が欠乏して、官兵衛に与えられる食事も少なかったかも知れない。あるいは、落城の際の混乱で傷を負ったのかも知れない。そのため、有馬温泉で湯治をして、姫路城に戻ったのである。

長男の長政は織田家の人質になっており、秀吉の居城長浜で順調に育っていた。が、幽閉された官兵衛がいつまで経っても戻らなかったため、官兵衛が敵方に寝返ったと思った信長は長政を殺すことを命じた。しかし、竹中半兵衛の機転により救われている。

一方、その後、2人の間にはもうひとり子供ができた。有岡城の土牢から生還を果たしてから2年後の天正9年（1581）官兵衛36歳のとき、生まれた次男がいたのである。「今年、官兵衛に次男熊之助が生まれた」（『黒田家譜』巻之二）とある。生まれた時期に間違いがなければ、明らかに救出後に設けた子供である。体が恢復してから、しっかりと愛は育んでいたのだろう。天正7年（1579）1月に有岡城落城してから、秀吉に包囲されていた別所長治の三木城も兵糧の支援がなくなり、翌天正8年（1580）1月に落城し、因幡・伯耆に出兵する6月までの1年半の間は遠征がなかったものと思われる。そのあいだ束の間の夫婦の時間が訪れたのだろう。

なお、光の方は長生きで、七十五歳で亡くなった。彼女に関する『黒田家譜』の記事は非常に少ない。亡くなったときの記事は「官兵衛の夫人は、播磨国の志方城主櫛橋豊後守則伊の息女で、天文22年（1553）生まれ、官兵衛より七歳若く、美人であった。16歳で長政を生み、慶長5年の秋（48歳）、大坂より戦乱を逃れて中津に戻り、その後、福岡に移った。52歳のとき、（夫の）官兵衛が逝去した。官兵衛が存命中に出家して尼になった。照福院然譽浩榮と号した。老後に江戸で出て住んでいたが、71歳のとき、（息子の）長政が亡くなった。そのあと、福岡に下り、福岡城の本丸の西に暮らした。享年75歳、円応寺に葬られた」（『黒田家譜』巻之十五）。

8・側室を持たなかったその他の理由

側室を持たなかった理由として他に考えられるのは、

- 俟約のため（すでに述べたように側室を養うのにもそれなりに費用がかかる）
- 病気のために女性と交渉を持つことを避けた
- 側室の扱いに苦勞する父の姿をみた（？）とか、父の継室と自分の関係が良くな（？）、それを息子の長政に味わせたくなかった（？）（家中の混乱に発展するのを避けた）

などである。

挙げておいてなんだが、これらの真偽について本書では追究しない。ただ、官兵衛が病気だったという説があることについては、多少言及しておきたい。それは、官兵衛が梅毒に罹患した可能性があるというものだ。梅毒に罹患した症状の典型が官兵衛に見られることが根拠だ。その症状とは、

- 感染部におできのようなかたまりができ、それがかさぶたのようになる（官兵衛は秀吉から瘡天窓（かさあたま）といわれていたこと（『黒田如水伝』））。
- 肢が不自由になっていること（『黒田如水伝』）。
- 精力の減退により子作りに消極的であったとみられること。
- 生まれた次男が薄弱児であったとみられること。
- 晩年に奇行がみられたこと。

などであるとしている（杉浦守邦『カルテ拝見 武将の死因』）。ただ、私は症状とされているものが本当だったかどうか疑っている。これらは今一つ証拠力が乏しい史料に基づいた話だからだ。詳しくは、今後発刊予定の別巻をご覧頂きたい（ここまで言って理由を言わないのかよ！って怒らせそうだが、紙幅がないのでご勘弁願いたい）。

9・正室、光の方は受洗したのかどうか



ちなみに、光の方はキリスト教を受洗したのだろうか。

キリシタン大名の妻は受洗していることも多い。高山右近、小西行長、大村純忠（日本最初のキリシタン大名）、有馬晴信の妻は受洗していた。一方、蒲生氏郷の妻には記録がなく不明、大友宗麟の妻奈多夫人は受洗していなかった（継室は受洗）。

ちなみに、宗麟の妻・奈多夫人は教会側の記録に「イザベル」の名前でしばしば登場する。イザベルときくと洗礼名のようなのだが、それは洗礼名ではない。キリスト教の敵として振舞った彼女を、聖書での悪役のなかの悪役に重ね合わせた、そう呼んだだけであった（イゼベルとは、イスラエル国王のアハブの妃で異教を崇め、預言者エリヤを追放した女性のことである）。彼女は奈多八幡宮の神官の娘であり、キリシタンには理解を示さず、敵対的な態度を示した。宗麟は彼女と離縁し、侍女だった女性を側室にし、受洗させている。

キリシタン大名の妻もそれぞれであった。立場や信仰、性格によってキリシタンを受け入れた者もそうでない者もいた。

一方、官兵衛の妻・光の方については、受洗の記録が見られないから、受洗していないのだろう。これは、長政にも受洗を強制はしていないのと同じように（フロイス「日本史」11）、妻にも強制しなかったからであろう。

光の方は、黒田家が豊前国に入封した天正15年（1587）に中津城下に円応寺を建てさせ（その当時、官兵衛は中津城下に教会堂を建てさせている）、慶長7年（1602）にはそれを福岡に移している（現 福岡市中央区大名）。あくまで実家の宗旨を守り、仏教徒として過ごしていた。

なお、福岡時代には、もう少しで「キリシタンになりそうであった」との教会側の記録もある（レオン・バジェス『日本切支丹宗門史』）。夫・官兵衛のキリスト教式の葬儀の様子などをみて、心が動かされたのか知れない。官兵衛夫妻の間で信仰する宗教は違っていたものの、それによって諍いがあったという記録も見られなかったので、宗麟と奈多夫人のような葛藤は生じていなかったようだ。

ちなみに、光の方は、三木城の別所長治が寝返ったときに、御着城の小寺家の人質となっていた。御着城は毛利方に与したため、織田方に残る決意をした父の職隆が、御着の黒田屋敷に火を放って光の方を脱出させ、姫路に連れ戻したとされる。彼女は関ヶ原の戦いの前にも、大坂天満の黒田屋敷から脱出しており、生涯に2度の脱出行を経験したことになる。大坂からの脱出のときには、細川ガラシャが人質になることを拒否して家臣に自分を殺害するように命じ（ガラシャがキリシタンとして自殺をできなかったため）、細川屋敷で騒ぎが起きたことで、黒田屋敷の監視の眼が弱まり、脱出できたとも言われている。

ちなみに（第2弾）、光の方の実家・櫛橋家は、別所長治が信長から離反したときに、ともに離反し、居城志方城に籠城して秀吉勢に抵抗。三木城が落城して播磨が平定された際、播磨北部に逃れて帰農し、一部の者は黒田家の家臣として存続（官兵衛の義兄左京亮の子藤九郎と左京亮の兄弟宗雪。同家は江戸時代後期に家老を輩出）。光の方の妹は、黒田家家臣の井上九郎衛門之房に嫁いでいる。

10・まとめ

すでに見てきたように、別にキリシタンでなくても、一人しか妻を置かなかった武将もいた（2・（2）参照）。一人しか妻を置かなかった理由には、人それぞれであったようだ。官兵衛には官兵衛なりの事情があったのである。戦国大名にとって側室がいても何ら問題がない行為であり、批難されるべきものではないが、官兵衛がキリシタンであったし、入信以来棄教していないので、妻は一人だけだったのだろう。もし、一人息子に何かあれば、養子を立てて家の存続を図ることもできた（浅野幸長は弟に家督を譲っている。2・（2）参照）。側室をもってまで自分の子供を作ろうとはせず、キリスト教の一夫一妻の教えを優先したのだろう。

万事に用意周到な官兵衛は、妻1人で跡継ぎが少なければ家系が断絶する恐れがあると考えてるが、同時に足利家、赤松家をはじめ多くの武家で妻、側室を巻き込んで家督相継争いが生じた先例をも学び、跡継ぎが多いだけでは家系は安泰にはならないと考えたに違いない。そんな官兵衛は少ない跡継ぎを立派に育てることに全力を注ぎ、戦いの場などでも機会をとらえて一族、家臣をよく教育した。長政に万一のことがあれば彼らの中から養子を迎えようと考えたのであろう。そこには生涯1人の妻を守った官兵衛の誠実な生き方が見える。

【Q12】 人を殺さないポリシーの真相

官兵衛はできるだけ人を殺さなかったと言われている。その背景には、キリシタンの教えに、人を殺すことなかれ、というものがあり、これをできるだけ守ろうとしたためと言われているが、それは本当か。

官兵衛は永禄5年（1562）、17歳で初陣したと言われており（『黒田家譜』『黒田家臣伝』『黒田如水伝』）、父職隆とともに出陣し、近隣の土豪を討ったと伝えられている。相手方の名前は伝わっていない。その頃から多くの合戦に臨んだ。また、合戦時だけではなく、平常時においても官兵衛は人命を大切にすることが伝わっている。

まず、官兵衛が人を殺さず活かしたことについて、史料にはどのように書かれていたか、列挙してみたい。

1・貝原益軒の『黒田家譜』

貝原益軒の『黒田家譜』には、官兵衛が殺戮を好まず、合戦に勝利する目的を果たしつつ、できるだけ人の命を助けていた、と記されている。

「官兵衛は、はじめ微賤であつたが、幼いときから大志を抱いて、信長公に仕えて忠義を尽くし、信長公が亡くなってからは、豊臣秀吉公を助けて天下を平定し、のちに石田三成の邪謀に与せず、源大君（引用者注 徳川家康）に忠義を尽くし、九州を平定し、世に比類のない手柄を立てた。平生の武略、戦功は限りない。知勇兼備、知力が群を抜いていたため、その功名は世を覆った。武勇は大いに人より優れていたとはいえ、智略を好み、人を殺すことは好まなかった。毎回、和議にて敵を降参させ、戦さを全うしつつ、人の命を助けたことは、数知れず。百戦して百勝するのは、善の善なる者ではない。戦わずして相手を負かすことが、善の善なるものだ」（『黒田家譜』巻之十五 傍線引用者）

ただ、そのやり方が何の影響であったかどうかには触れておらず、むしろ戦わずして勝つのが最善だという、孫子の兵法における最善の道と同様のことを言っている。

2・金子堅太郎の『黒田如水伝』

(1) 紹介されている逸話

次に、金子堅太郎の『黒田如水伝』では、『古郷物語』の次のような逸話を引用している。

- 世の中が乱れて、人を殺すことを常とし、哀れとも思わなかったし、主君が家臣を手打ちにすることが多かったが、如水は手打ちにしたことがなかった、と書かれている。
- 家臣に恨みを買って行方を暗ましたこともないし、追放したことも稀だった。切腹させたものもない。もし、普通であれば殺すべきほどの（ことをしでかした）者も、官兵衛はそれを親類に預け、預ける先がなければ、富裕な老臣に預けて、餓死させないように命じた。罪の軽重によって遅速はあったが、最終的にはまた召し出して、元のように懇ろに使った。
- 怒るときは思いっきり叱って、そのあとすぐに用事などを言いつけた。
- 召使のなかで盗みを働いたものがあつたので、家臣たちは首をはねてくださいといったが、官兵衛は追放せよと言った。その者は盗人に生まれついた者であつた。お前たちは数度の盗みを知りながら、どうして今まで放置していたのかと、かえって（家臣たちを）叱りつけた。
- 柿札や材木の端でも、集めて風呂の燃料用として利用するように命じていたが、柿札は大工が勝手に使つてしまい、その他の端材は下僕が盗んで無くなってしまった。それを奉行が官兵衛に報告し、盗んだ者たちを罰すれば、今後はなくなるだろうといった奉行に対して、官兵衛は、盗んだ木切れにその者たちの衣服を着せても違うことはできないだろう。お前たちは何とも思っていないようだが、人を殺すことを、どれほど大変なことだと思っているのか。急いで彼らを解き放てと申し付けた。

と、これ（らの逸話）は官兵衛の仁愛の心をもっていたことを示す美談としている。

(2) 『古郷物語』って何？

ちなみに、引用元の『古郷物語』（傍点筆者）って何？と思われる方に少し説明しておく、この本は江戸時代前期の作と言われており、作者は不詳。

内容は、黒田職隆から二代藩主忠之の事蹟のうち、特に、官兵衛と長政の事蹟を中心に記されている。設定は、黒田家家臣をやめて諸国を放浪する虚無僧になったものが関東の禅寺にいたり、そこの禅僧となった老人に出会い、故郷播磨の国で起きたことの中で不審な点を老僧に尋ね、老僧が物語するという形式になっている。放浪した家臣は黒田家の忠臣だったことにしている。

この本が作られた背景には何があつたのか？まず、この本がいつごろ書かれたか。

記述の中に、四代忠之のことを、「黒田家四代のうち右衛門佐殿は、泰平の世にお生まれになったので、武辺の覚えがないのも当然だった」と記しており、忠之は、元和9年に家督を継ぎ、寛永年間に島原の役に参加し、承応3年に亡くなっている。そのことからすると、本書は寛永年間よりあと、承応年間から以前の著作だったかも知れない。特に、島原の役に武功のあつた忠之について、武辺の覚えがなかったのも当然だと言っていることから、寛永年間の初期の作だったかも知れない（島原の乱で出兵した黒田藩では、家臣たちが忠之の下知に従わず、重臣の黒田一成に従つたといわれているので、いずれにしても、寛永年間よりあとだった可能性もある）。島原の役は、寛永14年（1637）に勃発、寛永15年（1638）に終結している。また、黒田騒動が寛永9年（1632）に起きている。黒田騒動とは、二代藩主忠之の時代に、家臣の栗山利章（栗山大膳、一番家老栗山利安の子）と対立し、栗山に「黒田氏謀反の疑いあり」と訴えられ（黒田騒動）、黒田氏は改易の危機に立たされたが、幕府が栗山は「精神的に異常である」と裁断したため、改易は免れた事件だ（大膳は盛岡藩に追放され家宝の官兵衛の合子兜を持ち去ってしまう）。

これらの事件があつたことからすると、この本は、家中の引き締めのために黒田家の由緒のふり返る、という作者の意図が感じられてならない。設定が黒田家の「忠臣」である牢人と、禅僧が語り合うところなどは、牢人が栗山大膳で、禅僧が官兵衛かあるいは長政か、あるいは大膳の父利安の身代わりか。もしかしたら、牢人が関東に流れ着くというところからも、盛岡藩に預けられた栗山大膳自身のことをあらわして、主家だった黒田家の将来を心配し、書かれたものなのかも知れない。

くどくどと述べてきたが、著作の意図は、同書の逸話にどの程度の信ぴょう性があるかにかかわってくるからである。同書の情報源が何だったのか、どんな意図で書かれたのかを考えていくと、同書の官兵衛像が作られたものだった可能性も否定できない（『夢幻物語』にしてもそうだ）。なので、眉唾で見た方が無難だろう。これらの話を本当にあつたかのように記載している本が非常に多い点にはご留意いただきたい。

ただ、官兵衛が命を大切に話話をクローズアップして、家臣たちをぞんざいに扱ったといわれる藩主忠之への諫言と捉えれば、根も名もないことは書いても仕方ないだろうから、尾鰭が付いている可能性があっても本当たった可能性があらう。

(3) その他の逸話

また、『古郷物語』以外にも、次のような逸話を引用している。

- 引用する『黒田実記』には、如水が常に長政を戒めていたのは、人を殺すのはとても重いことだ。殺さずに活かすことこそが重要だ、としている。
- 本能寺の変のときに昼夜兼行で知らせに來た飛脚を、秀吉は殺して秘密漏洩を防げと命じたが、官兵衛は

密かにかくまった。

□ 秀吉が怒りのあまり、赤松則房を殺せと命じたが、如水は主命が仁慈の道に背いていたことにより、則房を助けて越後に逃れさせた。

・・・（中略）・・・

官兵衛がこのような心根で合戦に臨んでいたので、一人の敵も、みだりに殺戮したことはなかった。これは、孟子の「人を殺すを嗜まない者」であって、この心があつてこそ、大国の主となる特性を備えていたということができよう（『黒田如水伝』 傍線引用者）、と結んでいる。

（４）孟子の徳治政治

金子堅太郎という孟子の「人を殺すを嗜まない者」というのは、どういう意味なのだろうか。

そもそも孟子は、古代シナの戦国時代の儒学者で、紀元前300年前後に活躍している。儒教では孔子に次いで重要な人物であり、そのため儒教は別名「孔孟の教え」とも呼ばれるほどだ。孟子は、「世を輔^{たす}け民の長たるは 徳^しになし」とか、「力を以て人を服するは、心服にあらず、力、贍^たらざるなり」と言っている。この考え方を徳治主義というところがあり、この考え方において、「人を殺すを嗜まな」く^なるとしてゐる。

それは、人を従わせる要素である力（権力、暴力、財力、法の力など）で民衆に従わせたとしてもそれは形だけ従っているようにみえて、内心は従っていない。単に力に怯え、力になびいているだけであつて、力が弱まれば、裏切られる。そのような力によるのではなく、徳によって人を感化し、心服させることができれば、容易に民衆を統治していくことができるという立場である。

あるとき、梁（魏）の襄王が、孟子に向つて、「天下は、将来、如何成り行くであろうか」と尋ねた。孟子は「一つに統一されましょう」と答えた。続けて、

襄王「何人がこれを統一するであろうか」

孟子「人を殺すことを嗜まない者が、統一しましょう」

襄王「何人が、その味方となるであろうか」

孟子「天下、一人として、味方しない者はありますまい。王は、彼の苗^{ひでり}をご存知ですか。七、八月の頃に、早^{ひでり}がすると、苗は、枯れてしまいます。所へ、天^{ゆうぜん}が油然^なとして雲を作し、沛然^{はいぜん}として雨を降らせると、苗は、勃然^{ぼつぜん}として起き返ります。この際、何人と 雖^{いえど}も、これを遮ることは出来ずまい。今の天下を見ますのに、人の君となつて、人を殺すことを嗜まない者はありませぬ。若し人^つを殺^{ごと}すことを嗜まない者があるならば、天下の民は、首を延ばして、その望むは必定。かくて、民のこれに帰することは水の低きに就くが如くで、沛然たるその勢いは、誰とて防ぐ者はありますまい」

と説いたという話が残っている（傍線引用者）。

「人を殺すことを嗜まない」者が天下を統一する。衷心^{ちゆうしん}の愛で、人を遇し、これに同情し、これに施し、これをゆる^{ゆる}ぬし、これを信ずれば、人は必ず心服するから、天下の民を心服させることさえ出来る。ましてや、我々の身の回りで、父が子を心服させ、兄が弟を、夫が妻を、朋友を、主人が奉公人を、上司が部下を、親戚を、隣人を、村民を、同輩を、心服させるくらいは、難しいことではない、ということになろう。

この「徳」によって、人を動かすという方法を官兵衛が意識的か無意識的かとしていたんだと、金子堅太郎は述べている。

（３）まとめ

上記のように、『黒田如水伝』では、官兵衛が殺戮を好まなかつたのは、仁愛の心を持ち、仁慈の道に従い、孟子の「人を殺すを嗜まない者」として徳の力によって人を動かそうとしていたからだとしており、キリシタンだったからとは言っていない。

3・福本日南氏『黒田如水』

この本には、「官兵衛は合戦において戦局を制することに務め、少しも殺戮を好まなかった。これは、その天性の度量に加えて、太閤の戦術に私淑したこともあったけれども、一つには博愛の教義を理解して、犠牲ができるだけ少ないように配慮したことによるのだろう。官兵衛の意識の中に人道（主義のようなもの）があった。これはすばらしいことであつた」（『黒田如水』七 傍線引用者）とあり、秀吉も力攻めを避けることが少なくなく、このやり方を踏襲したというよりも、むしろ、博愛・人道主義のようなものがあつたと指摘している。博愛・人道主義のようなものはキリスト教特有のものではないが、「教義」と書かれていて、キリスト教の隣人愛を思わせる表現となっている。福本氏は官兵衛がキリシタンであつたことを意識して本書を書いたのであろう。

4・単に個人の性格か、孫子の兵法などによるものか

歴史家たちは殺戮をしなかった官兵衛を褒めているが、極力人を殺さないようにしていたのはキリスト教の教えの実践であつたのか、あるいは、単に個人の性格か、あるいは、孫子の兵法（戦わずして勝つのが最善）、孟子の教えなど、どれによるものだったのだろうか。私は、全部あつたことだと考えている。性格的に殺戮を好まない性格で、孫子や孟子を学んでいたので、キリスト教の隣人愛の教えにも共感できたのではないかということだ。

（1）他の戦国大名たちはどうだったか。

①織田信長

比叡山を焼き討ちで2〜4千人を惨殺したり、毛利方に寝返って有岡城に籠城した摂津の荒木村重の妻をはじめとする一族郎党が斬首した。抵抗が激しかった伊勢長島の一揆鎮圧で2万人余を殺戮している。

②武田信玄

信州志賀城攻めにおいて、城兵300余りが戦死し、生け捕りになった者は奴隷労働者とされ、黒川金山などへ人身売買された（晴信が佐久郡を完全に制圧するため、天文16年（1546）、志賀城を攻めた）。信虎以上に重税だったという話もあり、一般的なイメージとだいぶ違っている。

③豊臣秀吉

若い頃と壮年の頃までは無意味な殺戮をあまり好まなかったようである。信長の命を受けて比叡山を焼き討ちしたときも彼の軍勢だけが密かに小坊主や女たちを見逃していたという。晩年の秀吉は若い頃と同一人物かと思われるほど冷酷な面を出したが、小谷城時代は「人情味」のある武将として良民たちに慕われたくらいだ。

しかし、播磨国上月城を攻めたときには、城方への見せしめのためになのか、罪もない百姓を串刺しにして殺したり、兵糧攻めにした鳥取城では、その前に百姓を手当たり次第に斬り殺して城に逃げ込むように仕向けた。関白になってからは落首に激怒して多数の民衆を虐殺したりしている。

また、利休の弟子の山上宗二を捕らえ、尋問の後、生きながら、耳をそぎ、鼻をそぎ、なぶり殺しにしている。利休の母と娘は、真つ暗な部屋に押し込められ、蛇責めの刑にあつた。母親は一瞬にして絶命してしまったという。

④豊臣秀長

権力を握ってからの秀吉との対比で、クリーンなイメージの秀長だが、豪族の肅清、鳥取城の干殺しなどの実行などをしていっ。

⑤松永久秀



古くは近世初頭の著述家小瀬甫庵が自身の著作『太閤記』で、斎藤道三や宇喜多直家に並ぶ悪人としており、年貢^{みのむし}未進などの百姓を処罰するにあたっては、蓑を着せ、火を放ち、もがき苦しんで死ぬ様を「蓑虫踊り」と称して、楽しんで見物したとも伝えられる。彼の死を領内の民は、農具を売って酒にかえ、大いに祝ったとも口伝えられている（領国の奈良の寺社勢力との対立から、それらの者が書いた記録には誇張もあろう）。

⑥上杉謙信

義に厚いとされる上杉謙信だが、彼は人身売買を許可したというものも残っている。遠征先の関東での略奪行為、大規模な人身売買、家臣の謀殺などをしていっ。

⑦宇喜多直家



天文3年（1534）祖父・能家が島村盛実らによって暗殺されたとき、わずか6歳だった直家は父・興家と共に放浪の人生を送ったという。成人すると天神山城主・浦上宗景に仕え、浦上家臣団の中で頭角を現す。直家は策謀に長けて^{しゅうと}おり、祖父の復讐を果たすために島村盛実を暗殺したのははじめ、舅である中山信正や龍口城主・厩所元常を殺害し、浦上氏の勢力拡大に中心的な役割を果たした。

古くは近世初頭の著述家小瀬甫庵が自身の著作『太閤記』で、斎藤道三や松永久秀に並ぶ悪人としており、また出

雲の厄子経久・安芸の毛利元就と共に中国地方の三大謀将と言われる。歴史書の「和氣綱」でも記されているとおり、金光宗高をはじめ松田元賢、後藤勝基など手に余る者には、自分の娘や姉妹、或いは親類の娘を養女として、縁組を成立させて親類の体を表し、時節を見はからった上で毒殺したり、闇討ちして寝首をかく（暗殺・謀殺）行いが多くと伝えられる。また、それらの所業から、身内にさえ恐れられていたといわれる。

しかし、家臣を大切にしており、乙子城主だった時代には家臣と共に耕作に励み、時には節食して兵糧を蓄えたという逸話が残っている。また姻戚を手を掛けることはあっても家臣を肅清した事は無く、乙子城で辛苦を共にした弟の忠家や宇喜多三老に代表される譜代の家臣たちは終生直家を支え続けた。

⑧前田利家

人徳の大名として名を馳せた前田利家は、越前一向一揆勢を釜煎りにした。武生市小丸山城跡から昭和初期に発見された文字瓦に、「五月廿日一揆起り、前田又左衛門殿一揆千人ばかり生け捕りにし、ご成敗は磔、釜いりにした。この旨一筆書きとめておく」との内容を当時の文章で彫ってある。

⑨伊達政宗

陸奥国安達郡小浜城主大内定綱を降伏させるために、彼の領地の民、さらには虫や動物を皆殺しにし、恐怖に陥れたという。この行為に恐怖した大内定綱は降伏（誇張もあろう）。

⑩島津家久ら

耳川の戦いで大友家に勝利した島津氏は、捕虜や非戦闘員たちになんて非道な行いをしている。捕虜のキリシタンたちに残虐非道な行為を行った他、薩摩や肥後に連行して二束三文で売却している（奴隸として）（フロイス『日本史』）。

⑪長曾我部元親

久武親直に命じて親族・功臣を多数肅清したという。

⑫毛利秀包

高良山座主丹波麟主を謀殺している。九州征伐後の天正15年(1587)に久留米城へ入部した毛利秀包と対立した麟主は、後に和睦と称しておびき出された上、謀殺されている。高良山は周辺の草野氏や黒木氏に匹敵する領地を持ち、勢力があった。

⑬里見義堯

房総半島に本拠がある里見氏は北条氏と対立し、三浦半島を襲い繰り返し略奪している。

⑭蠣崎氏（松前氏）

松前半島を根拠地とする蠣崎氏は、アイヌの首長を和睦の席で度々謀殺している。

⑮大坂冬の陣

大坂冬の陣では、徳川方が豊臣方と何の関係もない無防備な大坂の町人をニセ首のために首をはねて殺したり、レイプしたり、子供をさらったり、町人の持ち物を盗んだり、相当酷かったらしい。徳川方の城の包囲もかなり素早かったので何も知らされてなかった町人が多くいたので急いで逃げようとして川に落ちて溺れ死んだ人も大量にいたといわれる。誰がこんなことをやったか、よくわからない。この話は全く出てこないが、戦国時代の合戦では大なり小なり起きていたことであった。

このように、現代日本人の基準では“残虐”行為は日常茶飯事であって、“残虐”ではない戦国武将は少数派と言われている。

一方、官兵衛はそのような手を殆ど使っていないといわれている。

確かに、城攻めであれば力攻めをするよりも、相手方を調略で開城させたり、相手を逃がして衝突を避ける方が、味方の損害も少ないし、城攻めに時間もかからない。また、一方で、官兵衛と戦うのは不利とみた相手方は戦わずして降伏したり、逃亡したりすることになる。官兵衛は、信長のように抵抗するものに容赦しなかったというよりも、秀吉のように戦わずして勝てる相手とは戦わない傾向があった。また、敵方も官兵衛に内通すれば、約束通り助命してくれるという信頼感からか、敵への調略もしやすくなるという好循環が生まれている。

もしかしたら、実は殺戮をしていない記録のみが残り、殺戮をした（というより通常の攻撃をした）記録が残されていないだけなのだろうか（これまた長政の“官兵衛神格化”の改ざんか？）。

しかし、残された記録上は、家臣がよからぬことをした場合、手打ちが必要な罪を犯させないようにするのが重要だと考えていたようであり、官兵衛は人を死罪にしたことは一度もなく、戦国武将としては珍しいことだった。一方、長政は2度も上意討ちをしている。

5・官兵衛が殺人に積極的に関与した話

しかし一方で、以下のような逸話がある。

(1) 盗賊の討伐 @播磨

官兵衛が家老になった頃、澤蔵坊という盗賊が播磨を荒らしまわっていて、小寺領に侵入して略奪したので、手勢を率いて討伐し、頭目の澤蔵坊を惨殺して、賊徒数十人を誅殺した(『黒田如水伝』)。やられたらやり返す倍返しだ!というわけではないだろうが、情状酌量の余地がない者は戦国の世の習いで、殺すほかなかったのだろう。

(2) 松田新六郎の殺害 @播磨

永禄11年(1568)、織田信長が上洛し諸大名に上洛命令を発した。小寺家では織田につくべき意見が割れた。親織田の急先鋒である山脇六郎左衛門の殺害を小寺政職が指示し、官兵衛が実行した(『黒田如水伝』)。

ただ、この殺害は、「官兵衛はただ一度主命によって人を殺したことがあった。ただしそのときも命令を聴き誤ったように装って、不忠不義の松田新六郎を殺したただけだった」とされている(『黒田如水伝』)。上意討ちも最小限に抑え、無駄な血を流さないようにしたのだろう。

(3) 城井鎮房の殺害 @豊前中津

九州平定の軍功により豊前国に入封した黒田家に対して、領内で国人一揆が起き、とくに、城井谷の宇都宮鎮房は天険に拠って頑強に抵抗した。領内の反乱を鎮圧して、鎮房を追い詰め、和睦をすることとなったとき、この鎮房殺害が中津において実行された。実行したのは長政であって、官兵衛自身はその場にはいなかったようだ。これをもって長政の独断とする説もある。また、官兵衛はあくまで融和政策をとったが、秀吉の命令によって官兵衛がやむなく成敗を指示していたともいわれ、あるいは、当主の長政が直接秀吉の指示に従ったとも考えられ、よくわからない。

(4) 宇留津城攻城戦 @豊前

これに遡ること、天正14年(1586)10月、官兵衛は九州平定戦をたたかっていた。九州に渡海し、高橋氏の豊前小倉城を攻め、城兵を香春岳城へ追い出した。苅田松山城、宇留津城を討ち、籠城兵千余人を討ち、残る男女370余人をかつての播磨国上月城攻めの如く、処刑し磔にした(『川角太閤記』)。

このことは、ルイス・フロイスの記録にもあり、「官兵衛殿が小倉城から海辺にある敵の城(引用者注 宇留津城)に向かった。敵方は籠城し、城内には、兵士1千人のほか周辺の避難民がいた。城への侵入は困難で堀が深く、味方は5百人が討たれ千人が負傷したが、官兵衛はひるむことなく攻撃して城内に侵入し、一人残らず3千5百人を超える敵兵を殺戮した」と記録されている(フロイス『日本史』11)。

これは、官兵衛自身の直接の指示かどうかは書かれていないが、毛利勢の軍監としての立場上、命令を事前に知っていたものと思われる。

なお、『黒田家譜』には、宇留津城を攻めあぐねたことは書かれておらず、すぐに落城したと書かれて、千人余りの首を打ち取ったことがあっさりと書かれているのみである。

できるだけ、調略で勧降して戦わずして開城させることは、播磨時代からずっとやってきたことであったが、それでも降伏しない場合には、みせしめに力攻めにしたのかも知れない。これは、戦国の世の常で、激しい抵抗をみせた城を許しては、犠牲になった味方に示しがつかないし、次からの戦いで抵抗を思いとどまらせるためには必要悪であったと考えられる。

6・まとめ

以上のように、官兵衛はどちらかというと殺人を避けようとしており、相手方を無理やり殺すようなことは記録にはないし、仮に殺す場合であっても“正当な”理由があったように見受けられる（殺すこと自体の是非を戦国時代に論じても詮無いことだろう）。

また、権力を握った人間は往々にして独裁者と化して、権力を誇示するために、殺戮をする場合があるが、官兵衛にはそういうところが見られなかった。

祖父や父の教育によってなのか、生まれ持った性格なのか、あるいは、共鳴したキリスト教の教えからなのか。私は、それら全部であったらと思う。家臣領民に支持されなくてはダメだと本気で考え、弱いものを慈しみ、平和な世の中を作って、諸宗教への理解を示した官兵衛であれば、殺戮という暴力的手段に訴えていくことは考えにくい。祖父重隆の商人“的”な感覚、父職隆の領民への施し、キリスト教の教えにある隣人を愛せ、汝殺すなかれという教え。これらが渾然一体となって、官兵衛を形作っていたのであろう。

【Q 1 3】 キリスト教以外の宗教に対する態度

クリシタンの中には他の宗教を異教徒として排斥する傾向もあった。

官兵衛はクリシタンであったが、他の宗教に対してどのような態度をとったか。

1・日本各地で宗教対立が起きていた

永禄12年(1569)信長は、宣教師フロイスに京都居住と布教を許す朱印状を与えた。日蓮宗徒は、キリスト教に対する激しい敵意を剥き出しにして、宣教師排斥を求めた。また、正親町天皇は、2度目の宣教師追放の論旨を出した(一度目は永禄8年(1565))。しかし、義輝はこれを無視した)。5月、織田信長は、キリスト教の教義について修道士ロレンソ了斎と日乗上人に真贋論戦を命じた。日乗上人は敗北し、逆上してロレンソを殺そうとしたが取り押さえられ、追放された。

この頃、日本各地で宗教対立が起きていた。

仏教勢力はキリスト教を邪教と決め付け、各地で教会や教団施設、信者の家を焼き討ちにした。熱心で戦闘的なキリシタンは、神社仏閣を破壊した。キリシタン大名達は、宣教師に護衛兵をつけたが、それは仏教勢力を逆上させた。キリシタン大名の領地でないところでは、一般信者が武装して宣教師を守ったが、同じ村の仏教徒は武器を持って敵対する村人に困惑した。キリスト教徒が居る村は、分裂し、いがみ合った。多数を占める仏教徒は、絶対神への信仰から村の調和を乱して反省しないキリスト教徒を村八分とした。少数派のキリスト教徒は、絶対神への信仰の試練として、村のしきたりを無視して団結した。宣教師は、そうした逆境の中にいる敬虔な信者を巡り、“日本人的な人情に”流される事なく、伝統的な“村の掟”に妥協せず、絶対神への信仰を貫くように説き、いざという時には命を捨てて「殉教」を強調してまわった。

キリシタン大名たちの中には、宣教師の扇動、自身の信仰などの理由から、神社仏閣を破壊したりしたり、教団や信者たちを迫害するなどした。

大村純忠は、領内の寺社や仏像といった偶像を大規模に破壊した(『大村郷村記』、ルイス・フロイスの報告書(1563年11月14日))。高山右近や小西行長などにもそのような記録がある(小西行長については異説あり。天の巻(下巻)参照)。

大友宗麟(義鎮)は、キリシタンとなったのは従来の仏教を見限りキリスト教に帰依した。キリシタンになったことが大友家臣団の離反を招き、晩年に国人の反乱多発という形で表面化する事となる。また、宗麟はキリスト教信仰の為に、神社仏閣を徹底的に破壊する(「住吉大明神破却」「彦山焼き討ち」「万寿寺炎上」など)、金曜日・土曜日には断食をする、それまで家に伝わっていたるまをも破壊する等の破壊行為も行なっているこれは当然に宗教心が発した行動であり、仏僧の奢侈を嫌い、寺社領を取り上げる政治的意図があったにせよ、単に寺社を破壊するだけでなく仏像や経典の類まで徹底して破壊されている。しかし、義鎮が積極的に神社仏閣の破壊を命じたのは主に日向であり、豊後等での神社仏閣の破壊や寺社料召し上げは義統によるものである。

このような情勢の中で、信長、秀吉、家康の宗教政策はどうだったかを見ていこう。

2・信長・秀吉・家康の宗教政策

(1) 信長

まず、信長の宗教政策を見ていこう。

①対仏教勢力

信長は、服属しない仏教勢力に容赦なく攻撃を加えている。これは、親交していたイエズス会の宣教師から頼まれたとか、信長自身がキリシタンとして仏教勢力を排斥した、というわけではない。信長自身は、特定の宗教に肩入れすることはなかった。天下人を頂点とする中央集権思想に真っ向から対立する勢力を倒し、強力な中央集権国家を樹立する(天下布武)ために、政治に介入してくる宗教に対して徹底して戦ったのである。主な戦いをみてみよう。

・石山本願寺(浄土真宗)

元亀元年(1570)、浄土真宗(一向宗)の石山本願寺(大坂)は、イエズス会宣教師を保護する織田信長の支配を拒否して、全国の門徒に信長と戦う様に呼びかけていた。越前国では守護大名を追い出して一揆勢が国を約100年間支配した。一向専念無量寿仏(注1)の信条から、信長の戦いを聖戦として鼓舞した。「仏敵と戦うは弥陀(阿弥陀仏)の御意志! 弥陀の為に死ねば極楽往生!」と決死の戦いを挑む一向宗徒たちとの戦いは難航した。包囲したものの、瀬戸内海の制海権は毛利勢が掌握しており、毛利勢や紀州の根来・雑賀衆などが海から石山本願寺に兵糧の運び入れたことで、長期戦となってしまった。

・比叡山延暦寺(天台宗)

延暦寺は京都に近く、朝廷との結びつきが強く、朝廷や幕府への強訴を繰り返して政治に介入していた。元亀2年(1571)、強大な軍事と経済を背景として、俗的政治圧力集団となっていた延暦寺を焼き討ちし、比叡山にいた僧侶や僧兵や庶民など1,500~4,000人を殺害したといわれる(延暦寺自体の焼き討ちには異説あり)。信長が問題にしたのは、宿敵の朝倉と浅井勢を匿い、政治に介入したことであった。

・伊勢長島の一向一揆(浄土真宗)

天正2年(1574)信長は、伊勢長島の一向一揆を滅ぼし、武器を持って抵抗をやめない門徒数万人を虐殺した。宗教権威による政治・まつりごとへの干渉を完全排除しようとした。

フロイスの日本史には、「比叡山、奈良の大仏、天王寺、住吉、播磨の書写山」(『日本史』4)が攻撃対象として記録されているが、この他に、根来寺(紀伊国)なども攻撃対象となっている。攻撃の意図はみなほぼ同様で、信長の支配を拒絶した勢力を滅ぼし、宗教権威を政治から排除することにあった。

②対キリシタン

宣教師がもたらす西洋の文物・知識・兵器などに関心を示し、布教の許可を与えた。

③自身の神格化

信長は反宗教無神論ではなく、宗教が政治を左右するという中世の仕組みを破壊しようとしたただけであった。敵対する一部の寺社を攻撃したが、信仰のみで政治に介入しない神社仏閣を保護した。一方、晩年に築城した安土山城の重要な一角に惣見寺を建立した。当初は、安土城内に建立された。信長を本尊とする寺院であり、信長が「万人から礼拝される」ための寺院だったのである。これにより、民衆の内面の支配までも目指した。キリスト教布教を許可していたときは裏腹に、惣見寺の建立に関して、フロイスは痛烈に批判している。惣見寺は、滋賀県近江八幡市安土町下豊浦の安土城跡にある臨済宗妙心寺派の寺院として現存している。

(2) 秀吉

次に、秀吉の宗教政策はどうだったのか。

①対仏教勢力

仏教勢力に対しては、高野山(真言宗)を降伏させたり、根来寺を焼き討ちするなど、信長時代に引き続き武力によって統制した。一方で大仏を建立したり本願寺を再建したりもしているが、その後の顕如への態度など、仏教への好意や敬意は伺えない。ルイス・フロイスは伴天連追放令後の状況にあつて「(秀吉は)偶像を以前にも増して悪しざまに扱い、仏僧たちを我ら以上に虐待している」と書いている。

②対キリシタン

キリシタンに対しては、当初は好意的であった。しかし、天正15年(1587)に伴天連追放令(バテレン追放令)を出した(天の巻(上巻)参照)。ただ、このときの布告は強制的な禁教を伴うものではなく、宣教師たちも依然として日本国内で布教活動を継続することが可能であった。秀吉が決定的に態度を硬化させるのは、慶長元年(1596)に起きたサン＝フェリペ号事件からのことである。幕末以降の歴史書・研究史においては、秀吉は、宣教師の行いを通じて、スペインやポルトガルの日本征服の意図を察知していたことが強調されている。

イエズス会宣教師による日本征服計画があったのは確実である。アレックスandro・ヴァリニャーノは、1582年12月14日付のフィリピン総督宛の書簡において、明征服のためには日本でキリスト教徒を増やし、彼らを兵として用いることを進言している。また、ベドロ・デ・ラ・クルスは、1599年2月25日付のイエズス会総会長宛ての書簡で、日本

は海軍力が弱く、スペイン海軍をもつてすれば九州または四国を征服できると進言している。当時の西洋の強国にとって、武力で手に入れた港を拠点とし、そしてさらなる征服を進めるのが常套手段であり、ポルトガルは、ゴア、マラッカ、マカオをこの方法で征服している（高橋裕史『イエズス会の世界戦略』）。しかし、スペインやポルトガル本国が宣教師たちの提案に賛同したかどうかは不明である。

③自身の神格化

信長と同様、秀吉もまた自らを神として祀らせようとした。信長は記録上それを行ったとされる時期のすぐ後に死亡してしまったため、詳しいことはあまり分かっていないが、秀吉は信長よりも具体的な記録が残っている。

秀吉は死に際して、方広寺の大仏の鎮守として新たな八幡として自らを祀るよう遺言した（『完訳フロイス日本史 豊臣秀吉篇Ⅱ』付録）。しかし秀吉の死後、八幡として祀られるという希望はかなえられず、「豊国大明神」という神号で祀られ、豊国社も別に神宮寺を置くこととなった。

（３）家康

最後に、家康の宗教政策はどうだったのか。

①対仏教勢力

・一向宗（浄土真宗）

戦国時代最大の武装宗教勢力であった一向宗の勢力を弱めるために、東西本願寺の対立を助長させたと言われている。

ちなみに、三河一向一揆が起こった際、敵方の一向宗側には本多正信や夏目吉信など、家康の家来だった者もいた。だが家康は彼らを怨まず、逆に再び召抱えている。彼らは家康に恩を感じ、本多正信は家康の晩年までブレーンとして活躍し、夏目吉信は三方ヶ原の戦いで家康の身代わりになって戦死した。

・日蓮宗

また、町衆に対し強い影響力を有する日蓮宗に対しても、秀吉が命じた方広寺大仏殿の千僧供養時に他宗の布施を受ける事を容認した受布施派に対して、禁じた宗義に従った不受不施派を、家康は公儀に従わぬ者として、日蓮宗が他宗への攻撃色が強い事も合わせて、危険視した。そのため、のちの家康の出仕命令に従わぬ不受不施派の日奥を対馬国に配流したり、他宗への攻撃が激しい日経らを耳・鼻削ぎの上で追放した。家康死後も不受不施派は江戸幕府の布施供養を受けぬ事を理由として、江戸時代を通じて弾圧され続けた。

・それ以外

これら新興の宗教以外の古い天台宗・真言宗・法相宗にも独占した門跡を通じ朝廷との深い繋がりを懸念し、新たに浄土宗の知恩院を門跡に加え、更に天台宗・真言宗の頂点として輪王寺に門跡を設けて天台座主の座を独占した。これら知恩院・輪王寺は江戸幕府と強い繋がりを持った。

②対キリスト教

一方でキリスト教に対しては秀吉の死後、南蛮貿易による収益などの観点から当初は容認していたが、慶長18年（1613）にバテレン追放令を公布した。

③自身の神格化

日光東照宮に東照大権現として神格化されているが、これは死後のことであった。

④寺請制度

家康の死後ではあるが、幕府は寺請制度等により、宗教を完全に公儀の下に置くことに成功している。

3・一方、官兵衛の宗教政策は―――

官兵衛は、特定の宗教を排撃したりしていないし、自身を神格化してなどいない。

官兵衛自身はキリシタンであるが、仏教の禅の世界にも深い理解を示しており、キリスト教以外の宗教にも一定の配慮を見せており、そのようなことを示す記録が散見される。

たとえば、『黒田家譜』に記録されているものを挙げると、

・英彦山との関係（北部九州の修験道の聖地）

ひこさん

英彦山は、福岡県田川郡添田町と大分県中津市山国町とにまたがる標高1,200mの山である。修験道の道場で、経済力を持ち、武力もあった。羽黒山（山形県）・熊野大峰山（奈良県）とともに「日本三大修験山」に数えられ、山伏の修験道場として古くから武芸の鍛錬に力を入れ、最盛期には数千名の僧兵を擁し、大名に匹敵する兵力を保持していたという。

天正9年（1581）、英彦山は秋月種実と軍事同盟を結んだため、敵対する大友義統の軍勢による焼き討ちを受け、1ヶ月あまり続いた戦闘によって多くの坊舎が焼け落ち、多数の死者を出して大きく勢力を失った。

「官兵衛と同時期に豊前国に入封した毛利勝信は次男を座主に据えて支配を及ぼそうと企図したが、英彦山では代々公家を座主に迎えており、対立が深まった。そこで、官兵衛と長政が仲裁した。また、天正9年に大友家が英彦山を焼き討ちにしたとき、御本尊も焼けてしまったのを、官兵衛は筑前国甘木の鋳物師に三体鑄造させて英彦山に贈った。また、知行三百石を寄付した」（『黒田家譜』巻之十五 官兵衛遺事）とあり、英彦山を援助している。

・太宰府天満宮との関係

太宰府天満宮といえば、菅原道真公が左遷され同地で亡くなったあとに、道真公を祀るために建てられた社殿だ。戦火で被害を受けていた太宰府天満宮の再建を命じ、千石を寄進している。官兵衛が九州平定戦に downward する前、天正14年（1586）の島津侵攻により、戦火で焼けてしまった。その後、筑前国に入封した小早川隆景が神殿のみを再興していたが、官兵衛は楼門、廻廊、末社や橋なども整備した。さらに社領千石を寄進した。天満宮は官兵衛を中興の祖として感謝した。

そのため毎年正月、5月、9月の月忌20日には、官兵衛が太宰府にいたときと同様、連歌会が催され、明治に至るまで続いたという。

「官兵衛は大宰府の天満宮が戦火で焼け落ちてしまっていたのを残念に思い、天満宮を再建し、千石を寄付した。その恩を感じた神主たちが官兵衛のため連歌会に毎回参集していた。むかし、官兵衛の父の職隆は長谷寺に続く参道にアーケードを気付けて、参詣者が雨に濡れないようにした」（『黒田家譜』巻之十五）。

天満宮の境内には、草庵を構えていた官兵衛が使用したといわれる井戸が、今も残されている。

なお、天満宮つながりで、福岡市の中心部に水鏡天満宮という社殿がある。太宰府天満宮と同じく菅原道真公が祀られている。この天満宮については、官兵衛とは関係なく、むしろ、長政にゆかりが深かった。江戸時代初期の慶長17年（1612）、長政によって「水鏡天満宮」として福岡城の鬼門にあたる現在の地に移転された。ちなみに、「天神」とは菅原道真公（天神様）のことをさし、福岡市中央区の「天神」の地名は、この天満宮の移転に由来する。

・崇福禅寺の再建

同寺は太宰府天満宮と同様、戦火で焼失してしまった。官兵衛が太宰府にあった崇福寺を、現在の場所に再建（落成は官兵衛の死後）をしたことになっている（『黒田如水伝』第11篇第4章）。あくまで発案は官兵衛であったという立場をとっている。このあたりは、史料には単に長政が再建したとするものもあり、はっきりしない。

これらのエピソードは、官兵衛がキリスト教（カトリック）以外の宗教に対して、寛容であったことを示している。ただ、この「寛容さ」が何を意味するのか。2つの解釈が成り立つ。

□ これらの事実は官兵衛がキリシタンに傾倒していない証左であって、官兵衛はキリシタンに熱心ではなかったとする考え方。

□ 単に（キリシタンにとっての）異教徒に対する慈悲を見せて、領内統治の混乱を避けただけであって、官兵衛自身のキリシタン信仰は不動であり続けたとする考え方だ。

さて、どちらが真相なのか？結論から言うと、私は後者が正しかったのではないかとと思っている。

前者の根拠は、キリスト教の信仰が深まるということは、すなわち、キリスト教以外の宗教は極力排撃し、異教徒はキリスト教に入信させなくてはならない、官兵衛がそういう行動をとっていないということ。ということは、官兵衛の内心に深いキリスト教信仰がなかったからだとことになる。一神教であるキリスト教と“多神教”である仏教や神道は相容れない。ということで、十字軍、ヨーロッパでの宗教戦争などは、自分が信じる宗教・宗派が正しく、他はまったく誤りであり、それらを力で排撃しようとした行動そのものであった。キリスト教を固く信じるというのはそういうことだというのは、歴史が示すところだ。他の宗教（仏教や神道）に寛容だった官兵衛の行動から、さほどキリシタンに熱心ではなかったとも思える。

ただ、個人の信仰の形は人それぞれであって、内心のことを他人が知ることは難しいこともあろう。

やおろず

また、日本人の宗教観からも、官兵衛が他の宗教を排撃しなかったというだけでは何とも言えない。八百 神を信じ、また、神仏習合、本地垂迹など、あらゆるものに神性が宿り、仏様も日本古来の神々と融合させる発想がある日本人にとって、デウスの神が唯一絶対で、それ以外はダメ、偶像崇拜もダメなんていうことは、感覚的に受け入れ難いことだったのでないだろうか。仮に、官兵衛がデウス以外には信じていない、それ以外はダメなのに・・・と内心で思っている、それを発露するかどうかについては慎重だったのではないだろうか。世間ではいろいろな宗教を信じている人がいて、キリスト教を強制すれば反発を受けるのは必至であったからだ。

同じ仏教でさえ、宗派間の対立で、合戦に及ぶ例も見られた。一向宗（正確には浄土真宗）は、阿弥陀仏以外の仏、菩薩、諸神を捨てよと叫んで一揆を組み戦闘行為に及んだし、天文元年（1532）7月、蜂起した法華一揆が、細川晴元は直ちに法華一揆衆と手を結び、山科本願寺を焼き打ちして灰塵に帰した。

また、大友宗麟・義統父子などは、キリスト教以外の宗教勢力を排撃して領内に混乱をまねき、衰退するに至った。宗麟は一時九州に覇をと考えたが、日向を攻める際に、悪路に神仏の像を埋めて進撃したことが、仏教徒の家臣や領民の反感を買い、士気が上がらず耳川での大敗の一因となったとも言われる。

このような事例をつぶさに見ていた官兵衛にとっては、キリスト教以外の在来の宗教にも配慮を示して、できるだけ宗教対立を避けなければならない。キリスト教は理解を示す者たちに徐々に浸透させればよい、と思っていたのではないだろうか。

その証拠に、光の方は最期までキリシタンにならなかった（受洗させた記録がない）。あくまで自由意思に任せ、強制はしていない（フロイス『日本史』11）。家族でさえ強制しないのに、家臣や領民に強制するはずがない。光の方は、1587年に中津城下に円応寺を建て、1602年にはそれを福岡に移したと言われていて、あくまで仏教徒として人生を過ごした。レオン・パジェス「日本切支丹宗門史」の1603年の章には、長政は將軍を恐れ、キリスト教を棄てた、しかし、長政の母はキリシタンになりそうであった、とあり（『日本切支丹宗門史』）、キリシタンにはなっていないことがわかる。

ちなみに、他のキリシタン大名の妻が洗礼を受けていたかという、高山右近・小西行長・大村純忠・有馬晴信は受けており、蒲生氏郷は記録がなく不明、大友宗麟は受けていなかった（再婚相手は受けていた）。キリシタン大名の妻もそれぞれだ。

また、長政もキリシタンになっているが、官兵衛は長政本人が教えを理解して受洗したいと言い出すまで、強制をしていない。家族にさえ強制しておらず、妻も信じる仏教を尊重しているのに、家臣や領民たちに強制をするだろうか。

ということで、キリスト教以外の宗教政策が穏健だったことを根拠として官兵衛が熱心なキリシタンではなかったという説は正しいと言い切れないのである。

しかし、熱心ではなかったばかりか、キリシタン自体を棄ててしまったとする珍説(!?)も登場する。「官兵衛は熱心な耶蘇教徒で、その普及に多大な貢献をしているが、秀吉のキリシタン禁令後は改宗して、禅宗に帰依していたという記録が残されている。」というように。

幕府に配慮した黒田長政による情報操作や証拠隠滅により、官兵衛らがキリシタンであったことを隠されていたので、後世、官兵衛が禅宗に帰依したということを感じる人も出てきたのだろう。

しかし、すでに他で見てきたように、イエズス会の宣教師をはじめとする海外の記録をみれば、それが全くの間違ひであることは明白だ。

官兵衛の臨終の様子（僧侶ではなく神父を呼ぶように求めたことなど）、遺言（教会の建築、多額の寄進）や葬儀（キリスト教式）、埋葬（博多の教会内）を見れば、官兵衛がどれほど熱心なキリシタンだったか、理解できよう。死に望んで、キリスト教を信じてもいないのに、そんな行動をとるはずがない。阿弥陀仏の仏像と自分の手を結ばせて亡くなった藤原道長などは、仏教を信仰し来世の極楽往生を切望していたからこそ、臨終にそのような態度をとったのと同じことだ。

なお、福岡の承天寺（臨済宗）を菩提寺にしようとして、キリシタンであることを理由に断られたというのが、崇福寺創建のいきさつと語られてきたが、教会側の記録では、承天寺や聖福寺はこの頃は敬虔な修行寺というより、男色宿を呈し乱れていて、潔癖な官兵衛が菩提寺にすることを由としなかったのだとしており（ザビエルに同行したジョアン・フェルナンデス修道士から聞いたフロイスが『日本史』に記載（『九州キリシタン新風土記』））、この話自体だけでは官兵衛がキリシタンだった証左にはならないかも知れない。

よって、官兵衛自身は内心では熱心なキリシタンだったが、これを他人に強制することなく、理解を示す者はキリスト教を信じたらいいいし、そうでない者は今後御縁もあろうし、領主の父である自分自身の信仰の問題で領内統治に混乱を招くことは避けなかった（上の者の趣味は下の者が真似したりするから注意せよと言い遺している。多少意図が違っても知れないが）ので、他の宗教に対しても寛容だったのである。ここ20年くらいの間に、オウム真理教などの新興宗教が社会問題化したこともあって、宗教というところの怪しいもの、危険なものというイメージも流布しているが、官兵衛の時代にはそのようなことは全くなかった。自分がいいと信じるものは、その信仰心が強いほど、他人に勧めようという意識があった時代であった。その時代にあっても、官兵衛は特定の宗教に偏執することなく、共存させる立場をとったのである。

4・キリシタン王国の建設を目指したのでは？

官兵衛のキリスト教以外の宗教への態度が寛容だった点を見てきた。

また、天の巻（上巻）で既に述べたように、官兵衛が秀吉の死後、家康に接近して九州にキリシタン王国の建設を目指していた可能性があった。ただ、それはあくまでどの宗教の信仰でも保証された地域であり、自発的にキリシタンになるものが保護される地区をつくろうとしただけであったろう。キリシタン以外の宗教勢力を迫害して衰微した大友家のような事態に陥らないように配慮したものであったろう。戦国の世にあつて、弱い者が踏みつけにされ、為政者の“横暴”によって信教の自由も蹂躪されるような社会を早く終わらせ、信教の自由が保証された平和な社会の実現を目指していたことの一端が、官兵衛のキリスト教以外の宗教への態度から伺える。

（注1）

経典の言葉。経典とは、お釈迦様の言葉を弟子たちが記したもの。「一向専念無量寿仏」は仏説阿弥陀經の言葉。無量寿仏とは阿弥陀仏の別名。一向専念とは文字通り、一つに向け、もっぱら念じよ、という意味。どうして、お釈迦様がそのように言われたかということ、西暦1052年以降の末法五濁の凡夫（人間）は自力聖道の修行では助からないから、阿弥陀仏一仏に向け、阿弥陀如来だけを専ら念じよ、余の諸仏、菩薩、諸神で助ける力はないから、それに向けて善を行ふのをやめよという浄土教の教えだ。

【Q 1 4】 官兵衛の生き方全般

官兵衛の生き方を通して、キリスト教の教えがどの程度影響していたのか、まとめてみていきたい。

1・私利私欲に奔らない、徒らに富貴や名誉を望まなかった点

これについては、すでに他の部分で述べてきたが、再度述べてみると、官兵衛の生き方は、どちらかというところ、私利私欲の権力闘争とはかけ離れた印象を与え、その行動には壮大な意図が感じられた。秀吉に取り入って私利私欲に奔っていた武家や公家はごまんといたが、官兵衛は自分の天賦の才を活かして、天下をより良く変えるためには何かしら貢献したいというような意図をもって行動していたように感じられる。

一段高いところから俯瞰して、天下の趨勢を見通していたのは、確かに司馬遼太郎氏が指摘するように、キリスト教だったのかもしれない。あるいは、そういう思想が日本にはこれまでになく、だからこそ官兵衛はキリスト教に惹かれたのかもしれない。

秀吉の惣無事令により私闘が禁じられ、各地での検地・刀狩一揆などが終息し、束の間の平和が訪れた。しかし、シナ征服計画のもとに朝鮮半島に遠征し、不慣れた土地で寒さや飢えとも戦い、ゲリラに悩まされ、苦しい戦いを繰り返した（とされている）（注1）。渡海した西国の大名たちを中心に疲弊が著しかった。

秀吉の死により朝鮮から撤兵した後、乱世を終息させ天下泰平とするために、家康に天下を取らせるように画策した。自家の安泰、手柄を立てるため、豊臣家のため・・・いろいろな目的をもって諸大名は動いていたが、天下万民の平和な世を作るため、私利私欲は優先度を落とし、世間を俯瞰して捉え、何が必要か考えて働いた。

家康から長政とは別に上方で領地を与えよう、あるいは官位を進めるか、場合によっては国政に参画するか、と言われたが、それも断っている。家康の警戒を解くために芝居を打ったとも思えるが、関ヶ原の帰趨が決したあとも、2ヶ月あまり軍事行動を続けていたにも関わらず、その対価を何も受け取らなかったというのは、なぜだったか。上方で1万石くらいもらって隠居生活を楽しむこともできたはずで、それくらいなら家康も警戒しなかっただろう。しかし、受け取らなかったのはなぜか。おそらく、自身の領土欲よりももっと別の、“実現したいこと”があったのだろう。それは、長政がもらった領土を守ることだけではない、何かだ。既に述べたように、キリスト教の布教（信教の自由）を黙認してもらったのもその一つだろう。

また、隠居生活では召使いの数も少なく非常に質素であったと言われている。家臣の家にふらっと立ち寄って気さくに茶を所望したり、子供たちと遊んだり、子供たちがいたずらしても怒らなかった。

彼が晩年に至った境地を見れば、私利私欲に奔らない、徒らに富貴や名誉を望まなかったという点がご理解いただけるであろう。

ここで、官兵衛がキリシタンだったので、キリスト教の“清貧”ということが思い浮かんだ方もおられると思う。キリスト教の“清貧”とは、富は人類全体の為にあるとの認識に立ち、必要以上の物欲が罪惡の機縁となり、人格向上の最大の邪魔であるとして、これを捨てて生きること。献金は所有する財貨を神や社会に捧げて還元すること、とされており、官兵衛が宣教師からそのような“あり方”を聞いて、清貧な生き方を目指した可能性はある。自分自身の利益のためというより、信教の自由が保証される国の建設という公共の利益のために戦ったからこそ、自分自身の褒美を放棄して、キリシタンの保護をしたのであろう。

2・合理主義だった点

官兵衛が後に残す遺訓にも、武士の誇りや体面よりも、合理性を重視していると思われるふしがある。たとえば、官兵衛の残した遺訓や生き方として、

当時はよく行われていた殉死の禁止を厳命した（『黒田如水伝』）。優れた家臣たちを無駄死にさせず、次の世代に奉公して欲しいとして、殉死を厳命した。自分に殉じる家臣がいないというのは、家臣に慕われていないということであるから、体面が良くないと思う者もいただろうが、官兵衛はそんなことは重視していなかった。

殉死の禁止については、キリシタンの家臣たちにとっては当たり前のことであったから、むしろ、キリシタンではなかった家臣に対して、殉死による奉公や忠義という体面よりも、今後奉公してもらうという実質を重視するという立場を明確にした、ということであろう。他でも述べたが、一部は祖父・重隆仕込みの商人“的”感覚から来ているものと思われる。武士の面目とかよりも、相手の立場に立って行動すべきものだと、教えられたのかも知れない。

また、自分が死んだら、葬祭を厚くしてはならない。ただ国を治め、民を安んずることで追善とせよと言ったという（『黒田家譜』第14巻）。これも、武家の体面やプライドを重視しなかった官兵衛らしい。関ヶ原の戦い後に大幅減封となった上杉家では、謙信公以来の方式のまま、典礼・儀式、参勤交代の装備を続けたこともあって、財政難に陥ったといわれている。

3・姦淫をしなかった

これについては、Q11において既に述べた。自分の子供を残せないというリスクを冒しても、キリスト教の教えを守ろうとしたのである。

4・殺戮を好まなかった

これについては、Q12において既に述べた。殺し合いはさらなる殺し合いを生み、弱い者たちにしわ寄せがいく。平和な世の中を作るために自分も手を尽くし、それを実現したのは、官兵衛も大きく貢献したと思われる。キリスト教の教えではあったが、戦国武将が人を殺さないのは難しかったから、自分のなすべきことは、早く平和な世をつくることだと考えていたと思われる。大乱が起きれば、自分が出世するチャンスが増えるし、現にそういうチャンスを確実にモノにして領地を増やしてきた官兵衛にとって、平和な世の中の到来はチャンスがなくなってしまうことを意味したが、そんな小さな欲にとらわれていた官兵衛ではなかったのであろう。

5・上に立つ者が下々の者たちに支持を得られるように行動した

この感覚は、今でこそ一般的になったが、秀吉の後半生が暴走していったといわれるように、出世の階段を登って権力をもつようになると、歯止めがきかなくなって“暴君”になってしまうことがよくあるが、官兵衛はそうはならなかった。

家臣たちの眼を長政に向けるために、わざと家臣たちに冷たくあたったりしたという逸話があるが、おそらく創作だろう。祖父から教えられた商人“的”な感覚―商売は相手に信頼してもらわないと成り立たない―があった官兵衛は、いくら4～50万石の大大名となっても、家臣領民に支持をされなければ成り立たないという切実な問題だと思っていたのだろう。

長政たちに対して「天罰より主君の罰、主君の罰より臣下・百姓の罰を恐れ、決して家臣領民に罪を及ぼして嫌われないように心がけなければならない」と遺訓を述べたとされている。

その理由は、「神の罰は祈れば避けることができるはずだし、主君の罰はお詫びを言って謝罪すればいい。しかし、家臣領民に嫌われたら、必ず国を失って、祈っても詫びてもその罰を逃れることができない。そのため、神の罰や主君の罰よりも、家臣領民の罰はもつとも恐れるべきことだ」としている（『黒田家譜』第15巻）。

また、部下に対しては、「虚勢を張るな。真の威儀とは、まず自身が正しい行いをし、臣下に礼をもって接し、理非・賞罰を明らかにすること。そうすれば、おのずから慕われて、上を侮り、法を軽く思う者はいなくなる」（『黒田家譜』第15巻）と、まず上司である自分自身の行いを正すことを求めている。

また、治世の要諦として次のように述べられている。大意はこうだ。「国を治めるのは大変難しいことを思うべきで、普通の人と同じ認識では難しい。政治に私心を混ぜず、礼儀作法を乱さず、庶民の手本となる必要がある。普段の自分の趣味などを慎んで、取捨選択する必要がある。主君が好むことを、必ず家臣や領民が大切に扱い、重要なことである」（『黒田家譜』第15巻）とあり、ここでも家臣領民の模範となるように行動を慎むべきことが述べられている。

6・儉約家だった点

官兵衛は儉約家だったという逸話がある。

たとえば、野菜の皮や魚の骨などを捨てないで、それを工夫しておかずとして再利用するように家臣に厳しく命じており、「瓜の季節には、家臣や町人から、捧げられた。伽坊主・小姓など側で仕えている者たちを皆呼び出して食わせ、皮を削る者にも、皮を厚く剥けと、申し付けた。伽坊主が言ったのは、こんなに小さな瓜を、皮を厚く剥いていたら、食べるところは少なくなりましよう。いいや、一つで食べ足りなければ、何個か食べ、その皮を長持の蓋に入れておくようにと、台所の賄人と呼ばし出して、あの瓜の皮を漬け物にして、台所で食べている者たちに惣菜が少ない者が多いから、それらの者たちの惣菜にせよ。なすやその他の野菜の切れ端、魚の骨は全部捨てずに、それぞれにこしらえ、惣菜のないものに食べさせよ、と申し付けた」（『古郷物語』瓜の皮のこと）。

官兵衛は、儉約を常とし、自分のためにお金を遣うことはなく、華美を嫌っていた。それを知らない者は、官兵衛はただのケチだと思ったという。しかし、儉約は国家を保ち、身を治めるのに最も肝要で、昔から優れた人は必ず儉約していた。しかし、いったん有事があれば惜しみなく遣った。

金は貯めるためではなく、遣うためにある。遣わないのは土くれと同じだと言ったとされている。家臣に褒美を取らせるときには、惜しげもなく与えている。「使う間敷ならば、金にてはなく、瓦礫に劣れり、貯え置きては詮なし」（『古郷物語』）自分が儉約しているのは、家臣に褒美を存分に与えるためであり、貯えているだけの金なら瓦や石ころにも劣る。それは生きた金の遣い方とはいえないという考え方だ。

関ヶ原の動乱の際には、それまでに必死(!?)に貯めた蓄財を惜しみなくばらまいて兵を集め、九州を席卷する活躍を見せるのである。

7・隣人愛

官兵衛の他人に対する慈愛は、父の職隆譲りであつたろう。職隆は、慈善活動のようなことをしていたと言われていた。

「人に恵みを与え、鰥（61歳以上で妻がいない者）、寡（61歳以上で夫がいない者）、孤（16歳以下で父がいない者）、独（61歳以上で子がない者）の窮民の飢えや寒さを救うため、大きな長屋を二つ作り、飢えた者たちを多く集め、道で路上生活者を見つけると、お前はわたしのところへ来るがよい、扶養すると言ったので、飢えた人たちが多く集まってきて、一人ひとりに食事を与え、衣服を着せて養っていた」（『黒田家譜』職隆記）。

また、自分たちを窮地に陥れた主君小寺政職を許し、子の氏職を家臣としている。

「その後、小寺政職は理由があつて御着城を退出して、浪人となって亡くなった（引用者注 別所長治に連座して毛利方についたため、播磨平定時に毛利方を頼って出奔）。小寺政職の子、氏職は備後の鞆の浦に流浪していたが、職隆、官兵衛はこれを可哀そうに思つて、秀吉に小寺主家の誤りを許し、私に扶養させてくださいと願つたので、秀吉は二人が主家に対する誼を忘れなかったのを感じて、それを許した。職隆はこれにより、姫路の海辺の飾磨津に、大きめの新居を作り、小寺家をことごとく招きよせた。そのとき職隆の子をことごとく迎えにやり、とても懇ろにもてなして扶養された。これを見聞した人は、職隆の恩義が厚いことを感心した」（『黒田家譜』職隆記）。

氏職がこのあと黒田家の家臣となつたことは事実であるが、その経緯が上記のようであつたかどうか、その信ぴょう性は、このような父親をみて育つた官兵衛がのちにとつた行動から、ある程度信じてもいいかも知れない。自分を窮地に陥れた主君が放逐されたとしても、それを捨て置いても誰も何も言わなかつたと思われる。しかし、職隆や官兵衛は捨て置かなかつた。政職は信長や秀吉を裏切つたのであり、それを助けようとするれば、職隆や官兵衛自身の評価が下がる可能性があつたのに、命乞いをしている。このように、個人的な恨みを乗り越えるというのは、並大抵のことではなかつたと思われる（職隆や官兵衛がただのお人よしだつたのではなく、旧恩をかえしたいという気持ちがあつたということかも知れない）。

このような父親の背中をみて官兵衛は育っている。氏職の子孫は黒田藩士として存続した。“右手の頬を打たれたら、左の頬を差し出さない”とキリスト教でいうところの隣人愛を実践していたのかも知れない。

このように、官兵衛は大大名の藩祖であるのに、プライドがあつて我を通すこともなかった。名君と呼ばれる人と同じような発想をする人がいないわけではないが、官兵衛の場合には徹底している。そのような官兵衛だったからこそ、キリスト教に共感し惹かれたのであろう。キリスト教に入信してから、がらっと変わったというより、生来の性格や父母の教えが本にあつて、キリスト教の教えがそれを強化したことによるものだったのだろう。入信した後、キリスト教の教えを忠実に実践していったのであつた。

(注1)

朝鮮出兵の犠牲者はどれくらいあつたのだろうか。

日本側の兵力は、文禄の役15万8千人、慶長の役14万人、後方支援の人数をいれるとさらに増える。朝鮮半島の人口は1,192万人(「朝鮮の役」参謀本部より、日本が予測した朝鮮の石高より推定)、明軍は20万人(教会側の複数の記録から)。文禄の役全期間の合計で、朝鮮は17万2千人の正規軍を展開し、2万2千人の非正規軍がこれを支援した(『朝鮮と日本の関係史』朴鐘鳴監修)。

これくらいの規模の軍勢が7年に渡り対峙して、おもに朝鮮半島南部とその周辺海域で戦いを繰り返していた。どのくらいの死傷者があつたのかというと、よくわからない。

たとえば、大東亜戦争における大日本帝国内の人口7,138万人に対して、死者数262～312万人(3.6～4.3%)となっているから、単純にその割合を使うと、朝鮮半島の人口は1,192万人に対して死傷者が朝鮮人47万人となる。この時代、大量破壊兵器はないから、こんなに亡くなったという疑問だ。多く見積もっても数万人程度と考えるのが自然だろう。他に、最大でシナ人数万人、日本人数万人の死傷者が出たと思われる。

日本側は食糧不足、ゲリラ戦、寒さに悩まされたと言われている。官兵衛は、朝鮮の民に対する撫民をして、彼らを手懐けることの必要性を秀吉に訴えていたと言われている。手懐けることができれば、もっと有利な戦いを展開することができたであろう(朝鮮に遠征したことの是非は別として、為政者の心得としては重要なことだろう)。

【Q 1 5】 官兵衛がキリシタンだったことの影響 ―息子長政―

官兵衛がキリシタンだったことの影響を受けた長政。長政は当初洗礼を受けたが、のちに迫害に転じている。そのいきさつをまとめて見てみたい。

天の巻（上巻）において、官兵衛の勤めによって受洗したところまでを記述した。また、Q 11・13において、豊前中津時代のことを少々と、筑前入封後の状況を述べた。それらを長政の視点からまとめてみたい。

1・全体像（中津時代以降の長政）

まず、中津時代以降の長政の年表をみてみよう。

和暦 (西暦) 年齢	長政に関係が深い事項	一般的な事項
天正15 (1587) 20	中津城下で受洗。	7月 秀吉箱崎にて伴天連追放令発布。秀吉、高山右近に棄教を勧告、右近棄教を拒み追放される。
天正16 (1588) 21	1月 城井谷の宇都宮鎮房が降伏し、領内の国人一揆が平定される。 この年に、中津城が完成し、馬ヶ嶽城から移る。	4月 後陽成天皇が聚楽第に行幸。 7月 刀狩令。
〃 17 (1589) 22	4月 宇都宮鎮房を中津城で刺殺する。 城井谷に兵を送り、宇都宮一族を撲滅する。 5月 家督を継ぐ。 従五位下甲斐守に任官。	5月 秀吉の長男鶴松誕生。 秀吉、耶穌教を厳禁し、宣教師を長崎に追放、京都南蛮寺を焼く。
〃 18 (1590) 23	小田原攻めのときは、領国で留守居。 12月 播磨室津で巡察師ヴァリニャーノや伊東マンショらに会い、洗礼名ダミアンを授けられる。	7月 北条氏直が降伏を申し出、北条氏政、氏照は切腹を命じられる。 7月 天正遣欧少年使節が巡察師兼インド副王使節アレッサンドロ・ヴァリニャーノ神父とともに長崎に帰着。
〃 19 (1591) 24		1月 豊臣政権を支えるナンバー2である秀長が死去。 2月 千利休が切腹を命じられる。 12月 秀吉は関白職を養子の秀次に譲る（太閤と呼ばれるようになる）。 秀吉、ポルトガル印度総督に耶穌教の禁止を伝え、貿易を求める。 アレッサンドロ・ヴァリニャーノ神父、遣欧使節一行と聚楽第で秀吉に謁見し、印度総督の書簡を渡す。
文禄元 (1592) 25	5月 三番隊の主将として朝鮮渡海（5千人の軍役）。 6月 大同江の戦いでは朝鮮軍の夜襲を受け苦戦していた宗義智の軍勢を救援し、長政は負傷するも大いに奮戦し朝鮮軍を破った。 7月 黄海道の海州を攻略。 8月 漢城会議で明の援軍を警戒して戦線を縮小。主要街道沿いにある白川城・江陰城を守った。	3月、秀吉、京都をたち肥前国名護屋城に向かう。 5月 日本軍、首府漢城を占領。 6月 日本軍、平壤を占領。 7月 日本水軍、李舜臣率いる朝鮮水軍に敗北（閑山島、安骨浦の戦い）。
〃 2 (1593) 26	1月 碧蹄館の戦いで明軍を破る。 幸州山城の戦いに出陣。 6月 （第二次）晋州城の戦いに勝利。機張城を守備。	1月 碧蹄館の戦い後、戦線が膠着し講和の動きが起こる。 4月 漢城を放棄して朝鮮半島南部へ布陣。 8月 秀吉、次男秀頼誕生。
〃 3 (1594) 27	8月 父から五か条の教訓を書き渡される。 秀吉は長政の朝鮮での武功に免じて、官兵衛の軍紀違反を許す。	2月 秀吉、吉野の花見を行う。 この頃よりイエズス会と他会派の対立表面化する。
〃 4 (1595) 28		7月 秀吉の甥秀次が高野山で切腹させられる。
慶長元 (1596) 29	9月 朝鮮渡海（5千人の軍役）。	閏7月 山城大地震で伏見城倒壊。 9月 秀吉、朝鮮再出兵を決意。 スペインの帆船サン・フェリペ号、土佐浦戸沖に漂着する。領主長曾我部元親乗客、乗員を抑留し、積荷を押収する。 マルチネス司教、長崎にイエズス会士を会議のために招集し、その席上、フランシスコ会士の国外退去を求める方針を決定。

<div># 2 (1597) 30</div>	<div>8月 主に全羅道から忠清道へ攻勢。 黃石山城を攻略。 全州會議により長政は加藤清正や毛利秀元等と右軍を形成して忠清道の天安へ進出。 稷山の戦いで激戦の末に明軍を撃破。</div>	<div>7月 漆川梁海戦で元均率いる朝鮮水軍を壊滅に追い込む。 11月 明の大軍が漢城に到着し、蔚山城の攻防戦がはじまる。 12月 二十六聖人の殉教。豊臣秀吉の命令によって長崎で処刑。日本でキリスト教の信仰を理由に最高権力者の指令による処刑が行われたのはこれが初めて。 オランダ船初めて平戸港に入港。</div>
<div># 3 (1598) 31</div>	<div>長政の梁山倭城のみ放棄が認められ、以後亀浦倭城へ移陣。 8月 朝鮮から撤兵。 三成ら文治派との対立路線から五大老の徳川家康に接近。 蜂須賀正勝の娘と別れ、家康の養女（保科正直の娘）を正室に迎えた。</div>	<div>3月 秀吉、醍醐の花見を行うが、その後体調を崩す。 明の攻撃を受けた諸将は今後の防衛体制を整えるために蔚山倭城(最東方)、順天倭城(最西方)、梁山倭城(内陸部)の三城を放棄、戦線縮小案を秀吉に打診したが却下。 8月 秀吉死去。 朝鮮から撤兵命令が出される。</div>
<div># 4 (1599) 32</div>	<div>石田三成を襲撃（福島正則や加藤清正ら武断派（いわゆる豊臣七将）と共に）。 12月 家康に暇をもらい、中津に戻る。</div>	<div>閏3月 前田利家が死去。 フランスシスコ会、江戸に会堂を開き関東布教開始。</div>
<div># 5 (1600) 33</div>	<div>7月 会津の上杉景勝討伐（会津征伐）の兵を起すと家康に従って出陣。 7月 小山軍議。 8月 合渡川合戦。岐阜城の戦い。 9月15日 関ヶ原の戦い。 細川忠興とともに石田三成と対峙。先鋒の島左近を狙撃兵で討ち取る。鉄砲や大筒を駆使する石田隊と激闘を演じる。 小早川秀秋の東軍参戦で西軍が総崩れになる。宇喜多隊の前衛、明石掃部（全登）を救出。 10月 大坂城開城。輝元は、福島正則と黒田長政の開城要求に応じる。 島津、長政を通じて家康との調停交渉を依頼。 12月8日 筑前国名島城に入る。 12月31日 大坂に上り、家康と会見。</div>	<div>閏3月 前田利家死去。 石田三成襲撃事件で、三成が奉行職を免じられ、居城の佐和山に退く。 7月 三成らが大阪で西軍を率いて挙兵。 オランダ船リーフデ号豊後に漂着。イギリス人、ウィリアム・アダムス来日。</div>
<div># 6 (1601) 34</div>	<div>福崎の地を福岡と改称して、福岡城の築城開始。</div>	
<div># 7 (1602) 35</div>		
<div># 8 (1603) 36</div>	<div>2月 従四位下、筑前守に叙任された。 11月 長男忠之（幼名万徳）が福岡で生まれる。</div>	<div>2月 家康、征夷大將軍に任じられる。 7月 秀頼に徳川秀忠の娘千姫が嫁ぐ。 島津忠恒（義弘の子）によって置われた宇喜多秀家が家康のもとへ身柄を引き渡される。 マニラ総督派遣のディエゴ・デ・ベルメオ神父、ルイス・ソテロ神父らフランスシスコ会士来日。</div>
<div># 9 (1604) 37</div>	<div>2月 伏見に戻っていた官兵衛の病状が悪化。 福岡にいた長政は父の見舞いのため伏見に上る。 3月 官兵衛が伏見の藩邸で死去。 官兵衛の遺体を博多に回送し、葬儀を博多の教会で行う。博多で教会堂の建設を許可。</div>	
<div># 10 (1605) 38</div>		<div>長崎が幕府の直轄地（天領）となる。</div>
<div># 11 (1606) 39</div>	<div>3月 官兵衛の三回忌。博多の教会堂の完成。</div>	<div>ドン・ルイス・セルケイラ師、日本司教として京都伏見で家康と会見。</div>

" 12 (1607) 40	福岡城、竣工。	黒田直之、秋月に教会堂建設。 イエズス会、準管区長フランシスコ・バシヨ神父、秀忠・家康に謁し、大坂で秀頼訪問。
" 14 (1609) 42		黒田直之が死去。 京泊（長崎）にてキリシタン迫害始まる。
" 17 (1612) 45		岡本大八事件。 3月 幕府、直轄地（天領）にキリシタン禁教令。
" 18 (1613) 46	2月 石城問答により博多の教会堂が解体される。	2月 幕府、全国にキリシタン禁教令。 キリシタン総奉行大久保忠隣上洛。 平戸にイギリス商館設置。
" 19 (1614) 47	10月 大坂冬の陣。江戸城の留守居を務め、代理として嫡男の忠之が出陣。	10月 都の大殉教（四条河原でキリシタン52人が火刑） 家康、長崎の諸教会の破壊を命じる。 博多で最初の宗門改めが行われる。 天草上津浦に残っていた最後の宣教師マモコス（マルコス・フェラロ）追放の時『未鑑』（未来書）を遺す。
" 20 (1615) 48	5月 大坂夏の陣	一国一城令。
" 21 (1616) 49		9月 幕府キリスト教を禁じ、唐船以外の外国船の入港を平戸、長崎に限定。
" 22 (1617) 50		9月 長崎の大殉教（元和の大殉教）（カルロ・スピノラ神父ら55名、長崎西坂で殉教）。
元和9年 (1623) 56	8月 徳川秀忠の上洛に先立って早くに入京したが、まもなく発病して京都知恩寺で死去。 長政の遺言により、三男長興に五万石が分与されて秋月藩を立藩。	8月 将軍秀忠が隠居し、家光が将軍となる。 12月 江戸の大殉教

（小和田哲男著「黒田如水―百姓の罰を恐るべし―」の巻末年表をベースに、キリシタン史関連の年表を参考とし、大幅に加筆修正して作成）

長政が豊前に入封したあと領内の反乱が発生した。これらを毛利の援軍を借りつつ、何とか平定した。領内が安定した後に官兵衛から家督を譲られ、しばらくは領内の統治に腐心した。小田原陣にも出陣は命じられず、このあとの大陸侵攻の準備期間としての位置づけだったのだろう。

その後、4年間余り朝鮮半島内を転戦し、停戦時にいったん中津に帰り、秀吉の再出兵の命令により再び渡海して転戦して、数々の武功をあげた。秀吉の死去後の撤兵命令に従って帰国した。帰国後は、伏見にあつて、家康に接近し豊臣恩顧の大名を諷略し、家康の関ヶ原の戦いの勝利に大きく貢献したことにより、筑前国一国を封じられた。

官兵衛の存命中、長政のキリシタン政策は比較的穏当で、官兵衛の遺言もあつて一時保護した時期もあったが、幕府の方針が転換する中で、長政も弾圧に転じている。

それでは、長政とキリスト教との関係に焦点をあてて、具体的にみてみよう。

2・中津時代

長政は九州平定戦の直後の天正15年（1587）に、中津城下で受洗した。なお、長政が洗礼名を授けられたのは、そのときではなく、天正18年（1590）暮れであった。長政が、秀吉への年賀を奉じるために上洛した際に、巡察師ヴァリニャーノが四人の少年使節を伴って秀吉に会いに行く途中、最後の許可が出るまで播磨国の室津で待機していたのを、長政が訪問し、ヴァリニャーノからダミアンの洗礼名を授けられた。

以下の史料では、長政が巡察師一行を訪問したときの経緯が記されている。

「（室での）もっと大いに利益を被ったのは、（黒田）官兵衛殿の一人息子が23歳になるダミアン（黒田甲斐守長政）という若者を、我らが得たことである。彼は豊前の国を渡されて統治し、その才幹ゆえに関白殿から大いに気に入られ寵遇されていた。彼は（17歳の時に）洗礼を授かってから、もう数年経っていた。洗礼を授かったのは少年の頃で、その後迫害が襲ったため（引用者注 秀吉による伴天連追放令）、キリシタン信仰についてはほとんど何も知ってはいなかった。彼には人間が救われるためには洗礼が必要であるということが納得できず、人間は道理に従って正しく生きさずすれば、いかなる宗派によっても救われると考える誤謬に陥った。〔だが彼はつねに、自分はキリシタンであると公言していた〕。（迫害のため）（イエズス会の）すべての司祭たちは、下の地方に退いていたので（引用者注 追放令による迫害で九州地方に宣教師たちが潜伏）、彼はこの質疑を司祭たちに問いたたすことができなかった。彼は度々身近にいたあるキリシタンとデウスのことについて論じ合ったが、まだ決して心案じるに至ってはいなかった。

だが、今回彼は、室の港（引用者注 播磨国の室津。小西行長領で布教拠点があつた）を通過した際には（巡察）師を訪ねて行き、我らの仲間の一人（ヴィセンテ修道士）に、それらの疑問を語った。彼は疑問を解いてもらって満足し、以後デウスのことを話してくれるように切に願（う）に至った。室にいた3日間、彼は二六時中、我らの家にいるか（または自らの宿舎で）我らの仲間とともにいるかして、論じ合つて時を費やした。なお彼は日本の四公子（伊東マンショら）から、ローマ教皇のことやローマの宮廷のことやヨーロッパの事情についての話を聞くことは格別の楽しみであつた。

彼は（キリシタン）信仰のことでは大いに強化され、自分の妻、（同行者以外の）他の重臣たちに、教理書によってキリシタンの教えを説き、たとえ迫害が終わらなくとも洗礼の秘蹟を授けるために、誰か修道士を派遣してもらいたいと非常に熱心に（巡察）師に願つた。我らの信仰を（豊前に）弘めたいとの大いなる熱意が、神慮によって、これほどに彼に注がれたのである」（1591、92年度イエズス会日本年報 傍線引用者）。

「関白勢が秋月城を襲った際に、長政は十七歳で初陣を飾った。父の説得で受洗したが、父と同様に教えの事はあまりわかっていなかった。キリシタンにならなくても道理にしたがって生きていれば、どんな宗教によっても救われる、という考えから抜けきらずにいた。しかし、室にいた数日の間に別人のようになり、豊前領内でキリシタンを弘めたいという希望を抱くようになった」（フロイス『日本史』 傍線引用者）。

巡察師一行はインド副王の使節として秀吉に謁見し、副王の書状と贈り物を渡すことだけではなく、伴天連追放令を廃止ないし緩和させようと働きかけることを目的としており（秀吉はその意図を察知してなかなか会おうとしなかった）、官兵衛や小西行長らのキリシタン大名が裏で動いていた。伊東マンショらの遣欧使節団はローマ教皇に謁見が許され熱狂的な歓迎を受けたが、帰国したときには、伴天連追放令が発令されていて、キリシタンを取り巻く状況が様変わりしていた。

室津では小西行長が布教を保護していた。長政は室津で巡察師や伊東マンショらと会い、そのときにキリスト教の教えを聞いて満足し、所領の豊前国でもキリスト教を弘めようとやる気になっていたことが記されている。

その後、朝鮮の役最中に陣中見舞いに訪れた宣教師から教えを受けている。年次からして慶長の役のときだろう。

「（黒田）甲斐守（長政）は幼年時代に〔太閤様が特にキリシタンたちに関しては、デウス（聖なること）と人間（俗なること）とのすべてについて禁止し始めた数ヶ月前に〕、父親の官兵衛殿の命令で洗礼を授かった。そして彼は朝鮮戦役の全期間中、城の中で生活していたが、我らの仲間の一人が彼のもとへ近づいた時、彼は教理（カテキスモ）を十分に聞く機会を得た。この時彼の側には、彼の高貴な家族たちだけでなく仏僧たちもいて、仏僧は信仰の教理について種々の質問をした。我らの教理教育者はそれらの質問に対して一同を等しく満足させたので、（黒田）甲斐守は少なからず満足した」（1599年度イエズス会日本年報 傍線引用者）

なお、「父親の官兵衛殿の命令で洗礼を授かった」と記録されているが、別の記録では、官兵衛が長政に強制せず、自発的にキリスト教を求めるようになるまで待つていたと発言していたことが記録されており、この記録は単なる誤認であろう。あるいは、長政がキリスト教の求道に消極的なので、父親から強制されたから信仰がないのだろうと、わざと記載したのかも知れない。

秀吉の死去により朝鮮から撤兵し、中央の政治情勢が風雲急を告げ、結局、関ヶ原の戦いで家康が勝利した。

3・関ヶ原の戦い直後

小西行長（洗礼名アゴステイノ）は関ヶ原の戦いで西軍として戦い、キリシタンであったこともあって、自害をせずに逃亡していたところを捕縛された。捕縛されたあとの長政とのやりとりの記録が残されている。

ちなみに、行長は、関ヶ原本戦では、東軍の田中吉政、筒井定次らの部隊と交戦して奮戦する。しかし小早川秀秋らの裏切りで大谷吉継隊が壊滅すると、続いて小西隊・宇喜多隊も崩れ、行長は伊吹山中に逃れた。9月19日、関ヶ原の庄屋・林蔵主に匿われた。行長は自らを捕縛して褒美をもらうように林蔵主に薦めたが、林はこれを受けず、竹中重門家臣の伊藤源左衛門・山田奎之丞両名に事情を話し、共々行長を護衛して草津の村越直吉の陣に連れて行った。

では、捕らえられた行長と長政のやりとりの記録をみてみよう。

「彼（引用者注 小西行長）は捕虜として（黒田）甲斐守のもとに出頭したが、甲斐守は非常に著名な人物の逆境を見て、心を動かされたように思われた。（小西）アゴステイノは彼の心が挫けているのを感じると、甲斐守〔彼の権限下にあった〕に向かって、次のような言葉で話しかけた。「貴殿よ、汝は私がいかなる人物であったかを熟知しているし、また私が現在どのような状況になっているかは、ご覧のとおりである。それゆえ私は、ただ一つだけ恩義を与えて下さるよう汝に願う」と。（黒田）甲斐守は自分が（小西アゴステイノから）助命を嘆願されていると思っていたので、（小西）アゴステイノはこう付言した。「私は自分で何とも思っていない、この肉体の生命について、永らえるために骨折りはしない。もし私がデウスへの侮辱を恐れなければ、私は自ら容易に生命を絶ったであろう。しかし私はこの死すべき人生において、ただ一つだけの恩義を私のために取り計らってもらうことを望んでいる。すなわちそれは私に一人の伴天連様に逢う許可が与えられ、私がキリシタンの儀礼に従って、伴天連様に罪を告白するようさせていただきたいことである」と。（黒田）甲斐守はこの件については、内府様のもとの尽力を喜んで約束した。こうして（小西）アゴステイノは、自分が非常に望んでいたことがかなえられる希望が与えられたため非常に喜びに満たされた。しかし内府様は、自分は聞き入れぬことを明らかにし、そしてその請願が（小西）アゴステイノにとっては必要ではない（と見なすと同時に）、（甲斐守）に対しては不快感を抱いた。」（1601年2月25日付、長崎発信、ヴァレンティン・カルヴァーリユのイエズス会総長宛、日本年報補遺 傍線引用者）

小西行長は自分の命よりも、神父に会えるように取り計らって欲しいと長政に懇願している。長政は親身になって、家康にとりなそうとしたが、家康がこれ聞き入れなかったばかりか、長政に対して不快感を表している。

長政は、西軍の石田三成が捕らえられ、家康をはじめとする諸将の前に引き立てられたときも、三成に陣羽織をかけてやったという逸話があり（藤堂高虎という説もある）、西軍として参加し薩摩まで敗走した島津義弘に対しても、家康との和平交渉（や薩摩・大隅の所領安堵交渉）を斡旋している。

その長政は、一応キリシタンとして、小西行長が最期に神父に会いたいと言ったことの真意を理解して、家康に真剣にとりなしたことだろう。ただ、それが、家康を不快にさせたようだ。長政はこの家康の態度をみて、キリシタンの件は要注意案件だと察したに違いない。

このあと、行長は10月1日に、市中引き回しのあと六条河原において石田三成・安国寺恵瓊と共に斬首された。その際、行長はキリシタンゆえに浄土門の僧侶によって頭上に経文を置かれることを拒絶し、ポルトガル王妃から贈られたキリストとマリアのイコンを掲げて三度頭上に戴いたあと、首を打たれたと伝えられる。処刑後、首は徳川方によって三条大橋に晒された。処刑当日も司祭が秘蹟を行おうとしたが接近できず受けることができなかった。遺体は改めて秘蹟を受けた上で絹の衣で包まれ、カトリック方式で葬られた。

教皇クレメンス8世は行長の死を惜しんだと言われる。立場は違うが、臨終に神父を呼んで秘蹟を受けることを望んだ官兵衛と同じ行動をとっていることから、2人とも熱心なキリシタンだったことが理解できる。

4・筑前入封後

(1) 全体評価

幕府は豊臣恩顧の大名をはじめ、外様大名は改易の対象となった。改易の理由はルールを破ったから、ということが多いが、しかし、それは隙を見せたら幕府に取り潰されるという恐怖を諸大名に与えていたに違いない。

長政は筑前一国を与えられ、家康から「末代まで粗略に扱わない」と言われたとも言われているとはいえ、幕府から睨まれるようなことは極力避けたかったことが、彼の行動を見ればわかる。その一環として、家康がキリスト教を嫌っていることを知っていて、波風を立てないために、キリスト教の布教には消極的であった。ただ、一時的にキリシタンに寛容になった時期もないわけではなかった、というのが全体としての傾向であった。

長政が父官兵衛や叔父直之の没後、自身がキリシタンであったことを隠そうとして隠蔽行為や弾圧を行ったため、神父たちの評判は悪い。たとえば、

- キリシタン武将の明石掃部の所領を没収し秋月に追放した。
- 直之の子直基の暗殺を画策した可能性があり、いずれにしてもキリシタンが保護されていた秋月領をとり潰した（その後、三男長興に秋月を立藩させている）。
- 博多の教会の土地を没収し、教会を破壊した。
- 官兵衛の生存中からキリシタンの弾圧をしていたかのように「石城問答」（日蓮宗坊主とキリスト教イelmanの法論）が起きた年代を実際よりも古い年代に改ざんした。
- 朝倉市円清寺の官兵衛像にある宗儒の讀にあるキリシタンになったことの文言を隠滅し、晩年キリシタンを捨てて仏教に帰依したと書かせたことをはじめとした隠蔽工作を指示した（状況証拠から）。
- 大徳寺（臨済宗）の和尚春屋宗園に急接近したり（黒田家の菩提寺崇福寺の開山を春屋和尚に頼んだが、高齢のため高弟が派遣された）、幕府の儒官林羅山にも師事するなどした。

このような政策をとったこともあって、幕府の監視の眼をいかくぐり、藩は明治まで無傷で存続することとなった。

為政者としての長政は、秀吉や家康に決して逆らわず、その律儀さや正直さ、素直さ、武将としての勇略で気に入られていた。そんな長政は、秀吉や家康がなぜキリスト教を嫌がっていたかを知っており、いくら父や伯父の依頼があっても、あえて危険を冒してまでキリスト教団・信徒を保護するということはなかったのだろう。そんな長政を官兵衛はどう思っていたのだろうか。

(2) 長政のキリシタン政策の影響

長政の筑前入封したての頃は、イエズス会も長政に期待していたことが伺える記録がある。

「（黒田）甲斐守（長政）には筑前の国が与えられたが、その国は彼が以前その3分の2を領有していた豊後の国（引用者注 豊前国）よりも大きかった。筑前国の博多の街には、千名のキリシタンが居住しており、またそれと同数のキリシタンがこの領国の他の諸地域に居住しているので、我らはその保護者たちが当然キリシタン宗門に接近するであろうと期待することができ。とりわけ甲斐守〔彼の一族の少なからぬ者がキリシタンである〕が、これまで豊後の国（引用者注 豊前国）にあった己が居所を、今は筑前の国に置いているからなおのことである。」（1601年2月25日付、長崎発信、ヴァレンティン・カルヴァーリュのイエズス会総長宛、日本年報補遺 傍線引用者）

当時、筑前に散在していたキリシタンは約1千人であって、その殆どは博多の商人か地方の農民であった（上述の1601年の報告（1601年2月25日付、長崎発、カルヴァリョの書簡））。これに、黒田氏入国に際して豊前からやって来た黒田のキリシタン家臣と新しく黒田氏に仕えるようになったキリシタン武士などが約1千人。こうして、筑前のキリシタン数は2千人となっており、それは武士と平民が約半々であったそうである（1602年の報告（1603年1月1日、長崎発、マトスの書簡））。

もともと、博多は商業都市として海外との貿易で栄えていたため、それに目を付けた大友氏、龍造寺氏、毛利氏（小早川氏）の争奪的となった。大友氏の統治時代は九州で最も富裕な町であったと言われ、有力商人を中心として自治が行われていたとルイス・フロイスは伝えている。しかし、宣教師アルメイダは「博多はキリスト教を受け入れず日本一布教しづらい土地であった。その理由は裕福で贅沢な町だからである」と伝えている。

九州平定後、秀吉はポルトガル船に箱崎浜から乗船して焦土の博多を眺めた。そしてすぐに博多の復興に取り掛かり、官兵衛に住民を呼び戻す役目を担わせた。その後には石田三成を博多奉行に任じ、博多商人の神屋宗湛そうたんや嶋井宗室にも協力をさせ、本格的な復興に取り掛かった。秀吉の当初の復興計画は、博多を九州統治及び将来の朝鮮出兵のための政治・軍事都市とする予定であった。

石田三成が博多奉行だったとき、キリシタンの迫害をしていたことが伺える記録がある。イエズス会の宣教師の書簡には、秀吉が伴天連追放令を発令したときに三成がとった行動の内容が記されている。「これらの不信仰の人々の中で重立った者の中に大閥様の非常な愛顧を受けていた博多の奉行がいた（引用者注 石田三成）。彼は己がキリシタンたちに対して〔その数は千名にのぼっていた〕重大な脅迫に加えて、こう命令した。キリシタン（宗門）に対し

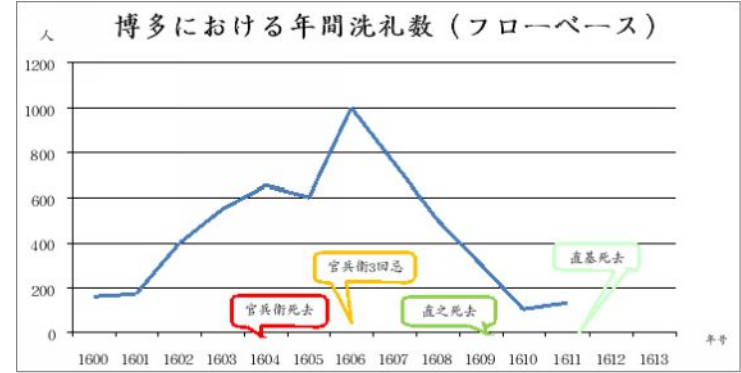
背教し、すべてのロザリオを自分のものへ返し、彼らの家々の門戸には異教徒たちが偶像神の名前や、その他の幾つかの文言を書くのを常とした板を打ち付けておくように、と」(1597年3月15日付、ルイス・フロイスのイエズス会総長宛、長崎における26殉教者に関する報告書)。ちなみに、石田三成はキリスト教に入信したこともあったといわれており(福本日南『黒田如水』など)厳しく接したのは表向きだけで、温情をもって接した可能性もある。

また、博多以外の筑前国は小早川隆景に与えられた。小早川隆景はキリシタンではなく、秀吉に気兼ねしてキリスト教をやめるように小早川秀包(毛利秀包)に忠告していたくらいだから、筑前国ではキリスト教布教はやりにくかっただろう。そのため、領主がキリシタンを保護した地方とは異なり、1千人ほどしか信者がいなかったものと思われる。

官兵衛と長政が筑前国に入ったときに、九州各地のキリスト教関係者が官兵衛のいる筑前に集まったことは既に述べた(Q7参照)。引退後の官兵衛がキリスト教の普及に尽力していたことについて、バジェス『日本耶穌教史』では、官兵衛が引退後の住まいを福岡に定めたあとは、政治に関係する必要がなく、もっぱら耶穌教の普及に一身を捧げた。よって長政もまた父の模範に倣い、従前よりも一層、その信者たることを示した。これにより耶穌教の団体は、各地方から福岡へ移住してきた。ついに筑前はその宗教の中心となった、と書かれている。あくまで当主として政治の実権を握っていたのは長政であったので、官兵衛が長政に強制することはできなかったが、父の想いを尊重したのだろう。

(3) 博多での布教の盛衰

ここで、長政が筑前に入封する前後以降の博多におけるキリシタンの受洗者の推移を見てみよう。これをみることによって、黒田藩のキリスト教政策の移り変わりがイメージできると思う。



(出典:『キリシタン研究19』慶長年間における博多のキリシタン p.51)

これは、イエズス会から本国への毎年の報告挙げられている洗礼の統計をもとに、一部推定を加味したグラフだ(注1)。

このデータをもとにすると、慶長年間に博多で授けた成人洗礼は五千人以上いたことになる。この増加数を当初の信徒数二千人に加えると、博多とその教会の管轄にいたキリシタンは7千人以上であったと推定される(人口の自然減は加味していない)。

慶長5年(1600)～慶長8年(1603)まで、官兵衛や直之の努力で宣教師の活動が「条件付きで」認められていたが、その反面、長政は幕府に対する遠慮から極めて消極的であり、異教徒の反対者たちも攻勢をかけていた。

慶長9年(1604)の官兵衛の死と彼の遺言のため、長政はいくぶん厚意的になり、官兵衛記念聖堂という形での教会建築を許可し、公然たる宣教を認めていたので、秋月や柳川が博多教会の区域から分割されても、残った区域内の洗礼は急速に増え、慶長11年(1606)にその頂点に達した。

ところが、慶長12(1607)から徳川幕府の確立過程に準じて、その反キリシタン態度が明らかになり、諸大名もその余波を受け、武士階級に対する取締りも一段と厳しくなったため、他の教会でも見られるように、博多での洗礼数、特に武士階級の洗礼数が次第に減少し、この慶長15年(1610)には全国的に大きなダウンがあった。慶長17年(1612)に家康の小姓組14人の追放と幕府直轄領で発生した弾圧をきっかけに、さらに減少していった。

筑前においては、慶長14年(1609)に黒田惣右衛門直之(ミゲル)が死に、その2年後に、彼の長男長門守直基(パワロ)も討たれ(引用者注 何故か中洲で家臣に討たれたという)、秋月領が長政によって没収された。秋月教会にとっても筑前一国のキリシタンにとっても、大きな打撃であったようだ。

なお、受洗の人数が年を追って大きく変動した背景には、教会側の体制などの要因よりも、それ以外の政治情勢などが原因だろうと言われている。幕府の政治方針と、その影響下にある藩主長政の対キリスト教政策の影響を大きく受けていたのは、黒田藩だけではなかった。

それでは、次に、長政の対キリシタン政策がどのように変化して行ったかを具体的に見てみよう。

(4) キリシタン武士の受け入れ

レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』には、「長政が拝領した筑前領内には千人以上の切支丹を数える博多やその付近に同じく多数の信者のいる村々があった。長政の家臣の大部分はキリシタンであり、長政は宇喜多秀家のいとこ、ドン・ヨハネ明石掃部とその家臣三百人、ドン・シメオン・ウインデナリ（引用者注 小早川（毛利）秀包）の子でドン・フランシスコと久留米のキリシタン武士の大部分を家臣に加えた。その上、長政は筑前入国の際、博多で伝道していた宣教師に土地を寄進し、・・・（後略）・・・」

とあり、すでに述べた部分もあるが、それぞれ西軍について改易となった宇喜多家と小早川家（毛利家）の家臣たち（大部分がキリシタン）を家臣として召抱え、博多のイエズス会に土地を与えていると書かれている。もちろん、長政が自発的にやったのか、官兵衛が存命なので気を遣っていたのか、この記事だけではハッキリしない。

(5) 異教徒

慶長6年（1601）のイエズス会の記録には、長政を“異教徒”と言って批難している記事がある。

「キリシタンの一人に数えられている（黒田）甲斐守（引用者注 長政）が国主をしているこの国には、（イエズス）会員の中の誰も滞在していない。なぜなら彼は放縦な若者で、並外れて悪徳の誘いのとりこになっており、彼がともに生活している異教徒たちの風習や生活の放埒さが受け入れているので、彼はキリシタンというよりはむしろ異教徒と判断されるであろう。この理由で彼の父の（黒田）官兵衛殿と叔父の（黒田）惣右衛門殿（引用者注 官兵衛の弟直之）は、この時に我らの同僚が以前の司祭館に帰ることについて（甲斐守）自身と交渉すべきではないという意見であった。特に内府様がキリシタンの福音に対して反対の発言をした最近の言葉の記憶があったからである。しかし（黒田）惣右衛門殿の諸地域へ司祭を派遣すべきことについては、司祭自身のために必要な食物と衣服を約束した住民たちが、それを切に望んでいる。しかし（黒田）甲斐守は政庁から帰ってきた時、我らに対してその国に滞在する許可を与えるであろうと我らは期待している。なぜなら、彼は、もはや心ではキリシタンたちを疎んじていない内府様の意向に従って行うことができるだろうからである。とりわけ彼が自己資金によって博多に教会を建てるのが発見された時はそうであろう。」（1601年度イエズス会日本年報 傍線・傍点引用者）

筑前国に入封して大大名になってからは、中津時代よりも多くの利害関係者が彼を取り巻き、仏教徒（特に日蓮宗）はキリスト教に異を唱えて長政に働きかけていたし、非キリシタン家臣たちは徳川家康や幕府に目をつけられないようにキリシタンの保護をやめさせようと働きかけていた。仮に長政自身が内面でキリシタン信仰をもっていても、それを貫くことへの障害が中津時代より大きくなっていたのは確かであった。

ただ、長政が気を遣っている家康自身が、一時的にキリシタンに対して黙認の態度をとったので、教団側も博多での布教について希望をもっていただようである。

(6) 官兵衛の遺言と葬儀

その後、慶長9年（1604）に父官兵衛がこの世を去った。このとき、官兵衛の遺言に従って、博多の教会においてキリスト教式で行われた。官兵衛は臨終に博多のキリシタンを保護するように長政に言っていた。イエズス会の協力の主導のもとで行われた葬儀は荘厳で、それを見た長政は父の遺言だったからしぶしぶ、というよりも積極的に、キリスト教に対する認識を改めたと書かれている。

「父親の死によって、またキリシタンの（葬儀の）仕方をより近くで目にすることによって、この嗣子（引用者注 長政）は別人に変貌し、それ以後は、キリシタンと我らの聖なる教え、また同様に教会や司祭たちの利点を盛んに口にし、（司祭たち）とすこぶる懇意（かつ）親切になり、彼らと食事をしに行きたいと何度か望み、これには、誰もがすっかり驚嘆した。

そして、デウスの教えを高く評価し、それだけが真実の、人間の（靈魂）救済の教えであると家来全員に宣明した。そして（言った）。「予は、一つには、自らの生命と権勢がかかっている天下の主君（引用者注 家康）を恐れるので、またさらに、予は弱くて（キリシタンの）教えを守ることができないのではないかと思うから、まだそれを敢えて奉じはしないが、家来たちは誰でも望む者は、それを信仰してよろしい」と。そのようなことはかつて一度も言ったことがなく、むしろつねにそれとは反対のことを言っていたのである。そして、今では、熱心な異教徒である実母にさえ、こう言い、請うるのであった。「父上、官兵衛殿がキリシタンとして死去されたからには、自らの救済を願うならば御許もまたキリシタンにおなりになるべきである（キリシタンの教えのほかに救済はないから）」と。」

（1603、04年の日本の諸事（フェルナン・ゲレイロ編イエズス会年報集） 傍線引用者）

とあるように、「異教徒」と言われるほどだった長政が、「別人に変貌」し、母親にキリシタンへの改宗を勧めるほどであった。

為政者としての長政は、天下人である秀吉や家康、あるいは領内の仏教徒や神道勢力などに配慮していたが、驚くことに本心からキリスト教を褒める方向に転じている。自分の母である光の方（照福院）に対してさえも人信をすすめるほどであった。それだけ、父の遺言に力があったのだらうし、葬儀の荘厳さのインパクトがあって、往時にキリスト教に入信したときの信仰熱が呼び覚まされたのであろう。

「このことによって、司祭たち、およびその街と同国全域のキリシタンたちは安堵し、デウスにこのように大いなる幸について感謝を捧げた。（黒田）甲斐守はまた、博多に教会を新しく公然と建てるように命じた。教会はそれまでなかったのではないが、教会というよりも他の家屋と同じ形状の家と言って良いものであった。彼自身がそのように命じていたからである。」（1603、04年の日本の諸事（フェルナン・ゲレイロ編イエズス会年報集） 傍線引用

者)

博多に以前から教会があつたものの、外見から教会とわからないようにするように、長政が命じていたと書かれている。それは、再三書いているように幕府への配慮であつた。秀吉の伴天連追放令自体はまだ生きていたことも理由であつたと思われる。しかし、長政が「別人に変貌」したことによって、公然と教会を建てるように長政が命じたのである。それは、父の遺言でもあつた。

はじめは尖塔式の教会建設を許さなかつた長政だが(引用者注 目立たないように、和風の家屋に教会を作ることは許した)、官兵衛の葬儀を終えると、本格的な教会建設を許すようになった。キリシタンを奨励する意味ではなく、あくまでも「官兵衛追悼記念聖堂」の名目であつた。幕府の咎めに対しても、亡き父の追悼記念堂として建てたと弁明し、領内の反キリシタン党に対しても面目を保つことができた。

この新しい教会堂は、日本で最も立派な聖堂の一つであつたらしい。言うまでもなく、洋式建築ではなく、和風建築(木造)であつた。しかし相当数の人数を収容することできたので、仏寺とは違って細長い矩形の建物であつたであろう。内部は二列の柱によって幅の広い身廊と両側のややせまい側廊に分かれ、正面には祭壇が設けられ、ローマのサンタ・マリア・マジョーレ大聖堂の聖母子画の写しが安置された。教会の外側にもかなり広い回廊が四面にめぐらされていた。建物の入口の正面にはイエズス会の紋章が飾られ、尖塔には燦然と十字架が掲げられていたのだろう。完成したのは、官兵衛の三回忌(後述)にあたつたので、より荘厳な式典を行った。

長政を翻意させた官兵衛の葬儀の様子については、すでに述べた(Q8参照)。ここでは、長政を始めとする黒田家の家臣たちの反応について教会側の記録を引用したい。

「後に我らの教会で彼の父のために営まれた葬儀の敬虔さ、盛大さ、成功によって、キリシタン宗団、我らの聖なる教え、司祭たちに対し愛を寄せるべきだという思いが甲斐守(引用者注 長政)に加わつた。その葬儀には、可能な限り多数の司祭、修道士たち、諸所から来た大勢の同宿の歌手たちとともに集まり、日本にある最高の飾りものと(聖)器具が(用いられた)。

列席した人たち、とりわけ、甲斐守と重立つた貴人と家来たち全員は仰天した。彼らは、(葬儀の)完璧、壮麗、荘厳、敬虔なること、そのような祭式において行われる習わしになっている教会のその他すべての儀式、教会の諸事についての信用と権威にとつてきわめて重要であるために万事を特別に念入りに行う司祭たちを、飽かず眺め目撃した。そのため、甲斐守とその他の人たちはあらゆるものを大いに褒め、賞賛してやまず、これに比べれば、仏僧たちが営む習わしになつていない葬儀はいかにも貧相なものと見なした。そのため、これらの日々は彼らにとって少なからぬ苦痛の時であつた。この間、また多くの(仏僧)が博多の街に集まり、葬儀に参列した者も若干いた。」(1603、04年の日本の諸事(フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集) 傍線引用者)

長政や黒田家の家臣たちが「仰天」し、「大いに褒め、賞賛してやまず」、「仏式の葬儀が貧相だとみなした」とまで記録している。もちろん、自画自賛で誇張されている可能性もあるが、かつて巡察師一行が大坂城の秀吉に謁見するために上京したときに、一行の服装や佇まいをみて、民衆が大いに称賛して、見物人があとを絶たなかつたことと同様に、キリスト教の儀式の荘厳な雰囲気は、人々の心を打つたのであろう(イエズス会は日本人に宣教するにあたって、日本人は見た目を重視するので、布教の際にその居住まいや雰囲気作りをしたことにより信者が増えた)。ろうそくが灯された吹き抜けた聖堂に、清らかな賛美歌が響きわたり、荘厳な雰囲気の中で営まれる官兵衛の葬儀は、参列した多くの人々に感動を与えたに違いない。私自身も冷やかしかつて出かけた東京お茶の水のニコライ堂教会でクリスマスのミサを見たことがあるが、ロウソクのあたりが灯された聖堂で、賛美歌が響いていて、とても荘厳な雰囲気であつたことを覚えている。もちろん、このような雰囲気を醸し出すことは、日本におけるキリスト教の布教戦略の一つとして、編み出されたものであつたのだが。

『黒田如水伝』には、シュタイチェン著『キリシタン大名』を引用し、「耶蘇教の僧侶が挙行した荘厳な葬儀は、一時、長政と耶蘇教とを結束する連鎖となつて、その関係を親密にさせた」と記している。また、バジェス著『日本耶蘇教史』にも、これと同様の記事があり、「四人の牧師、筑前博多に居住した。甲斐守長政は、このときに至るまで、あまり彼らを寵愛しなかつたが、耶蘇教信者であつた、その父シメオン(官兵衛)の死に及んで、その気色を変じた。・・・(中略)・・・葬式は荘厳に営まれ、甲斐守長政は一家を挙げてこれを援け、人々はみなこれを褒めた。異教の葬儀は華麗で人を感動させた点で、他はこれに遠く及ばない。甲斐守長政は師父らに謝意を表し、しばしば召して食事をさせた。また、自ら米千俵を寄付し、その臣下のすべて洗礼を受け、耶蘇教徒となつて生活することを許した。だから、この年、洗礼を施した者が、博多・秋月その他合せて800人に及んだ」

慶長10年(1605)は、官兵衛が亡くなってから1年後であるが、そのときも前年と同様、長政がキリスト教を保護していたことが、以下の記録から理解できる。

「博多の街は、下の諸国全体の中で最大の都市であり、その住人はことごとく、名望あり品行方正な商人たちである。この市のほとんどの住人は異教徒である。しかし、司祭たちがそこに常住しに行つてからは随分変わつてきた。そして、これには、父、(黒田)シメオン(官兵衛)の死後、甲斐守が教会と司祭たちに対し厚意や援助もまた大いにあづかつてゐる。彼は、この街であれ国のいづこであれ、自らの意思で改宗を望む人たちに妨げをしない。」(1605年の日本の諸事(フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集) 傍線引用者)

ちなみに、石城問答については、これらの教会側の記録からすると、慶長8年(1603)ではなく、その10年ほど後に行われたのであり、当時の宗教政策の状況から考えても、長政による年代の改ざんが疑われる。

（７）官兵衛の三回忌

官兵衛の葬儀を終えて、長政が本格的な教会建設を許可し、亡き父の追悼記念堂として建てられた教会堂が完成した。この年は、官兵衛の三回忌にあたったので、より荘厳な式典を行った。

『伴天連記』には、「慶長11年（1606）3月21日、官兵衛の追悼ミサが行われた。前日の荘厳な晩課から始まり、当日のミサは三人の司祭による荘厳なレクイエム・ミサでその頂点に達した。聖歌隊はそのときの音楽を担当した」とある。

イエズス会の準管区長バジオ神父は大勢の神父・修道士・同宿を伴って、公式に黒田長政を訪問することにした。また、その後、小倉において細川忠興を訪れ、そこで同じように、細川ガラシャの七回忌を行うことになった。バジオはこれらの式典をなるべく盛大に行うため、必要な人数を連れて行ったばかりでなく、美麗な祭服・祭具なども携えていった。また、追悼説教のため、当時の日本の宗教思想に最も通じていた修道士ファビアン不干を、わざわざ京都から呼び寄せた。

この式典に参加したマトス神父は、前記の回想録で次のように続ける。

「しばらくの後、長崎から準管区長フランシスコ・バジオ神父は多数の神父と修道士を連れて、我らの聖堂において官兵衛の葬祭を行うために来た。これに筑前殿およびその国の大身はみな参列した。その時にファビアンは一彼はのちに背教者となった一説教し、皆を大いに満足させた。またご隠居様、すなわち官兵衛の妻は神父に贈物をおくつたが、それは銀三十棒であつたか五十棒であつたか、もう覚えていない。そして殿は我らの家で食事をし、また城内での食事に我ら一同を招待した。

博多から準管区長神父は越中殿（細川忠興）の妻であつたガラシャ夫人の追悼式のため、小倉へ行った。その時、筑前殿は自分の厩舎から同宿やイルマンたちのため馬と乗り物を芦屋まで提供し、そこからはみな船で小倉へ行った。」

それは慶長11年3月21日（1606年4月28日）であつて、教会の諸行事は2日続いて行われた。すなわち最初は、キリシタン信徒を中心にして新しい教会の献堂式であつて、それは前日の荘厳な晩課、すなわち聖務のVesperaeから始まった。当日のミサは三人の司祭による荘厳ミサであつて、同宿の聖歌隊は、その時の音楽を担当した。

翌日は、黒田長政および国の大身を中心にした官兵衛の追悼ミサが行われた。それも、前夜の荘厳な晩課から始まり、当日は三司教による荘厳なレクイエム・ミサでその頂点に達した。

献堂式の荘厳なミサのときにも、官兵衛の追悼ミサのときにも、説教は信者よりもその時に大勢集まつてきた異教徒を対象に行われ、その中で、「我らの聖なる教えの真理と彼らの諸宗派の誤謬について」述べられたようだ。異教徒を対象にしていたので修道士ファビアン不干が説教した。彼は『仏法』という書に協力し、慶長10年（1605）に『妙貞問答』（注2）を自ら著したので、最適任者であつた（彼はのちに背教徒となる）。

これらの式典に続いて、黒田長政は宣教師全員を城に招いて宴会を開き、また官兵衛の未亡人光の方（照福院）は教会のため特別な寄付を送ったという。

そして、慶長11年（1606）～慶長12年（1607）あたりには、長政がキリシタンに厚意的であつたことを伺わせる他の記録もある。まず、豊前国から筑前にやってきた司祭を歓迎したという記録をみてみよう。

「ここから司祭は、（細川）越中殿から与えられた2隻の軽舟で筑前国の博多の街へ向かつて出発した。そこでもまた、その国の領主で、かつて甲斐守（と称し、今は）筑前守（と呼ばれる黒田長政）に大歓迎された。彼は、その国の領主となって以後、司祭と初めて会うので、彼を手厚くもてなしたいと望み待ち構えていた。」（1606、07年の日本の諸事（フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集））

また、この年においても長政はキリシタン保護に動いていることが読み取れる記録がある。

「長政はデウスの教えをたいそう優遇している。ここには我らの（イエズス会の）会員四名、すなわち司祭2名、修道士2名が居住し、彼らは、多数にのぼるすでにキリシタンになっている人たちの保持と新たに信徒になる人たちの改宗に従事している。」（1606、07年の日本の諸事（フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集））

また、教会堂が建てられ、布教活動が盛んであつた様子が描かれた記録もある。

「ここには、2年前に建てられた美しい教会がある。すこぶる荘厳に祝祭が催され、異教徒たちは驚嘆する。彼らはデウスに対する礼拝の儀式の美しさと、敬虔さ、調和、秩序を目にして驚き、これに基だ心を動かされて我らの聖なる教えを奉じる。・・・（注釈）・・・新たに神聖な洗礼を受けた人は千九百人以上に及んだ。これは博多の街においてである。」（1606、07年の日本の諸事（フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集））

（８）長政の弾圧

すでに天の巻（上巻）Q1で述べたことではあるが、キリシタンに厚意的であつた長政が、手のひらを返して弾圧したのは、「時代の流れを先見し、領国支配体制の確立を急ぐ長政にとって、何より急務となつたのは、せっかつつかんだ大名の地位を守ることであつた。したがって、中央政権（徳川幕府）が禁止した宗教を、領国内に弘めることは到底許されることではなかつたのである」（『物語福岡藩史』）とあるように、諸大名の改易が相次ぐ中で、所領を守り抜くためには「何でもやった」のである。

そして、（１）で述べたような弾圧に乗り出したのである。

長政は改宗したかのように幕府のキリスト教禁教令に従い、キリシタン弾圧に傾いていく。

まず、官兵衛の死の5年後、官兵衛の弟の惣右衛門ミゲル（直之）が亡くなり、領内からキリシタンの有力者がいなくなると、長政は直之の嫡男パウロ直基の死をきっかけに（暗殺も疑われている）、秋月の知行地を没収した。

ちなみに、秋月は2代藩主忠之のとき、長政の遺言で三男長興に5万石の所領で与えられるが、その頃には秋月でのキリスト教は絶えていて、いまは天主堂跡や残されたキリシタン灯籠やキリシタン橋に、わずかに往時の繁栄を偲ぶばかりである。

そして1613年（慶長18）2月25日、博多の妙典寺で、キリスト教と仏教の宗門対決を行わせた（俗に言う「石城問答」）（注3）。イルマン旧沢と京都妙覚寺（日蓮宗）の僧、唯心院日忠が対決したが、キリスト教側が敗訴となった。長政はこれを経て教会を破壊した。中洲の下流の那珂川の西中島橋（福岡市中央区天神）の傍らにあった教会跡地を日忠に与え、勝立寺が建立された。

こうして、幕府の禁教令が筑前国にも徹底され、官兵衛が目指したキリシタン王国の夢は絶えてしまったのである。

（注1）

次の点に注意が必要である。

- (1) 統計上の洗礼数は成人に限られており幼児は含まれていない。
- (2) 1604年までは博多ばかりでなく秋月・柳川など教会管轄全体が含まれている。両教会が独立したあとでも博多の欄には、城下町および周辺の「田舎」が含まれている。
- (3) 1603・12・13年の報告書には統計が挙げられていないため、推定が一部含まれたグラフとなっている。統計のない1603・12年の洗礼数を約3百、また1百人と推定している。

（注2）

『妙貞問答』とは、キリシタンの立場から仏教（12宗）、儒教（朱子学）、神道（唯一神道）を論破した3巻の書で、慶長10年（1605）京都で著された。浄土宗の妙秀とキリシタンの幽貞の両尼の問答形式をとり、キリシタン時代の日本人個人の著した唯一の体系的護教論書である。上巻（写本）は天理図書館蔵、中巻と下巻は「日本思想大系」25所収。

（注3）

「石城問答」とは、博多の妙典寺（現 福岡県福岡市博多区中呉服町）で、京都妙覚寺の僧日忠（日蓮宗の坊主）が、キリスト教徒イルマン旧沢や安都と行った宗論のことをいう。この宗論は博多の別名にちなんで「石城問答」と呼ばれる。

なお、イルマンとは、伊留満、入満とも書き、「神弟」「兄弟」を意味するキリシタン用語。イエズス会の修道者のうち、司祭職にある者をバードレpadreといい、バードレを補佐する者をイルマンという。キリシタン時代、イルマンを経てバードレに叙階されるのがふつうであった。また、信者の協働組織であるコンフリリアconfraria（組、講）の構成員もイルマンといった。

宗論に勝った日忠に対して、黒田長政は没収したキリスト教会の土地を付与し、勝立寺を建立させた。これらは起きたのは、慶長8年（1603）と公称されている。官兵衛が存命中にも関わらず長政がそんなはずがないことなどから、実は、もっと後の時期に行われた「石城問答」や教会の破壊を、あたかも慶長8年（1603）に行われたかのように偽装したのではないか、と言われている。ただ、教会側の記録には、明石掃部をかばいきれなくなった長政が俸禄を没収し、官兵衛や直之が掃部を直之の所領秋月に匿ったという記録も残っており、長政はまさにその年に本当に弾圧をしていた可能性もある。

鋭い方は、信長の時代に安土城で日蓮宗の朝山日乗とロレンソが宗論を戦わせ、キリスト教側が勝利したことをご記憶にいただろう。永禄12年（1570）、日乗は信長にキリスト教宣教師の追放を進言して却下され、たまたま信長を訪れていたロレンソに齋とルイス・フロイスと、信長の面前で宗論となり、日乗は1時間半ほど教えについて質問を重ねていたが、途中で怒って刀を抜こうとし、取り押さえられた。翌日、日乗は岐阜に帰ろうとする信長に再び宣教師の追放を進言したが、これも却下された。またキリシタンであった和田惟政を陥れようとして失敗し、天正元年（1573）頃に信長の寵を失って失脚した。

自分の信じていた宗教・宗派を論破され、怒って殺そうとしてしまった日乗の肩を持つわけではないが、キリスト教側は日本の在来の宗教や日本人の性質を研究しており、キリスト教の教理とその矛盾を理解して法論に臨まなければ、キリスト教側を論破することは難しかっただろうし、あるいは、信長の意図としては、キリスト教側を勝たせ、しつこい日乗を黙らせようとしていたかも知れない。

ちなみに、法論は仏教宗派間でも過去から行われており、代表例を挙げると、

- ・三一権実評論一法相宗の僧侶・徳一（生没年不明）と日本天台宗の祖・最澄（767年 - 822年）との間で行われた仏

教宗論で、平安時代初期の弘仁8年（817）前後から同12年（821）頃にかけて行われた。「一三権実論争」「三乗一乗権実評論」「法華権実論争」などとも言われる。

・応和の宗論一天台宗・法相（ほつそう）宗両宗の学匠が一切成仏（いつさいじょうぶつ）・二乗不成仏をめぐって行った論議をいい、応和3（963）に宮中で行われた。村上天皇は、8月21日から25日までの5日10座、南都北嶺の高僧各10人を清涼殿に招き法華会を催したが、その第2日夕座（ゆうざ）に問者であった天台宗の覚慶は、一切すべてのものが成仏できると主張したのに対し、講師であった東大寺の法蔵が、成仏できるのは菩薩と不定（ふじょう）の一部に限定されると法相宗の立場から反論して論争となった。

・大原問答一浄土宗の祖・法然が文治2年（1188）比叡山の顕真の要請に応じ、京都大原の勝林院で、明遍・証真・智海・貞慶ら諸宗の学僧と浄土念仏の教理を論議・問答し、信服させた宗論。大原談義ともいう。

・安土宗論一天正7年（1579）、安土城下の浄厳院で行われた浄土宗と法華宗の宗論。安土問答とも称される。織田信長の命により、浄土宗の僧貞安・霊誉等と、法華僧日珪・日諦・日淵らの間で行われた。法華宗は敗れて処罰者を出し、以後、他宗への法論を行わない事を誓わされた。

本題に戻ると、日乗のような運命をキリスト教側は迎えられた。この「石城問答」において、どうしてキリスト教側は負けたのか、宗教の優劣というよりも政治問題であり、長政の意図としては、キリスト教に土をつけることができれば（あるいは、極論するとどっちが勝っても別によかったかもしれない）、それを口実にキリスト教の教勢を削ぐことができるだろうし、幕府に反キリスト教のポーズをとることができたから、都合が良かったのだろう。

【Q16】 官兵衛がキリシタンだったことの影響 一弟、直之（惣右衛門）一

官兵衛の勧めで洗礼を受けた弟、直之。彼は所領秋月においてキリシタンを保護し、官兵衛の死後、筑前国でのキリシタンをリードした。官兵衛の生前・没後で、キリシタン政策がどのように推移したか、直之の事蹟の側面からみてみたい。

1・直之って、だれ？

天の巻（上巻）で一部紹介した。黒田直之（1564～1609）は、職隆の四男で、官兵衛の異母弟（生母は母里氏の娘）。幼名惣吉、通称惣右衛門、図書助。黒田二十四騎（注1）の一人（黒田八虎（注2）の一人でもある）。直之は熱心なキリシタンであった（洗礼名はパウロ）。関ヶ原の戦いの後、黒田家が筑前国に入封するのに従った。その後もキリシタン教団を保護し続けた熱心なキリシタンであり、イエズス会の書簡に度々登場している。

1609年度のイエズス会日本年報の中に、直之について次の追悼文が載っている。「今年、我らの主は、先年の年報でたびたび言及した秋月の領主黒田惣右衛門殿ミゲルをみ許に召し給うた。彼のおかげでこの秋月のレジデンシアが設立され、そこをはじめ、その周辺および彼の領地、またその国の内外に至るまで我らの主デウスのために多くの奉仕ができた。彼の病氣と死のためそのキリシタン団は大きな損失を受けたので、信者たちはみな非常に悲しんでいる。そしてここに幾つか感化になることを記しておこう」（1609年度のイエズス会日本年報）。このように秋月のキリシタンを保護してきた直之が、筑前のキリシタンにとっていかに重要な存在だったかが理解できよう。



黒田直之像

2・直之が筑前国に入るまで

直之は、永禄七年（1564）3月に姫路に生まれた。母は母里小兵衛の未亡人。最初は、兄と同じく秀吉の馬廻となり、のちに羽柴秀長に仕えて大和国郡山に住んだ。重臣の藤堂高虎と屋敷が隣同士であったという。その後、豊前国に入封した官兵衛に呼び戻された。九州平定戦のとき、官兵衛が戦友や家臣のあいだで熱心にキリシタンのことを呼びかけた結果、九州平定後の天正15年（1587）の中津城下での復活祭で、多くの武士に洗礼を受けた際、官兵衛の弟利高、子の長政とともにキリシタンになった（洗礼名ミゲル）。小田原の陣では官兵衛に同行し、北条家家臣由良新六郎の娘を妻とした。その妻もやはり後に洗礼を受けマリアと言われた、彼の三子もみな、熱心なキリシタンであったので、この一家こそ、典型的なキリシタン家庭であった。

朝鮮の役でも活躍した。関ヶ原の戦いの時には九州で官兵衛に従って出陣し、毛利秀包の居城久留米城の城番を務め、城内のキリシタンも保護している。秀包は官兵衛の勧めで受洗していたので、娘（母は大友宗麟）を直之に差し出している。

3・筑前入国後（@博多）

慶長5年（1600）に黒田長政が筑前一国を拝領した際に、直之は「御家門」として秋月領1万2千石を拝領した（『黒田三藩分限帳』）。

彼は官兵衛同様、熱心なキリシタンであった。官兵衛が国主の父という立場出会ったのに対して、彼は重臣の立場であったため、官兵衛よりも比較的自由な立場で信仰を貫くことができたのかも知れない。しかし、それは幕府の政策と藩主長政の意向に左右されていた。

それでは、筑前入国後、直之がキリシタン武将としてどのように行動したか具体的にみていこう。

（1）博多での教会の落成と、神父たちの秋月への一時退避

藩主長政がキリスト教政策に慎重（冷淡）であった様子が伺える記録がある。

「この国の両司祭館には、（イエズス）会の四人、司祭2名と修道士2名が居住している。そのうちの2人は通常、博多の街、そこにある修道院と教会にいる。他の2人は秋月に常駐してはいるが、より便利な場所なので、そこから、この国と筑後の国とに散在している全キリシタン宗団を救けに行く。今まで、博多のキリシタン宗団は勢いがあまりなかった。したがって司祭たちも遠慮していて、他の地方に比べて、自由に彼らを手助けができなかった。その理由は、この国の領主、（黒田）甲斐守（長政）が、その父、（黒田）シメアン官兵衛殿がキリシタンであるため、またその他の理由によってキリシタンに対し友好的であってよいはずなのに、今までキリシタンの諸事に対しあまり厚意的、（また）友好的態度を示さなかったからである。しかし本年（1604年）、父（官兵衛殿）の死を機会に、予想しなかったように大きな変化を見せた。」（1603、04年の日本の諸事（フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集））

黒田家が筑前国に入封してもすぐには、博多にキリスト教の布教拠点とは出来なかった。翌年1601年の末頃に博多に新しいレジデンスが完成している。長政はその頃、家康に対して極めて用心深かった。自分の洗礼を受けたことを全く隠し、宣教師の書簡でむしろ「異教徒」と言われるほどであった。ただ、官兵衛や直之の働きかけでキリシタンに理解を示してもいたようだ。家康のキリシタンに対する反感も知っていたので、藩主として迂闊には行動できなかったのだらう。

次の記録では、官兵衛や直之が司祭たちに、筑前領内での居住の許可申請を保留させており、その背景に家康の不興を買わないように長政が気を遣っていた可能性が伺える。

「ところで、司祭がこの（博多の）街と（黒田）甲斐守の領内に居住するための許可を彼にすぐに求めなかったのは、（黒田）官兵衛殿とその弟の惣右衛門殿が（次のように）考えたからである。すなわち、（甲斐守）は政庁におり、内府様の寵臣であり、当の内府様は、（小西）ドン・アゴスチノが自分に逆らい、戦ったことをまだ遺憾に思っていたので、この時しばしば、我らの聖なる教えとキリシタンに対してひどい言葉を吐いていた。そのため内府様の不興を買わないように甲斐守がそのような許可を拒む危険があるため今はこのことには触れず、彼が政庁からの帰国というような別のよりよい機会までこの要求を控えておくべきである、と。」（1601、02年の日本の諸事（フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集） 傍線引用者）

そのため、キリスト教団への積極的な援助は期待できなかったが、父官兵衛と叔父惣右衛門直之からの依頼があったので、教会の創設を条件付きで許可した。教会建築が外見上はわからないよう、普通の民家の形で建てるように命じ、一種の妥協策をとったのである。

「そして、その時（甲斐守の帰国後）彼の父と叔父がそのことについて話したところ、彼はそれを許可し、博多の同じ市内に彼らの居住する修道院と教会を作るためにすこぶる良く、便利な地所を司祭たちに与えた。実際には、司祭たちは定められた場所である都、大坂、長崎以外に住んではならぬ、またキリシタンをこれ以上新たに増やしてはならぬ、と内府様が禁じていたので、甲斐守は条件を一つつけた。それは次のようなものであった。すなわち、司祭たちは、宗教的な僧侶の外観を呈するような教会や修道院を建ててはならず、その街の名望ある市民の家屋か何かのようにする。また、布教や聖務をこれ見よがしに行わず、我らの競争者である異教徒たちが内府様に不満や非難を訴えないように、万事、控え目に用心深く行動すること、と。」（1601、02年の日本の諸事（フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集） 傍線引用者）

家康が「司祭たちは都、大坂、長崎に住む」ように命じていて、これらの街で布教は許可していたようであるが、博多ではそれに抵触しないように教会ではない外観の建物ということと、表立って布教しないようにと条件を付けてた。

長政が教会の建設をいつ許可したはつきりわからないが、1601年9月30日付のイエズス会日本年報ではまだこれに言及していないので、それよりあとであったと思われる。

司祭たちはその条件通りに控えめに行動していたが、博多に修道院と教会堂が出来たことで、信徒たちが喜び、キリシタンではない人たちも説教を聞きに集まっているのをみて、長政に告げ口をした者がいた。反キリスト教勢力の者たちは、もしこのようなことが家康の耳に入らば、長政の立場を危うくするだろうと、長政にかなり強く訴えた。

「司祭は地所を専有する以前から用心深く慎重に行動していた。しかし、司祭たちを容認することも我慢することも絶対にできない、我らの不倶戴天の敵である仏僧たちは、司祭がかの街に入ったことによって、キリシタンが大い

に喜び、少なからぬ異教徒がデウスのことや教理の説教を聞きに集まるのを見て、彼らの一人である、信望が厚く権威のある男が（黒田）甲斐守のもとに赴いて、（こう）言った。「当地にいる伴天連とイルマンはこれ見よがしにその職務を行っている。そして、キリシタンや仏教徒の人出は大変なものなので、もし殿がそれに対し方策を講じないならば、この件が内府様の耳に届き、何らかの災いが殿に起こらざるをえないであろう」と。このため（黒田）甲斐守は憤慨し、それゆえ司祭と修道士は博多を出て、（黒田）惣右衛門の領地へと移り、それによって彼がさらに熱心になる機会を提供することになった。」（1601、02年の日本の諸事（フェルナン・ゲレイロ編イエズス会年報集））

長政の側近にもキリシタンがいて、教会側でこの反対運動を知り、神父が一時博多を去るほうがよいと思い、1601年の末から1602年頃、神父たちは一時、直之の所領秋月に避難したという記録がある。

長政は四十万石前後の大藩の藩主であったから、当然領内にはいろんな勢力がおり、家臣の中には対キリスト教政策に慎重を期すように上申する者もいただろうし、日蓮宗をはじめとする仏教勢力は長政に訴えていたようだ。

ただ、その後直之の働きかけで、長政は司祭たちの博多への復帰を許した。直之は建物を教会に寄進したと記録されている。

「キリシタンたちは司祭のこの不在をたいそう悲しんだ。彼らには自分たちの期待がすべて裏切られ、司祭が自分たちの街にいるという喜びがすっかりなくなるように思われた。それは主として、早くも仏僧たちが、まるで何か大勝利したかのように勝ち誇るのを見たからである。しかし、我らの主は、彼らの悲しみが長くは続かぬことを嘉し給うた。なぜなら、惣右衛門殿がただちに甲斐守に話し、真相を伝えたからである。（甲斐守）は、これにより、また司祭の出国を自分の父も悲しんでいるのを見て、同じ地所を再び快く（司祭）に与えた。そしてただちに彼を街に復帰させたので、キリシタンたちは彼の出国を悲しんだのに劣らずすこぶる喜んだ。

司祭がその地所を専有すると、キリシタンたちは、彼がいることになったので非常に喜んだ。彼らの一人はただちに司祭のために数棟の家屋を購入し、それらを自費でもってその地所に建て、また他の人たちは別に2棟を与えて建てたのである。（黒田）惣右衛門殿はすこぶる大きく、立派なのを一棟与え、また他の人たちは銀（子）で援助した。したがって、（イエズス）会は一文も費やすことなしに、この修道院はきわめて順調に始まった。司祭たちが、時勢に合わせて用心深く行動していなかったら、それはすべて不首尾に終わっていたであろう。」（1601、02年の日本の諸事（フェルナン・ゲレイロ編イエズス会年報集））

（２）明石掃部（全登）の保護

Ｑ10で紹介したように、教会側の史料には、1601年頃にキリシタン武将、明石掃部の知行地を没収し、その後、明石掃部は家臣の大半を黒田家に預けて、一部の家臣たちと共に秋月に移り、直之から所領を与えられた。

長政が明石掃部の所領を没収したのも、別の理由はなく、家康を恐れてのことだったと記録されている。

4・布教の様子 (@秋月) ほか (1601~7年頃)

前項で紹介したように、直之は秋月で教団関係者や信徒を匿ただけではなく、布教を保護したため、秋月ではキリスト教の教勢が盛んになっている。

(1) 布教の様子 (@秋月) (1601年頃)

直之の所領秋月でイエズス会を援助している様子が次の記録だ。毎年2千俵というと約800石に相当し、直之の知行の約7%を寄進している計算になる。

「佐賀から筑前の国へ旅が行われ、その国では(イエズス)会員たちは秋月地方を巧みに巡回した。この地方にはキリシタンの民衆が各所に居住しており、そこでは(黒田)惣右衛門(直之)がキリシタンたちを援助するために、己が農地の収穫物から毎年2千俵収穫できる分を保留している。聖主キリストを礼拝している人々は、悔悛の秘蹟によって己が罪を浄めたからである。この地方の重立った城では、(黒田)惣右衛門殿の家来が有益な告白によって、己が魂の病氣を取り払った。」(1601年度イエズス会日本年報 傍線引用者)

次の記録は、肥後国から筑前国に移動してきたキリシタンを秋月で保護した様子が書かれている。小西行長が関ヶ原の戦いで改易になり、行長の所領であった肥後南部は加藤清正に与えられた。小西行長から保護されていたキリシタンたちは加藤清正が異教徒(日蓮宗)だったこともあり、保護者を失い他国へゆくこととなったが、それを直之は所領秋月で庇護している。書きぶりから、直之が庇護したのは、教団関係者というより、加藤家に仕官できなかった小西家の家臣たちであったかも知れない。

「これらのキリシタンが肥後を脱つのに先立って、筑前の国の領主(黒田)甲斐守の叔父である(黒田)惣右衛門殿は、彼らに(加藤)主計の地を離れる許可がすでに下りていることを知り、多くの者が嘗て欠乏、困窮を見て彼らに言った。「あなた方はまず国を出たら、たいして遠く離れてはいない予の領地に落ち着かれるがよい。他の地で扶持がもらえるようになるまでそこでゆっくり休養し滞在することができるであろう。その身柄と家財の(移動の)ためには必要な人員と馬を遣わそう」と。そして、彼らが必要としているその他のものを提供するとともに、すぐに多額の銀子を送った。」(1601、02年の日本の諸事(フェルナン・ゲレイロ編イエズス会年報集))

(2) 筑前国外での活動 (1603~4)

さらに、直之は筑前だけではなく、他の地方でもキリシタンのために働いている。かつて戦友であった福島正則に働きかけて、その城下町広島で教会を再会することに成功したばかりでなく、1604年に京都から九州へ行く途中、福島正則を訪れ、自分の費用で広島の伝道所を立て直している。

「そして、彼の熱意は遙か遠隔の他の地域にも及んでいる。というのも、すぐに言及することだが、広島の我が有する司祭館は、デウスに次いで彼(の尽力)に帰することができるからである。それは、彼が、その街と諸国の領主であり、それ(司祭館)を求めた中心人物である福島(正則)殿の親しい友人だからである。」(1603、04年の日本の諸事(フェルナン・ゲレイロ編イエズス会年報集))

福島正則自身はキリシタンではなかったが、尾張時代からキリシタンを保護し、家臣の中にもキリシタンがいたといわれている。「ずっと以前すでに都にいる時から司祭たちと知り合いであり、つねに彼らに好意的(かつ)友好的であった。」(1603、04年の日本の諸事(フェルナン・ゲレイロ編イエズス会年報集))と記録されている。

また、次の記録に、福島正則とキリスト教の教義を話している様子が描かれている。正則は肉欲を律するキリスト教に抵抗を感じないとまで言っている。直之と福島正則はともに若い頃からの親友であったとされている。ともに、秀吉の家臣であった時期がある。

「この時、(黒田)惣右衛門殿〔既述した筑前国の領主(黒田)甲斐守の叔父〕が福島(正則)殿を訪ねて来た。両人は子どもの頃からの親友だからである。そして我らの教義の話になった時、福島殿は、それに救済があると悟ったり、喜んですぐに奉じるであろう、と言った。その時そこに同席していた異教徒の一人が、我らの教えは肉欲的快楽を厳しく禁じているので日本の領主には不都合であると答えると、彼は(こう)言った。『予に難しいのはそのことではない。この教えに救済があることが確実に判れば、そのようなことはどうでもよい。だが、時間があるので、説教を聞くことにしよう』と。(後略)」(1603、04年の日本の諸事(フェルナン・ゲレイロ編イエズス会年報集) 傍線引用者)

(3) 布教の様子 (@秋月) (1604年頃)

官兵衛が亡くなった年(1604年)に秋月のレジデンシアがはじまった。そこで、直之の多くの家臣が洗礼を受け、また秋月の城下町やその他の地方において多くの農民や商人が受洗していたと記録されている。

「この1604年には博多の街と秋月、そして筑後の国で、八百人近くの異教徒が受洗した。この改宗の大半は、(黒田)甲斐守の叔父、(黒田)ミゲル惣右衛門殿の領地、秋月でなされた。彼は、自領地で豊かな実を結んできており、(現在も)日々結びつづけるのが判るのだが、優れたキリシタンであり、デウスへの奉仕にこの上なく熱心である。・・・(中略)・・・司祭は秋月で(惣右衛門殿)の庇護下にある。ここで非常な成果を収め、この地はたいそう条件が整っているので、全土および、すでに改宗が始まっている他の多くの近隣の地をキリスト教化することが大いに期待される。」(1603、04年の日本の諸事(フェルナン・ゲレイロ編イエズス会年報集) 傍線引用者)

(4) 布教の様子 (@秋月) (1605年頃)

官兵衛が亡くなった翌年の1605年も、相変わらず秋月でのキリスト教布教は盛んであった。

「秋月はこの同じ筑前の国にある土地である。黒田長政の叔父で優れたキリシタンがその領主である。彼は、その全家臣をキリシタンにしようと全力をあげて努めている。この領主は自領に司祭を居住させることができた。そして、そこで、すでにキリシタンになっている人たちの教化と異教徒の改宗にきわめて大きな成果をあげている。本年、三百人以上の異教徒が受洗し、大いなる敬虔さと盛儀をもってそこで祝祭が催されている。そして、聖週間には、筑後、肥前、豊後というような近隣諸国に分散している多数のキリシタンたちが何里も離れたところから来訪し集合した。筑後の国のキリシタンは、秋月に居住している司祭の管轄下にある。」（1605年の日本の諸事（フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集） 傍線引用者）

（５）布教の様子（@秋月）（1606～7年頃）

この頃も教会側の記録に不安を感じられない。

「司祭は博多から、筑前国の秋月へと陸路向かった。筑前では、その土地の領主で、筑前守の叔父、黒田惣右衛門殿が彼を待っていた。彼はキリシタンなので、彼から、またそのすべての家臣から大歓迎され宿を提供された。司祭はその新教会の守護聖人の祝日を祝った。」（1606、07年の日本の諸事（フェルナン・グレイロ編イエズス会年報集））

当時の日本では、幕府がキリスト教に対して穏健な政策をとったこともあり、キリスト教の教勢が盛んとなった様子が、レオン・パジェス著『日本切支丹宗門史』に記録されている。

「當時、日本にはマカオや支那にゐた日本の教区に属する者を除いて、121人のイエズス会員がゐた。日本の修道者達は、分れて2箇所の学林、同じく2箇所の中央の駐在所、1箇所の修業所、及び23箇所の伝道所に分れてゐた。
・・・（中略）・・・

日本には、當時75萬人のキリシタンがゐた。この年、新に洗礼を受けた者は、5千5百人あり、長崎だけで1千2百人以上もあった。新に改宗した者の中には、富裕な商人と、可なり多数の武士がゐた。

若干の大名は、堂々と好意を寄せてゐた。三箇國の領主である肥前殿（前田利長）、安芸と備後を領し広島に城市を持つ福島ファヤドノ（福島正則）、長岡越中殿（細川忠興）、博多に城市を持つ筑前殿カミドノ（黒田筑前守）、柳河に城市を持つ田中兵部殿（田中吉政）の如き、之であつた。内府様の寵臣で、京都の所司代板倉殿（板倉勝重）及び上野殿（本多上野介正純）も亦修道者に力をかすことを憚らなかつた。そのお蔭で、キリシタン宗は、首府の中ですら安全であつた。

京都に、昔よりずっと美しい天主堂が、新たに建てられた。公方様の居城伏見でも、同じく天主堂と住宅とが建てられた。

長崎の町は、瞬く間に拡大し、住民は挙げてキリシタンで、又世俗の富を求めて来た異教徒と多数の商人達は、金銀なしに贖ひ得る精神的の富を得て、物質的にも精神的にも富裕になって、彼等の故郷に帰って行つた。長崎は、司教の常住の地で、イエズス会の主要な学林と大きな駐在所があつた。司教の授品を受けた最初の日本人が、最も広大で町の人の出入の多い聖母の天主堂の主任司祭に挙げられた。

1605年に、初めて盛大な聖体行列が行はれた。信者の熱心は驚くべきもので、聖体行列に与かることを第2の洗礼と心得てゐた。宣教師達は、注意して彼等に十分この恩寵を得させるやうにした。」（『日本切支丹宗門史』第7章 慶長10年（1605年） 傍線引用者）

多少長めに引用したが、慶長10年（1605）頃のキリシタンが75万人というのは、当時の日本の人口推計値1,200～1,700万人（注3）の4.4～6.3%となる。また、筑前国の人口は122,800人（注4）といわれており、博多と秋月で信徒は少なくとも1万人以上いたであろうから、領内人口の少なくとも1割はキリシタンだったと思われる。1割程度だと多数派とはいえないが、秀吉が警戒したように、大名やその家臣たちのような影響力が強い者がキリシタンとなったことで、その教勢は強まっていた。

5・死への準備、そして臨終（1608年頃）

（1）死への準備

しかし、1608年頃から直之の健康は次第に衰えていった（このとき40歳）。その年の冬、かろうじて江戸までの旅をして将軍に拝謁した。

「日本中でそれとして知らされているこの善良なキリシタンは、御降誕祭の数日前、関東地方から帰って来た。彼は将軍に礼を表示するため、そこへ行ったのである。」追悼文（1609年度イエズス会日本年報）

しかし、九州に帰ってから、状態がますます悪化していった。そこで彼は死の準備にとりかかった。「そのとき彼はすでに病弱しており、そして状態は日ごとに悪化してゆくを感じていたので、余命は余り長くないだろうと思って、熱心に死の準備にとりかかった。」（1609年度イエズス会日本年報）

病気のあいだキリスト教を熱心に学んだ。「こうして病気のあいだ、神父が彼の城内でよく整えてあった小聖堂でミサを挙げたとき、彼はしばしば告解し、聖体を拝領した。その時に彼の休憩と気晴らしになったのは、日中、いな夜中でさえ何度も読書をし、時にはジェルソン（捨世録）、時にはギヤ・ド・ペカドウル（罪人の導き）を読み、これをきっかけにデウスのことについて語るのを楽しみにしていた。そのとき彼が特に深く感じ、たびたび涙ながらに話したのは、自分は容易にできたはずなのに、まだ余り功德を積むに至らなかったことであった。」（1609年度イエズス会日本年報）

九州に帰ってから静養していたのは福岡城下だと思うが、病状が良くならないので、長政との相談のうえ、彼はまた京都に行き、京都の医師のもとで静養することになった。京都は日本の名医が集まっていると言われていたからである。海路大坂に行き、そこで教会を訪れて秘跡を受け、京都に向かった。

「ところが、彼は秋月でなかなか快復する見込みでなかったので、筑前の国の領主で彼の甥にあたる筑州には、彼はみやこに行くほうが良いとみえた。そこに日本の最も良い医師がいるから、彼はそのとおりにした。」（1609年度イエズス会日本年報）

（2）遺言

死を覚悟した直之の不安の種は、自分の子供たちとキリシタン信徒たちの保護であった。自分が死んだらどうなってしまうのだろうか。長政が口先だけで信用ならないからであった。そこで、直之は長政の書状で言質をとっている。

「死ぬだろうと覚悟していたので、彼は自分のことを全部よく処理しておくように配慮した、それはほかでもなく、自分の甥でかの国の領主である筑州すなわち筑前殿一彼を余り信用していなかった—に自分の知行を3人の遺子に与え、また自分が生きている間行ったように、かの筑前の国のキリシタンをみな自由にその教えに従って生かせるように願った。彼はすべての信徒がその支えにしていた唯一の柱であり、また彼のおかげでみな自由に生活ができたから、このようなことを願った。そして彼は人々の靈魂の善を気にかけており、またかの国における我らの聖なる教えの保持と弘布を望んでいたから、自分が死んでのち恐らく危うくなるだろうと心配していた。甥（引用者注 長政）は特にこの2番目の点に驚きながらも、2つとも認め、これに関して一通の書状を彼に与えた。このことは彼にとって大きな慰めと喜びとなり、さっそく神父の方にも、自分が死んでもかの国のキリシタンたちは何も心配する必要はないから安心してよい、と知らせた。」（1609年度イエズス会日本年報 傍線引用者）

また、長男直基に遺言状を認め、

「その中でこの子が彼の息子として一生のあいだキリシタンの教えを守り、決してそれをやめないように、またその兄弟と家臣にもその教えを守らせるように書き残し」（1609年度イエズス会日本年報 傍線引用者）している。他の遺言はなかったかどうかは以下の史料以外には持ち合わせていないが、若い息子が逆境の中でも信仰を貫けるかどうか、直之にとって非常に関心事だったのだろう。

そして、自分の遺骸を長崎に埋葬するように命じている。

「彼はその遺骸を長崎へ持っていき、多くのキリシタンの祈祷にあずかるためにそこへ埋葬してもらいたいと指示しておいたのであった。」（1609年度イエズス会日本年報）

官兵衛は博多の教会に埋葬することを遺言したが、直之は領内ではなく、長崎という領外に埋葬することを望んだ。その意味は何だったのだろうか。明石掃部の子は長崎に葬られていて、キリシタンとしては長崎のキリシタン墓地に葬られることを望むのは自然なようにも思える。しかし、直基にキリシタンとして生きることを厳命したことや、長政に言質をとったこと、といい、もしかしたら自分の死後に筑前のキリシタンがどのような運命を辿るか、先が見えていたのではないだろうか。長政からキリシタン保護の言質をとれば数年くらいは大丈夫・・・しかし、そのあとはどうなるか・・・直基が心配だ・・・自分が秋月の教会に葬られても、長政は教会を破壊してしまうかも知れない・・・であれば、長崎の方が安全かも知れない・・・

現段階では推測に過ぎない。今後の研究に期待する。

（3）臨終の様子

しかし、もはや医師も手のほどこしやがたく、臨終を迎える。

「こうして惣右衛門殿ミゲル（引用者注 直之）は、都の方へ出かけたが、ようやく灰の水曜日の前夜に大坂に着いたとき、すでにたいへん疲れて衰弱していた。さっそくこの神父に告解し、自分も同行の人も、灰〔の儀式〕を受け、それから大坂より一日路ほど離れた都へ出発した。自分はもうじき死ぬだろうと分かっていたので、彼はまた告解し、臨終の聖体を頼んだ。そのために彼の家でミサを挙げたとき彼は聖体を拝領し、その翌日に聖なる秘跡を受けた。

臨終が近づくと、もう一度神父たちを呼ぶように命じた。そしてたびたび痛悔の念を起こし、目を敬虔にある十字架に向け、またそこに居合わせた不熱心なキリシタンに対して次のような話しをした。

『もしあなたが救われたいならば、大いに信心の業を行ない、掟を完全に守りなさい。このような道であなたも救いを得られるだろう。』

また彼を都まで伴ってきた一人の異教徒の医師に、次のように言った。

「私はいつもあなたがその間違った考えと行ないから目覚めてくれるように望んだが、聞いてくれませんでした。しかしこの時になって、私は最も心から申し上げたく、またもっと確実に私の居る道をあなたに勧めようとしています。こうして私は切にお願いします。もしキリシタンにならなければ、あなたには救いがありません。そうなりますように心からお願いします。」

そしてあの異教徒はこれを忠実に約束した。

このように彼は絶え間なくイエズス（引用者注 イエス）とマリアの聖名を唱え、じっと目を十字架に向けながら、極めて静かに、平和のうちに息絶えた。」（1609年度イエズス会日本年報）

官兵衛の臨終のときには異なり神父が呼ばれた。自分が死んだら今後筑前のキリシタンはどうなってしまうのだろうと心配し、また、家臣たちを全員キリシタンにしようとしたがそれは果たせず仕舞いであった後悔の思いがあったのだろう。直之の表情は「極めて静かに、平和」であったのだろうが、彼の内心はどうだったのだろうか。後生の一大事は晴れたのだろうか。

直之は、慶長14年（1609）2月3日に亡くなった。

6・葬儀（1609年頃）

直之の葬儀は、秋月の教会堂で行われ、多くの諸侯とともに信徒など1万人の参列があったという。

「それでまず彼の遺骸を領地であった秋月へ運び、そこでかの国の大身たちやその他大勢の人々が盛大な行列でこれを迎え、そして彼が建てた我らの教会堂で、追悼式を行った。彼は極めて優れた人格者であり、またこの地の領主であったから、人々にたいへん愛され尊敬されていたので、その葬儀のため、キリシタンも異教徒も一人ほど集まってきた。」（1609年度イエズス会日本年報）

葬儀の具体的な様子についてのこれ以上の記録は残念ながら持ち合わせていない。ただ、官兵衛のときと同様であろう（規模の違いはあったかも知れないが）（なお、官兵衛の葬儀の様子については、Q 8 参照）。

7・埋葬

遺言に従って、直之の遺骸は長崎のキリシタン墓地に埋葬された（1610年度イエズス会年報）。

「我らが確信しているように、我らの主なるデウスの直観に入った。彼はその遺骸を長崎へ持っていき、多くのキリシタンの祈祷にあずかるためにそこへ埋葬してもらいたいと指示しておいたのであった。・・・（中略）・・・（いったん秋月に運んで追悼式をしたあと）それから彼の遺骸を長崎へ運び、そこでキリシタンとして、貴族として、名誉ある人物として、彼にふさわしい盛大さをもって埋葬したのである」（1609年度イエズス会日本年報 傍線引用者）

貝原益軒の『黒田家臣伝』には、彼の墓所は不明とされている。禁教令が出て長崎の墓地に埋葬された事実も隠滅されていたのだから、無理もないだろう。惣右衛門の次男正直に続く黒田家は（長男直基は2年後に死去）、のちに博多光明寺を菩提寺にして代々を供養している。

8・長男直基の死、秋月の知行地を没収

長政はキリスト教を棄て、熱心なクリスチャンである黒田直之の嫡子直基に改宗を迫った。ちょうどその時、直基は急死したのである。不行跡を働いた家臣を手打ちにしようとして反撃され斬殺されたのである。しかし、それは暗殺だった可能性もある。

黒田官兵衛の葬儀の際、その柩をかついでいたキリシタン武士の一人であった。

1611年イエズス会日本年報では、

「彼（引用者注 直基）は大胆な若者であっただけに、ある過失を犯した部下を自らの手で討ったが、その時にこの処刑された者の一人の部下に注意していなかったので、彼もまた、その主人の死の復讐として殺された。」

長政はパウロ長門守直基の死を好機として、次男・三男の相続は許されず、秋月の知行地を没収した。キリシタン王国・秋月は長政の頭痛の種であったが、キリスト教を弾圧、秋月の天主堂を破壊し、信徒はことごとく追放、処刑された。

幕府のキリシタン弾圧もあり、長政は苦悩の末、父官兵衛の葬儀や直之が建立した秋月の教会を含め、黒田家がかかわってきたキリシタンの由来を藩史から抹殺していったのだろう。

なお、秋月は二代忠之のとき、長政の遺言で三男長興に5万石の所領で与えられるが、その頃には秋月でのキリスト教は絶えていて、いまは天主堂跡や残されたキリシタン灯籠やキリシタン橋に、わずかに往時の繁栄を偲ぶばかりである。

長崎の教会にあった直之の墓を博多の明光寺に改葬し、「前図書助高源院殿永峯道長居士」と仏教めいた戒名を付けることで、幕府の眼を晦まそうとした。

9・ここ最近の動き

2011年7月に、直之は明光寺から香正寺（福岡市中心区警固）に改葬されている。長年供養する人がいないため、明光寺では無縁仏の墓として改葬することを検討。墓がなくなるとを心配した福岡藩士の子孫と香正寺の尽力で墓が移され、手厚く供養されることになった。香正寺には毛利秀包の娘（毛利家の人質として筑前に送られた娘を、直之が養女として引き取った）が葬られている。

香正寺は1632年、日延上人によって開かれた日蓮宗の寺。日延上人は朝鮮王族で、豊臣秀吉の朝鮮出兵の捕虜として加藤清正に育てられた。僧侶となり、後に黒田忠之とその母の帰依を受けた。

直之の養女、長光院よしは、15歳で重臣吉田重成に嫁いたが、1609年に養父直之が亡くなると、夫がキリスト教を嫌うようになったことを、彼女は手記に書き残している。

直基の死後、次男、三男の相続は許されず、直之の妻マリアも筑前を離れた。後に次男は許されて黒田家に戻り、香正寺の墓碑はこの次男とその子孫によって仏式にて造りなおされた。

（注1、2）

黒田二十四騎とは、賤ヶ岳の七本槍に倣い、戦国大名・黒田長政の家臣の中から24人の精鋭を選出した呼称。18世紀上旬の享保年間の頃には成立している。この24人の中でも更に優れた8人を黒田八虎（＊）と呼ぶ。長政を含めて黒田二十五騎とする場合もある（以下は、五十音順）。

井上之房＊
小河信章
菅正利
衣笠景延
桐山信行
久野重勝
黒田一成＊
栗山利安＊
黒田利高＊
黒田利則＊
黒田直之＊
毛屋武久
後藤基次＊
竹森次貞
野口一成
野村祐勝
林直利
原種良
堀定則
益田正親
三宅家義
村田吉次
母里友信＊
吉田長利

黒田二十四騎の紹介については、本書では省略する。シリーズ刊にて紹介予定。

（注3）

1600年の日本の人口推計の根拠論文は以下の通り。

根拠論文① 人口12,273,000人：

鬼頭宏（1996年）（a）鬼頭宏，「明治以前日本の地域人口」『上智経済論集』41巻（1-2号），pp. 65-79（1996）。（b）鬼頭宏，『人口から読む日本の歴史』，講談社，2000。

なお、鬼頭 宏氏は、日本の歴史学者。専門は日本経済史・歴史人口学。上智大学経済学部教授。

根拠論文② 人口12,000,000人：

Biraben（1993,2005年）（a）Jean-Noël Biraben, "Le Point sur l'Histoire de la Population du Japon," *Population* Vol. 48（no. 2）, pp. 443-472（1993）。（b）Jean-Noël Biraben, "The History of the Human Population From the First Beginnings to the Present" in "Demography: Analysis and Synthesis: A Treatise in Population"（Eds: Graziella Caselli, Jacques Vallin, Guillaume J. Wunsch）Vol 3, Chapter 66, pp 5-18, Academic Press, San Diego, 2005.

根拠論文③ 人口15,000,000～17,000,000人：

Farris（2006,2009年）（a）William Wayne Farris, "Japan's Medieval Population: Famine, Fertility, and Warfare in a Transformative Age," University of Hawaii's Press, Honolulu, 2006.（b）William Wayne Farris, "Daily life and demographics in ancient Japan", *Michigan monograph series in Japanese studies* no. 63, Center for Japanese Studies, University of Michigan, Ann Arbor, 2009.

（注4）

（a）鬼頭宏，「明治以前日本の地域人口」『上智経済論集』41巻（1-2号），pp. 65—79（1996）. （b）鬼頭宏，『人口から読む日本の歴史』，講談社，2000.

上・中巻の終わりに

天の巻（中巻）では、官兵衛の晩年から死に至る時期のキリシタンとしての事蹟、官兵衛の生き方にキリスト教がどのように影響を与えたかを中心に見てきた。

それから、官兵衛が亡くなってからの長政や弟直之を巡るキリシタン政策の動き、番外編で明石掃部（官兵衛の親戚）についても、見てきたが、これらは、官兵衛がキリシタンだったことによって、黒田家にどのような影響を与えたか、ということ在意図したものだ。

関ヶ原の戦いの勝利に官兵衛が貢献したことによって、家康は官兵衛に配慮して、キリシタンをいったんは黙認したと言われる。そこまで大きな影響を官兵衛が与えたこともあって、キリスト教は空前の盛り上がりを見せた。そういう意味では、官兵衛が意図したキリシタン王国の建設は一時的ではあるが、成功したといえよう。官兵衛の人物像として描かれるものに、天下を狙っていたが、取り損ねた残念な武将だったという人物像というものがある。しかし、それとはまったくかけ離れた“成功者”としての側面があり、生き方にヒントとなる多くがあることを、この本を通してみなさんにお伝えしたかった。

下巻を刊行する予定であるが、下巻ではどちらかというと、官兵衛以外の人物をみていくことによって、官兵衛の生き方との違いを浮き彫りにしたいと考えている。

初心者の方が読んでも、すんなり理解できるような、一般に流布している解説本のような本は、今後、出版予定だが、それについても、若干違った切り口も織り交ぜながら、書いていきたいと思う。

平成26年1月24日

官兵衛の眠る博多の地にて
著者しるす

巻末史料

官兵衛 関連年表

和暦 （西暦） 年齢	官兵衛に関係が深い事項	一般的な事項
天文15 （1546） 1	11月 姫路城で生まれる（姫路城主小寺職隆の長男、幼名は万吉）。	
弘治元 （1555） 10		1月 毛利元就が陶晴賢を厳島で破る。
永禄2 （1559） 14	11月 母（明石氏）が亡くなる。	
〃 3 （1560） 15		5月 織田信長が桶狭間で今川義元を討ち取る。
〃 4 （1561） 16	小寺職隆の近習として御着城に出仕（禄高81石）。	
〃 5 （1562） 17	父、職隆に従い、初陣。	
〃 7 （1564） 19	2月 祖父重職が亡くなった。	
〃 10 （1567） 22	家督を継ぐ。光姫と結婚。	
〃 11 （1568） 23		9月 信長、足利義昭を擁して上洛。
〃 12 （1569） 24	5月 青山合戦（赤松政秀を破る）	
元亀元 （1570） 25		6月 信長、姉川の戦いで、浅井・朝倉連合軍を破る。
天正3 （1575） 31	7月 織田家に従属するため、使者として岐阜に赴く。	5月 信長・家康連合軍、長篠・設楽原の戦いで、武田勝頼を破る。
〃 4 （1576） 31	4月 英賀合戦（毛利方の浦宗勝を破る） 9月 松寿丸を人質として差し出す。	2月 信長、築城中の安土城に入る。
〃 5 （1577） 32	1月 秀吉が中国計略のため播磨に下向。居城姫路城を秀吉に提供。 11月 作用城（福原城、西播磨）攻略。上月城攻略。	1月 信長に謀叛した松永久秀、信貴山城で自害。
〃 6 （1578） 33	2月 別所長治が叛旗を翻す。 5月 宇喜多直家が織田方に転じる。 1月 摂津国有岡城に幽閉される。	7月 上月城が落城。 11月 木津川河口の戦いで、織田水軍が毛利水軍を破る。
〃 7 （1579） 34	1月 有岡城落城。官兵衛が救出される。	6月 竹中半兵衛、平井山の陣所で病没。
〃 8 （1580） 35	2月 小寺政職が御着城から出奔。官兵衛は小寺姓を捨て、黒田姓に復姓。 3月 人質となっていた松寿丸が黒田家に戻される。 4月 国府山城を築き、これに移る。 6月 因幡、伯耆の国境に出兵。 9月 播磨国揖東郡に1万石を与えられる。	1月 三木城の別所長治が自害し、開城。
〃 9 （1581） 36	3月 揖東郡が増され、2万石となる。 6月 因幡国鳥取城攻め。 7月 淡路国志賀城に入り、四国の長宗我部元親に備える。	1月 鳥取城の吉川経家が自害し、開城。
〃 10 （1582） 37	3月 備中国に出陣。 4月 宮路山城攻め。 冠山城攻め。長政の初陣。 高松城攻め。 6月 山崎の戦いで明智光秀を破る。	6月2日 本能寺の変で信長が明智光秀に包囲され自害。 6月27日 渭洲会議にて織田家の後継者及び領地再配分問題の決着。
〃 11 （1583）	8月 大坂城の普請総奉行として秀吉から5箇条の掟を受ける。	4月 賤ヶ岳の戦いで、秀吉が柴田勝家を破る。

38	9月 大坂城築城開始。	
＃ 12 (1584) 39	1月 秀吉の媒酌で、長政に蜂須賀正勝の娘を迎える。 3月 蜂須賀正勝とともに、毛利、宇喜多との国境画定のため中国に赴く。	4月 尾張の長久手で、池田恒興・元助父子、森長可が徳川軍に討たれる。
＃ 13 (1585) 40	5月 4月攻めの軍監として、讃岐・阿波に進攻。阿波国岩倉城を攻める。 8月 父、戦隆が亡くなる。	7月 秀吉、関白に就任。
＃ 17 (1589) 44	3月 杭地のため、肥後に赴く。 4月 長政、宇都宮鎮房を中津城で刺殺する。長政、城井谷に兵を送り、宇都宮一族を撲滅する。 5月 家督を長政に譲る。	5月 秀吉の長男鶴松誕生。
＃ 18 (1590) 45	3月 小田原攻めのため京都を出発。 山中城の戦いで、妹婿の一柳直末が戦死。 6月 小田原城に入り、北条氏政、氏直に講和を説得。	7月 北条氏直が降伏を申し出、北条氏政・氏照は切腹を命じられる。
＃ 19 (1591) 46	8月 肥前国で名護屋城の縄張りを行う。	1月 豊臣政権を支えるナンバー2である秀長が死去。 2月 千利休が切腹を命じられる。 12月 秀吉は関白職を養子の秀次に譲る（太閤と呼ばれるようになる）。
文禄元 (1592) 47	5月 秀吉の訓令を奉じて朝鮮に渡海し、漢城にて諸将と軍議をする。 8月 秀吉の許可を得て帰国。	3月、秀吉、京都をたち肥前国名護屋城に向かう。 5月 日本軍、漢城を占領。 7月 日本水軍、李舜臣率いる朝鮮水軍に敗北（閑山島、安骨浦の戦い）。
＃ 2 (1593) 48	2月 秀吉の命で再度朝鮮に渡海。東萊城での囲碁事件（浅野長政と囲碁をして三成ら奉行を待たせて怒りを買う） 7月 秀吉の許可なく帰国し、秀吉の怒りを買う。剃髪して如水円清と号する。	1月 碧蹄館の戦い後、戦線が膠着し講和の動きが起こる。 8月 秀吉、次男秀頼誕生。
＃ 3 (1594) 49	8月 長政に5か条の教訓を書き渡す。 秀吉は長政の朝鮮での武功に免じて、如水の軍紀違反を許す。	2月 秀吉、吉野の花見を行う。
＃ 4 (1595) 50	8月 京都滞在の費用補填のため、播磨国揖東郡で2千石の加増を受ける。	7月 秀吉の甥秀次が高野山で切腹させられる。
慶長元 (1596) 51		閏7月 山城大地震で伏見城倒壊。 9月 秀吉、朝鮮再出兵を決意。
＃ 2 (1597) 52	2月 朝鮮再征で渡海軍の主将の小早川秀秋の補佐を命じられる。 6月 秀秋と共に釜山に上陸し、朝鮮各地での日本式城郭の築城を指導。	
＃ 3 (1598) 53	1月 梁山城に来襲した明軍8千をわずかな兵で撃退。 4月 秀吉の命で帰国し、伏見で戦況報告。 12月 中津を出発し、伏見の新邸に入る。	11月 明の大軍が漢城に到着し、蔚山城の攻防戦ははじまる。
＃ 4 (1599) 54	12月 家康に暇をもらい、中津に戻る。	3月 秀吉、醍醐の花見を行うが、その後体調を崩す。 8月 秀吉死去。 朝鮮から撤兵命令が出される。
＃ 5 (1600) 55	9月9日 長政、9千の兵を率いて中津を出発。 9月13日 如水、石垣原の戦いで、大友義統の軍勢を破る。 10月14日 小倉城を落とす。 10月18日 久留米城を開城させる。 10月25日 立花城（柳川城）を開城させる。 11月15日 中津城に凱旋。 12月8日 長政と共に筑前国名島城に入る。 12月31日 大坂に上り、家康と会見。	閏3月 前田利家死去。 石田三成襲撃事件で、三成が奉行職を免じられ、居城の佐和山に退く。
＃ 6 (1601) 56	この年、福岡城の築城開始（福岡の地を福岡と改称）。 完成までは大宰府の庵に住む。 福岡城下に教会堂を建てる。	
＃ 7 (1602) 57	5月 伏見に上り、家康に拝謁したあと、伏見の黒田藩邸に入る。	
＃ 8 (1603) 58	1月 大坂に上り、高台院（秀吉の正室おね）を見舞う。 2月 福岡に戻る。 4月 神屋宗湛の茶会に出席。 8月 上洛。 11月 有馬温泉に湯治し、越年する。	2月 家康、征夷大將軍に任じられる。 7月 秀頼に徳川秀忠の娘千姫が嫁ぐ。

” 9 (1604) 59	2月 伏見に戻っていた如水の病状が悪化。福 岡にいた長政は如水の見舞いのため伏見に上 る。 3月 伏見の藩邸で死去。	
---------------------	---	--

(「黒田如水―百姓の罰を恐るべし―」小和田哲男著 の巻末年表に加筆修正して作成)

参考文献

- 「十六・七世紀イエズス会日本報告集松田毅一監訳」松田毅一監訳 同朋舎
- 「完訳フロイス日本史4 豊臣政権Ⅱ 秀吉の天下統一と高山右近の追放」ルイス・フロイス著 中央公論新社
- 「完訳フロイス日本史5 豊臣政権Ⅱ 「暴君」秀吉の野望」ルイス・フロイス著 中央公論新社
- 「完訳フロイス日本史11 大村純忠・有馬晴信Ⅲ 黒田官兵衛の改宗と少年使節の帰国」ルイス・フロイス著 中央公論新社
- 「日本切支丹宗門史」レオン・パジェス／[著] 岩波文庫
- 「キリシタン大名」ミカエル・シュタイシェン著、吉田小五郎翻訳 乾元社
- 「キリシタン研究」キリシタン文化研究会 吉川弘文館
- 「九州キリシタン新風土記」 浜名志松著 地方・小出版流通センター
- 「日本キリスト教宣教史 ザビエル以前から今日まで」中村 敏著 いのちのことば社
- 「日本史小百科＜キリシタン＞」H.チースリク（監修）太田淑子著 東京堂出版
- 「新訂黒田家譜索引・家譜年表」川添昭二校訂 文献出版
- 「黒田如水伝」金子堅太郎著 博文館
- 「黒田如水」福本日南著 東亜堂書房
- 「黒田如水 臣下百姓の罰恐るべし（ミネルヴァ日本評伝選）」小和田 哲男著 ミネルヴァ書房
- 「関ヶ原前夜」光成準治 NHKブックス
- 「秋田県の不思議事典」野添憲治編 新人物往来社

.....
キリシタン武将 黒田官兵衛
ー「軍師」官兵衛の実像 天の巻（中巻）ー
（Ver 1.2.）
著者：西山隆則（黒田官兵衛生きるヒントラボ）
発行日：2014年1月24日
当コンテンツは著作権保護の対象です。
.....

【著者略歴】

福岡市生まれ。歴史研究家。
普段は企業経営や投資アドバイス業務、広告ビジネスを営む。
戦国～安土桃山時代を中心に、幅広いデータベースを駆使して、歴史関連の著作物を刊行。城郭、神社仏閣、茶の湯、書画骨董の情報発信をはじめ、NHK大河ドラマの解説記事の発信を行っている。
東京大学経済学部経営学科卒業後、公認会計士登録。上場会社数社の監査経験と、一般事業会社での役員を経て、独立。
（なお、生きるヒントラボは宗教団体、政治団体等とは一切関係ありません。）